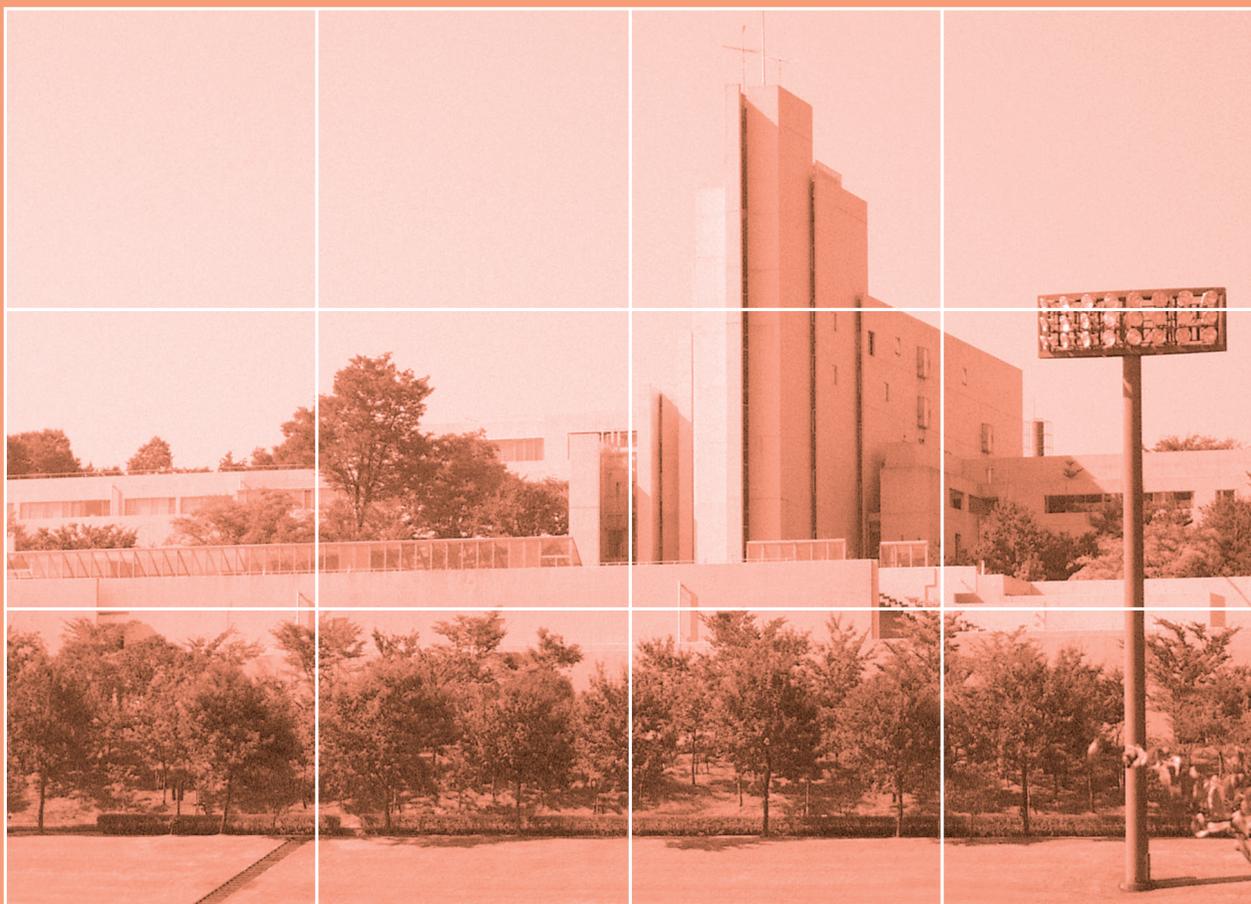


早稲田大学

大学院人間科学研究科 要項

2007

GRADUATE SCHOOL of HUMAN SCIENCES
WASEDA UNIVERSITY





早稲田大学教旨

早稲田大学ハ学問ノ独立ヲ全ウシ、学問ノ活用ヲ效シ、模範国民ヲ造就スルヲ以テ建学ノ本旨ト爲ス。

早稲田大学ハ学問ノ独立ヲ本旨ト爲スヲ以テ、之カ自由討究ヲ主トシ、常に独創ノ研鑽ニカメ以テ世界ノ学問ニ裨補セン事ヲ期ス。

早稲田大学ハ学問ノ活用ヲ本旨ト爲スヲ以テ、学理ヲ学理トシテ研究スルト共ニ、之ヲ實際ニ応用スルノ道ヲ講シ以テ時世ノ進運ニ資セン事ヲ期ス。

早稲田大学ハ模範国民ノ造就ヲ本旨ト爲スヲ以テ、個性ヲ尊重シ、身家ヲ發達シ、国家社会ヲ利濟シ、併セテ広ク世界ニ活動ス可キ人格ヲ養成セン事ヲ期ス。

2007年度大学院人間科学研究科暦

行 事		日 程
大学院入学式		2007年 4月 2日 (月)
前 期	前期開始日	4月 1日 (日)
	前期授業開始日	4月 9日 (月)
	授 業 終 了	7月31日 (火)
	夏 季 休 業	自 8月 1日 (水) 至 9月20日 (木)
9月学位授与式		9月20日 (木)
後 期	後 期 開 始 日	9月21日 (金)
	後期授業開始日	9月29日 (土)
	創立記念日	10月21日 (日)
	冬 季 休 業	自 12月23日 (日) 至 2008年 1月 7日 (月)
	授 業 終 了	2月 4日 (月)
	春 季 休 業	自 2月 5日 (火) 至 3月31日 (月)
学 位 授 与 式		3月25日 (火)

[行事等]

創立125周年記念行事に伴う休講：10月20日 (土)

体育祭 (授業休講) : 11月2日 (金)

早稲田祭 (授業休講) : 11月3日 (土)・4日 (日)

夏季一斉休業期間 : 8月13日 (月)～8月17日 (金)

年末年始一斉休業期間 : 12月29日 (土)～2008年1月5日 (土)

[成績発表]

修士2年生以上、修士1年制コース : 2008年2月29日 (金)

修士1年生、博士後期課程 : 2008年3月21日 (金)

目 次

2007年度大学院人間科学研究科暦	
I 大学院人間科学研究科沿革	1
II 大学院人間科学研究科の理念	2
III 大学院人間科学研究科の研究領域	2
IV 早稲田大学大学院学則(抜粋)	4
V 早稲田大学学位規則(抜粋)	10
VI 修士論文・課題研究論文作成に関して	12
VII 博士論文作成に関して(課程による者)	15
VIII 人を対象とした研究および動物実験に関する倫理指針	17
IX 研究生制度について	17
X 人間科学研究科学科目配当	18
XI 修了要件・学科目の履修方法	20
XII 教育職員免許状取得について	26
XIII 学費	38
XIV 学生生活等	40
1. 学籍番号	40
2. 学生証(身分証明書)	40
3. 各種証明書の交付	41
4. 諸願および諸届	41
5. 各種補助	42
6. 所沢総合事務センター	43
7. 掲示	43
8. 交通機関のストライキと授業	43
9. 気象警報の発表と授業休講・試験延期等の措置	44
10. 自転車・自動車・オートバイの駐輪場・駐車場の利用について	46
11. 総合健康教育センター所沢分室	47
12. 早稲田大学学生健康保険組合	47
13. 奨学金制度	48
14. 学生教育研究災害傷害保険	48
XV 所沢図書館および中央図書館の利用について	49
XVI 研究指導・演習・講義科目の概要	52
XVII 全学共通設置科目の概要	127
XVIII 教員名簿	140
2007年度大学院人間科学研究科学科目配当表	143

I 大学院人間科学研究科沿革

早稲田大学では創立100周年記念事業の一環として、1987年4月に森と湖に囲まれた狭山丘陵に所沢キャンパスを開設した。この狭山所沢キャンパスには、旧来の学問体系を基盤とする既存の学部とは異なる、人間を中心においた総合科学を形成する新しい人間科学部が創設された。ここには同時に大学内の共同利用研究施設として、人間総合研究センターが開設されて、人文科学・社会科学・自然科学にわたる学際的な人間総合科学の研究プロジェクトが展開されることとなった。

早稲田大学大学院人間科学研究科の設置は、人間科学部の設置準備段階で提案されていたものであるが、学部発足後まもなく、その完成年度に大学院人間科学研究科を開設することが教授会で承認され、設立準備検討委員会が具体的な活動を始めた。1990年の学内理事会において、人間科学研究科という名称のもとに、人文科学・社会科学・自然科学の多様な分野を含む、生命科学専攻と健康科学専攻を擁する大学院を設置する計画が承認され、その後文部省に申請して認可された。

1991年4月に人間科学研究科の修士課程として24の研究指導が開設され、2年後の1993年3月には49人の修士(人間科学)を送り出した。これに続いて、1993年4月には博士課程として19の研究指導が設置され3年後の1996年3月には、課程内学位論文審査により4人の博士(人間科学)が誕生した。翌1997年からは課程外学位論文の審査も開始された。

2004年度までに、837人が修士号を取得し、課程内・課程外あわせて、176人が博士学位を取得している。これら修了生や学位取得者は、人間科学の種々の分野での研究の成果を活かして、教育・研究機関、官公庁、企業・マスコミなど、社会の各分野で活躍している。

2000年度以降には、社会人入試の開始、研究指導の再編成と人間科学専攻への一本化、入学定員の増加などを通して、新しい人間科学研究科の創造と展開に取り組んでいる。

2004年9月に人間科学部・人間科学研究科からなる人間科学学術院が組織されたのを機に、2006年度より、5つに分けられていた研究領域を8つに分けることで、研究・教育の内容の特徴を明確に打ち出した。

また、社会的ニーズに敏速且つ柔軟に応え、2007年度より社会人入試の一環として修士課程1年制コース(教育臨床コース)を開設し、実践的・高度職業人の育成に努めている。

Ⅱ 大学院人間科学研究科の理念

人間科学研究科では、科学技術の飛躍的な進歩のなかで失われた人間性を回復するために、人間と環境の調和や心身の健康の維持増進などを通して生活の質の向上に貢献するような、人間を中心においた総合科学を形成することを目的としている。このために、人間の誕生から老化までの全生涯にわたる発達のプロセス、精神活動と身体活動の両面から把握できるような研究を展開し、あわせて、その方向の専門性をもった研究者を養成する。

このような人間の総合的な理解のために、人間科学研究科ではきわめて多岐にわたる研究がおこなわれているが、それら相互に連携をもたせるために、各研究指導を地域・地球環境科学研究領域、人間行動・環境科学研究領域、文化・社会環境科学研究領域、健康・生命医科学研究領域、健康福祉科学研究領域、臨床心理学研究領域、感性認知情報システム研究領域、教育コミュニケーション情報科学研究領域の8つの研究領域に分け、人間科学専攻を構成している。

各研究領域に所属する学生は、所属する研究指導の演習に専念するだけでなく、同じ研究領域内の関連する多様な講義や演習、他の研究領域の講義科目などを広く履修して、学際的な人間総合科学の全体像を把握し研究を行う。

Ⅲ 大学院人間科学研究科の研究領域

人間科学研究科にある地域・地球環境科学、人間行動・環境科学、文化・社会環境科学、健康・生命医科学、健康福祉科学、臨床心理学、感性認知情報システム、教育コミュニケーション情報科学の8研究領域のそれぞれの内容は次のとおりである。

【博士後期課程・修士課程(2年制)】

(1) 地域・地球環境科学研究領域

本研究領域では、持続可能な社会の構築に向けて、地域・地球環境を自然科学および社会科学の分野から解析することを目的とする。自然科学分野では生態学、環境科学など、社会科学分野では環境社会学、人口学、人類学などの研究を行う。また、自然と地域社会との統合的な視野を大切にし、国際的水準の研究・教育能力を有する研究者や実務家などの優秀な人材を育成する。

(2) 人間行動・環境科学研究領域

本研究領域では、環境と人間の複雑多様な関係のあり方について、物理的、社会的、文化的環境を人間が創り出し、自ら創出した環境によって人間が形づくられる、という双方向性に等しく注目し、その関係のあるべき姿について心理学および建築学を中核とした学際的な研究を行う。また、環境創造と人間の心理行動発達の双方向の視野に立ち、国際的水準の研究・教育能力を有する研究者や実務家などの優秀な人材を育成する。

(3) 文化・社会環境科学研究領域

本研究領域では、日本をはじめ、アジア、アフリカ、中東、欧州、北南米などを対象として、実践的なフィールドワークと文献研究を駆使した文化と社会の解読を目的とする。さらに、社会科学、人文科学の多様な領域を横断する学際的な研究を通じて、現代社会の諸問題の解明および多文化・多民族共生の持続可能な社会の構築に向けて、人間総合科学としての体系的な研究・教育能力を有する研究者や専門的能力に秀でた実務家などの人材を育成する。

(4) 健康・生命医科学研究領域

本研究領域では、健康科学と生命科学の研究領域とを融合させることにより、生命現象の本質を解剖学、生化学、生理学、栄養学、内分泌学、免疫学、神経科学、バイオメカニクス等の立場から解明すると共に、健康の増進や生活の質の向上、疾患の一次予防を視野にいたした健康科学の確立を目指す。併せて、これらの領域における国際的水準の研究・教育能力を有する人材を育成すると共に、研究成果を踏まえて、健康に関わる行政、教育に対しても有意義な提言を行える人材を育成する。

(5) 健康福祉科学研究領域

本研究領域では、現代社会に求められている人間の健康医療福祉の充実を目指し、医学および人間工学・支援工学、福祉ロボット開発・産業化、ならびに社会保障政策、老年社会福祉、障害児福祉、幼少児福祉教育の研究、さらにスポーツ健康マネジメントや緩和医療学など、多方面から健康福祉を調査研究する。その成果を健康福祉政策・行政や実践に反映させるとともに、行政や実践の場で活躍できる国際的水準の人材を育成する。

(6) 臨床心理科学研究領域

本研究領域では、現代社会に求められている心身の健康の維持増進にかかわる心身医学、認知行動カウンセリング学、学校カウンセリング、心理臨床学、行動臨床心理学を中心に研究を展開する。さらに、臨床心理学の基盤的な研究から実践的な研究を通じて、臨床心理科学研究と心理臨床実践の双方の能力を兼ね備えた心身の健康の維持増進に携わる国際的水準の人材を育成する。

(7) 感性認知情報システム研究領域

本研究領域では、人間の「感性」を感覚－知覚－認知という一連の情報処理プロセスの中に位置づけ、生体情報をベースに、感性、情動、言語、イメージなどの心の構造と機能ならびにその測定法を研究する。さらに、認知科学、情報科学、人間工学、システム工学などの基盤的研究から実践的研究を通じて、さまざまな人間の営みにおける安全性、快適性、生活の質の向上に貢献する国際的水準の人材を育成する。

(8) 教育コミュニケーション情報科学研究領域

本研究領域では、学際的な視点に立ち、教育やコミュニケーションと情報科学とを融合して、高度情報化社会における人間の営みと情報行動について探究する。多様性を尊重しながら、快適さを追求する人間中心のシステムと社会の在り方を、国際的な視野から多面的に研究するとともに、従来の研究分野にとらわれず、文理融合・理工連携を図り、人間社会にとって有用なシステム開発研究を行い、体系的な国際的水準の研究・教育能力を有する人材を育成する。

－2005年度以前入学者対象－

スポーツ科学研究領域

スポーツ科学研究領域では、スポーツにかかわる諸問題を自然科学や社会科学や人文科学の手法によって学際的に研究する。また、競技スポーツの必要な技能向上にかかわる指導方法、組織の在り方について、理論と実践からの研究と人材育成を行う。

【修士課程1年制コース】

(1) 教育臨床コース

本コースでは、総合的・科学的な視野をもった実践的方法論の習得を目指す。また現役職業人の勉学・職業の両立を可能とする勉学機会の拡大を考慮しながら社会人の育成を目指す。児童・生徒の立場に立脚し、集団生活の基盤である学級での教育法を習得し、個々の多様性や個性を重視した指導方法等にかかる知識・方法論を修得する。

IV 早稲田大学大学院学則（抜粋）

第1章 総 則

（設置の目的）

第1条 本大学院は、高度にして専門的な学術の理論および応用を研究、教授し、その深奥を究めて、文化の創造、発展と人類の福祉に寄与することを目的とする。

（博士課程）

第2条 本大学院に博士課程をおく。

2 博士課程の標準修業年限は、5年とする。

3 博士課程は、これを前期2年、後期3年の課程に区分し、前期2年の課程を、修士課程として取り扱うものとする。

4 前項の前期2年の課程は、「修士課程」といい、後期3年の課程は、「博士後期課程」という。

5 修士課程の標準修業年限は、2年とする。

6 前項の規定にかかわらず、修士課程においては、主として実務の経験を有する者に対して教育を行う場合であって、教育研究上の必要があり、かつ、昼間と併せて夜間その他特定の時間または時期において授業または研究指導を行う等の適切な方法により教育上支障を生じないときは、研究科、専攻または学生の履修上の区分に応じ、標準修業年限を1年以上2年未満の期間とすることができる。

（課程の趣旨）

第3条 博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、またはその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を養うものとする。

2 修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力または高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養うものとする。

（研究科の構成）

第4条 本大学院に次の研究科をおき、各研究科にそれぞれの専攻をおく。

研 究 科	課 程	
	修 士 課 程	博 士 後 期 課 程
人間科学研究科	人間科学専攻 (生命科学専攻) (健康科学専攻)	人間科学専攻 (生命科学専攻) (健康科学専攻)

第2章 教育方法等

（教育方法）

第6条 本大学院の教育は、授業科目および学位論文の作成等に対する指導（以下「研究指導」という。）によって行うものとする。

（教育方法の特例）

第6条の2 本大学院の課程においては、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間または時期において授業または研究指導を行う等の適当な方法によって教育を行うことができる。

（履修方法等）

第7条 各研究科における授業科目の内容・単位数および研究指導の内容ならびにこれらの履修方法は各研究科において別に定める。

- 2 学生の研究指導を担当する教員を指導教員という。
- 3 本大学院の講義、演習、実習などの授業科目の単位数の計算については、本大学学則第12条および第13条の規定を準用する。

(他研究科または学部の授業科目の履修)

第8条 当該学術院教授会または研究科運営委員会(以下「研究科運営委員会等」という。)において、教育研究上有益と認めるときは、他の研究科の授業科目または学部の授業科目を履修させ、これを第13条、第13条の2または第13条の3に規定する単位に充当することができる。

(入学前の既修得単位の認定)

第8条の2 当該研究科運営委員会等において教育研究上有益と認めるときは、本大学院に入学する前に本大学院または他大学の大学院(外国の大学の大学院を含む。)において修得した単位(科目等履修生として修得した単位を含む。)は、10単位を超えない範囲で、第13条に規定する単位に充当することができる。

(授業科目の委託)

第9条 当該研究科運営委員会等において教育研究上有益と認めるときは、他大学の大学院(外国の大学の大学院を含む。)と予め協議の上、その大学院の授業科目を履修させることができる。

- 2 前項の規定により履修させた単位は10単位を超えない範囲で、これを第13条に規定する単位に充当することができる。

(研究指導の委託)

第10条 当該研究科運営委員会等において、教育研究上有益と認めるときは、他大学の大学院または研究所(外国の大学の大学院または研究所を含む。)と予め協議の上、本大学院の学生にその大学院等において研究指導を受けさせることができる。ただし、修士課程の学生について認める場合には、当該研究指導を受ける期間は、1年を超えないものとする。

(単位の認定)

第11条 授業科目を履修した者に対しては、試験その他の方法によって、その合格者に所定の単位を与える。

(試験および成績評価)

第12条 授業科目に関する試験は、当該研究科運営委員会等の定める方法によって、毎学年末、またはその研究科運営委員会等が適当と認める時期に行う。

- 2 授業科目の成績は、A⁺・A⁺・B⁺・C⁺・Fの五級に分ち、A⁺・A⁺・B⁺・C⁺を合格とし、Fを不合格とする。
- 3 前項の規定にかかわらず、学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、必要な学修を考慮して単位を認めることができる。なお、成績は、P、Qの二級に分ち、Pを合格とし、Qを不合格とする。

第3章 課程の修了および学位の授与

(修士課程の修了要件)

第13条 修士課程の修了の要件は、大学院修士課程に2年以上在学し、各研究科の定めるところにより、所要の授業科目について所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院修士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。

- 2 前項の場合において、当該修士課程の目的に応じ適当と認められるときは、特定の課題についての研究の成果の審査をもって修士論文の審査に代えることができる。
- 3 2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分にあつては第1項の前段に規定する在学年数については、当該標準修業年限以上在学するものとする。

(博士課程の修了要件)

第14条 博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に5年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学し、各研究科の定めた所定の単位

を修得し、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に3年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学すれば足りるものとする。

- 2 第2条第6項の規定により標準修業年限を1年以上2年未満とした修士課程を修了した者および第13条第1項ただし書の規定による在学期間をもって修士課程を修了した者の博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に修士課程における在学期間に3年を加えた期間以上在学し、各研究科の定めた所定の単位を修得し、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に3年(修士課程における在学期間を含む。)以上在学すれば足りるものとする。
- 3 前2項の規定にかかわらず、第29条第2号、第3号および第4号の規定により、博士後期課程への入学資格に関し修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者が、博士後期課程に入学した場合の博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に3年以上在学し、各研究科の定めた所定の単位を修得し、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。
- 4 博士論文を提出しないで退学した者のうち、博士後期課程に3年以上在学し、かつ、必要な研究指導を受けた者は、退学した日から起算して3年以内に限り、当該研究科運営委員会等の許可を得て、博士論文を提出し、試験を受けることができる。

(博士学位の授与)

第15条 本大学院の博士課程を修了した者には、博士の学位を授与する。

(修士学位の授与)

第16条 本大学院の修士課程を修了した者には、修士の学位を授与する。

(課程によらない者の博士学位の授与)

第17条 博士学位は、第15条の規定にかかわらず、博士論文を提出して、その審査および試験に合格し、かつ、専攻学術に関し博士課程を修了した者と同様に広い学識を有することを確認された者に対しても授与することができる。

第5章 学年、学期および休業日

(学年および学期)

第25条 本大学院の学年は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

2 学年は次の2期に分ける。

前期 4月1日から9月20日まで

後期 9月21日から翌年3月31日まで

(休業日)

第26条 定期休業日は、次のとおりとする。

- 一 日曜日
- 二 国民の祝日に関する法律に規定する休日
- 三 本大学創立記念日(10月21日)
- 四 夏季休業 8月上旬から9月20日まで
- 五 冬季休業 12月下旬から翌年1月7日まで
- 六 春季休業 2月中旬から3月31日まで

2 夏季、冬季、春季休業期間の変更または臨時的休業日については、その都度公示する。

3 休業期間中でも、特別の必要があるときは授業を行うことがある。

第6章 入学、休学、退学、転学、専攻の変更および懲戒

(入学の時期)

第27条 入学時期は、毎学期の始めとする。

(修士課程の入学資格)

第28条 本大学院の修士課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について、入学を許可する。

- 一 大学を卒業した者
- 二 学校教育法第68条の2第3項の規定により学士の学位を授与された者
- 三 外国において通常の課程による16年の学校教育を修了した者
- 四 文部科学大臣の指定した者
- 五 大学に3年以上在学し、または外国において学校教育における15年の課程を修了し、本大学院において、所定の単位を優れた成績をもって修得したものと認められた者
- 六 各研究科において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者で、22歳に達した者

(博士後期課程の入学資格)

第29条 本大学院の博士後期課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について入学を許可する。

- 一 修士または修士(専門職)もしくは法務博士(専門職)の学位を得た者
- 二 外国において修士もしくは修士(専門職)の学位またはこれに相当する学位を得た者
- 三 文部科学大臣の指定した者
- 四 各研究科において、個別の入学資格審査により、修士または修士(専門職)もしくは法務博士(専門職)の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者で、24歳に達した者

(入学検定の手続)

第30条 本大学院に入学を志願する者は、第40条に定める入学検定料を納付し、必要書類を提出しなければならない。

(入学手続)

第31条 入学を許可された者は、別に定める入学金および授業料等を添えて、本大学院所定の用紙による誓約書、保証書および住民票記載事項証明書を指定された入学手続期間中に提出しなければならない。

(保証人)

第32条 保証人は、父兄または独立の生計を営む者で、確実に保証人としての責務を果し得る者でなければならない。

- 2 保証人として不適当と認められたときは、その変更を命ずることができる。
- 3 保証人は、保証する学生の在学中、その一身に関する事項について一切の責任を負わなければならない。
- 4 保証人が死亡し、またはその他の理由でその責務を果たし得ない場合には、新たに保証人を選定して届け出なければならない。

(在学年数の制限)

第33条 本大学院における在学年数は、修士課程および専門職学位課程にあつては4年、博士後期課程にあつては6年を超えることはできない。

- 2 前項の規定にかかわらず2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分における修士課程および専門職学位課程の在学年数にあつては当該標準修業年限の2倍を超えることはできないものとする。

(休学)

第34条 病気その他の理由で引き続き2カ月以上出席することができない者は、休学願書にその理由を付し、

保証人連署で所属する研究科の研究科長に願い出なければならない。

- 2 休学は当該学年限りとする。ただし、特別の事情がある場合には、引続き休学を許可することがある。この場合、休学の期間は通算し修士課程および専門職学位課程においては2年、博士後期課程においては3年を超えることはできない。
- 3 前項の規定にかかわらず2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分における修士課程および専門職学位課程の通算年数にあつては当該標準修業年限を超えることはできない。
- 4 休学期間中は、授業料の半額を納めなければならない。
- 5 休学者は、学期の始めでなければ復学することができない。
- 6 休学期間は、在学年数に算入しない。

(専攻および研究科の変更等)

第35条 専攻および研究科の変更または転入学に関する願い出があつた場合には、当該研究科運営委員会等の議を経てこれを許可することができる。

(任意退学)

第36条 病気その他の事故によって退学しようとする者は、理由を付し、保証人連署で願い出なければならない。

(再入学)

第37条 正当な理由で退学した者が、再入学を志望したときは、選考の上これを許可することがある。この場合には、既修の授業科目の全部または一部を再び履修させることがある。

(懲戒)

第38条 学生が、本大学の規約に違反し、または学生の本分に反する行為があつたときは懲戒処分に付すことがある。

2 懲戒は、戒告、停学、退学の3種とする。

(処分退学)

第39条 次の各号の一に該当する者は、退学処分に付す。

- 一 性行不良で改善の見込みがないと認められる者
- 二 学業を怠り、成業の見込みがないと認められる者
- 三 正当の理由がなくて出席常でない者
- 四 本大学院の秩序を乱し、その他学生としての本分に著しく反した者

第7章 入学検定料・入学金・授業料・演習料・実験演習料および施設費等

(入学検定料)

第40条 本大学院に入学を志願する者は、第30条の定める手続と同時に別表に定める入学検定料を納めなければならない。

(入学時の学費)

第41条 入学または転入学を許可された者は、入学金、授業料、演習料、実験演習料および施設費等を指定された入学手続期間内に納めなければならない。

(授業料等の納入)

第41条の2 学生が納めるべき入学金、授業料、施設費、演習料および実験演習料は、別表のとおりとする。

(授業料等の納入期日)

第42条 前条の入学金、授業料、施設費、演習料および実験演習料の納入期日は次のとおりとする。ただし、入学または転入学を許可された者が第41条の規定により指定された入学手続期間内に納める場合は、この限りでない。

第1期分納期日 4月15日まで

第2期分納期日 10月1日まで

(納入学費の取扱)

第43条 すでに納入した授業料およびその他の学費は、事情の如何にかかわらず返還しない。

(中途退学者の学費)

第44条 学年の途中で退学した者でも、その期の学費を納入しなければならない。

(抹 籍)

第45条 学費の納入を怠った者は、抹籍することがある。

第9章 科目等履修生

(科目等履修生)

第51条 第27条から第29条までの規定によらないで、本大学院において授業科目を履修しようとする者または特定課題についての研究指導を受けようとする者があるときは、科目等履修生として入学させることができる。

(科目等履修生の種類)

第52条 官公庁、外国政府、学校、研究機関、民間団体等の委託に基づく者を委託履修生という。

2 前項に定める履修生以外の者を一般履修生という。

(科目等履修生の選考)

第53条 科目等履修生として入学を志願する者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上入学を許可する。

(科目等履修生の履修証明書)

第54条 科目等履修生が履修した科目について試験を受け、合格したときは、単位を授与し、本人の請求によって証明書を交付する。

第10章 研究生

(研究生)

第57条 本大学院博士後期課程に6年間在学し、博士論文を提出しないで退学した者のうち、引き続き大学院において博士論文作成のため研究指導を受けようとする者があるときは、研究生として入学させることができる。

(研究生の選考)

第58条 研究生として研究指導を受けようとする者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上入学を許可する。

(研究生の入学手続、学費および在学期間等)

第59条 研究生の入学手続、学費および在学期間等については別に規程をもって定める。

(正規学生の規定準用)

第60条 研究生については、本章の規定および別に定める規程によるほか、正規の学生に関する規定を準用する。

V 早稲田大学学位規則（抜粋）

（目的）

第1条 この規則は、早稲田大学学則（昭和24年4月1日。以下「大学学則」という。）および早稲田大学大学院学則（昭和51年4月1日教務達第1号。以下「大学院学則」という。）に定めるもののほか、早稲田大学が授与する学位について必要な事項を定めることを目的とする。

（学位）

第2条 本大学において授与する学位は、学士、博士、修士とする。

2 博士の学位は次のとおりとする。

研 究 科	専 攻	学位（専攻分野）
人間科学研究科	人間科学専攻 （生命科学専攻） （健康科学専攻）	博士（人間科学）

3 大学は、前項に定める学位のほか博士（学術）の学位を授与することができる。

4 修士の学位は次のとおりとする。

研 究 科	専 攻	学位（専攻分野）
人間科学研究科	人間科学専攻 （生命科学専攻） （健康科学専攻）	修士（人間科学） または 修士（実践人間科学）

（博士学位授与の要件）

第4条 博士の学位は、大学院学則第14条により博士課程を修了した者に授与する。

2 前項の規定にかかわらず、博士の学位は本大学院の博士課程を経ない者であっても、大学院学則第17条により授与することができる。

（修士学位授与の要件）

第6条 修士の学位は、大学院学則第13条により修士課程を修了した者に授与する。

（課程による者の学位論文の受理）

第7条 本大学院の課程による者の学位論文は、修士課程および専門職学位課程については2部を、博士後期課程については3部を作成し、それぞれに論文概要書を添えて研究科長に提出するものとする。ただし、研究科長は、審査に必要な部数の追加を求めることができる。

2 研究科長は、前項の学位論文を受理したときは、学位を授与できる者か否かについて研究科運営委員会の審査に付さなければならない。

（学位論文）

第10条 博士、修士および専門職学位の学位論文は1篇に限る。ただし、参考として、他の論文を添付することができる。

2 前項より、一旦受理した学位論文等は返還しない。

3 審査のため必要があるときには、学位論文の副本、訳文、模型または標本等の資料を提出させることがある。

（審査員）

第12条 研究科運営委員会は、第7条第2項の規定により、学位論文が審査に付されたとき、または第8条お

よび第9条の規定により、学位の審査を付託されたときは、当該研究科の教員のうちから、3人以上の審査員を選任し、学位論文の審査および試験または学識の確認を委託しなければならない。

- 2 研究科運営委員会が必要と認めるときは、前項の規定にかかわらず本大学の教員または教員であった者を、学位論文の審査および試験または学識の確認の審査員に委嘱することができる。
- 3 研究科運営委員会が必要と認めるときは、第1項の規定にかかわらず他の大学院または研究所等の教員等に学位論文の審査員を委嘱することができる。
- 4 研究科運営委員会は、第1項の審査員のうち1人を主任審査員として指名しなければならない。ただし、研究科委員会が必要と認めるときは、第2項の審査員のうち、本大学の教員である者を主任審査員として指名することができる。

(論文審査要旨の公表)

第20条 博士の学位を授与したときは、その論文の審査要旨は、大学が適当と認める方法によってこれを公表する。

(学位論文の公表)

第21条 博士の学位を授与された者は、授与された日から1年以内に、当該博士論文を、書籍または学術雑誌等により、公表しなければならない。ただし、学位を授与される前に、印刷公表されているときは、この限りではない。

2 前項の規定にかかわらず博士の学位を授与された者は、やむを得ない理由がある場合には、研究科運営委員会の承認を受けて、当該論文の全文に代えて、その内容を要約したものを印刷公表することができる。この場合、大学はその論文の全文を求めに応じて閲覧に供するものとする。

3 第1項の規定により、公表する場合は、当該論文に「早稲田大学審査学位論文(博士)」と、また前項の規定により公表する場合は、当該論文の要旨に、「早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨」と明記しなければならない。

(学位の名称)

第22条 本大学の授与する学位には、早稲田大学と付記するものとする。

(学位授与の取消)

第23条 本大学において博士、修士学位を授与された者につき、不正の方法により学位の授与を受けた事実が判明したときは、総長は、当該研究科運営委員会および研究科長会の議を経て、すでに授与した学位を取り消し、学位記を返還させ、かつ、その旨を公表するものとする。

VI 修士論文・課題研究論文作成に関して

【 修士論文〔修士課程（2年制）〕】

1. 学位

本研究科修士課程に通常2年以上4年以内在学し、別に示すところによる所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、修士論文の審査および最終試験に合格した者に対して「修士(人間科学)」の学位が授与される。

2. 提出資格

修士論文の提出資格は、次の要件が満たされていないといけない。

- (1) 所定単位の取得あるいは取得見込みの者であること。
- (2) 提出日までに学費が完納されていること。
- (3) 修士論文計画書が提出済みであること。

3. 修士論文計画書

- (1) 修士論文を提出する者は、その年度の6月下旬に、所定の用紙を使った修士論文計画書を提出しなければならない。
- (2) 修士論文計画書の提出にあたっては、記載内容について、指導教員の指導を受けたのち、承認印を受けていなければならない。
- (3) 修士論文計画書の提出については、5月に掲示にて知らせる。

4. 修士論文提出期日および受付期間

- (1) 提出締切日 1月中旬予定(詳細は掲示にて伝達)
- (2) 提出受付時間 午前10時～午後4時(時間厳守のこと)(ただし、12:30～1:30を除く)
- (3) 提出受付場所 大学院人間科学研究科(所沢総合事務センター)
- (4) その他
 - ① 受付時間を過ぎた場合は理由の如何を問わず受理しない。
 - ② 郵送による提出は一切認めない。
 - ③ 代理人による提出には委任状を必要とする。

5. 修士論文要旨の作成

修士論文要旨はA4版2枚で作成する。

6. 修士論文の作成

- (1) 提出部数は審査員の人数分とする。
- (2) 修士論文は、横書きとし、A4判タイプ用紙等にワープロで片面打ちとする。
また、欧文の場合はダブルスペースとする。
- (3) 表紙は、所定の見本にならって、題目(和文・英文)、氏名(和文・英文)、研究指導教員などを記入する。
- (4) 製本の仕方 修士論文要旨、表紙、目次、本文の順に、A4判ファイルにとじる。
表側に、所定の用紙を使用した審査依頼書を貼付して提出する。

7. 公開審査会の開催

修士論文審査会は学生発表部分を公開とし、修士論文要旨は要旨集として予め配付する。

8. 修士論文審査員

- (1) 修士論文の審査員は、人間科学研究科の修士課程研究指導担当教員3名以上をもって構成し、その

内1名を主査とする。必要な場合には、本学および他の大学の大学院・学部あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。

(2) 各審査員は、研究科運営委員会の議を経て決定する。

9. 所沢図書館保管用修士論文の提出

口頭試問などでの指示を受けて修正したもの1部を、審査のあとで提出する。

図書館では、学内外から要望があった場合は、希望者にコピーを配布する。この件について、予め承願したい。

10. 学術誌「人間科学研究」掲載用修士論文要旨の提出

修士論文要旨は、別に定める作成要件に従って作成のうえ、提出することとする。

【課題研究論文〔修士課程1年制コース〕】

1. 学位について

本研究科修士課程1年制コースに通常1年以上2年以内在学し、別に示すところによる所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、課題研究論文の審査および最終試験に合格した者に対して、「修士(実践人間科学)」の学位が授与される。

2. 提出資格

課題研究論文の提出資格は、次の要件が満たされていないといけない。

(1) 所定単位の取得あるいは取得見込みの者であること。

(2) 提出日までに学費が完納されていること。

(3) 「課題研究論文計画書」が提出済みであること。

3. 課題研究論文計画書

(1) 課題研究論文を提出する者は、その年度の所定の期日(10月頃)までに、所定の用紙を使用した「課題研究論文計画書」を提出しなければならない。

(2) 課題研究論文計画書の提出にあたっては、記載内容について、指導教員の指導を受けたのち、承認印をうけていなければならない。

(3) 課題研究論文計画書の提出についての詳細は、入学時に知らせる。

4. 課題研究論文提出期日および受付期間

(1) 提出締切日 1月中旬予定(詳細は掲示にて発表)

(2) 提出受付時間 午前10時～午後4時(ただし、12:30～1:30を除く)

(3) 提出受付場所 大学院人間科学研究科(所沢総合事務センター)

(4) その他 ①受付時間を過ぎた場合は理由の如何を問わず受理しない。

②郵送による提出を認める。

③代理人による提出には委任状を必要とする。

5. 課題研究論文要旨の作成

課題研究論文要旨はA4版2枚で作成する。

6. 課題研究論文の作成

(1) 提出部数は審査員の人数分とする。

(2) 課題研究論文は、横書きとし、A4判タイプ用紙等にワープロで片面打ちとする。

また、欧文の場合はダブル・スペースとする。

(3) 表紙は、所定の見本にならって、題目(和文・英文)、氏名(和文・英文)、研究指導教員などを記入する。

(4) 製本の仕方 課題研究論文要旨、表紙、目次、本文の順に、A4のファイルにとじる。
表側に、所定の用紙を使用した審査依頼書を貼って提出する。

7. 公開審査会の開催

課題研究論文審査会は学生発表部分を公開とし、課題研究論文要旨は要旨集として予め配付する。

8. 課題研究論文審査員

- (1) 課題研究論文の審査員は、人間科学学術院の専任教員2名以上をもって構成し、その内の修士課程研究指導担当教員1名を主査とする。必要な場合には、本学および他の大学の大学院・学部あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。
- (2) 各審査員は、研究科運営委員会の議を経て決定する。

9. 所沢図書館保管用課題研究論文の提出

口頭試問などでの指示を受けて修正した課題研究論文を提出し、図書館に保管する。図書館では、学内外から希望があった場合はコピーを配付する。この件について、予め了承願いたい。

10. 人間科学研究掲載用課題研究論文要旨の提出

課題研究論文要旨は、別に定める作成要件に従って作成のうえ、提出することとする。

Ⅶ 博士論文作成に関して（課程による者）

1. 学位について

本研究科博士後期課程に通常3年以上6年以内在学し、所要の研究指導を受けた上、博士学位論文の審査および試験に合格した者に対して「博士(人間科学)」の学位が授与される。

2. 提出資格について

博士学位論文の提出資格は、次の要件が満たされていないなければならない。

- (1) 早稲田大学大学院学則第14条に定めるもののほか、次の(2)または(3)の要件を満たしていないならない。
- (2) 博士後期課程在学が3年以上の場合は、原則として研究業績が、博士学位論文に関連して、申請者が第一著者である公表学術論文または著書が、印刷中のものを含めて1編(冊)以上あること。
- (3) 博士後期課程在学が3年に満たずに提出しようとする場合は、(2)の条件を満たした上で、申請者を第一著者とする公表学術論文または著書が、申請者の所属する研究グループ以外の研究者により、積極的な評価を受けて、公表学術論文または著書に3回以上引用されていること。

なお、公表学術論文とは、日本学術会議に登録された学会が発行する審査規定が明記された学会誌に掲載された論文、およびそれに準ずる論文、または、海外において第三者審査委員が明記されている学会誌・学術雑誌に掲載された論文を指す。

3. 博士学位申請に関する提出書類について

- | | |
|------------------------|-----|
| (1) 学位申請書(大学所定) | 1部 |
| (2) 学位論文 | 3部 |
| (3) 論文概要書 | 1部 |
| (4) 履歴書(人間科学研究科所定) | 1部 |
| (5) 研究業績書(人間科学研究科所定) | 1部 |
| (6) 研究業績書に記載した学術論文等の抜刷 | 各1部 |
| (7) 大学院における成績証明書(修士課程) | 1部 |

4. 博士学位論文等の提出期日について

例年、5月と10月の2回受け付ける。詳細な期日等はその都度掲示等で伝達する。

5. 博士学位論文等の作成要領について

(1) 博士学位論文

使用言語は原則として日本語とする。ただし、英語での提出を妨げないが英語の場合は和訳を提出させることがある。

書式は横書きとし(用紙は縦)、A4判タイプ用紙等にワープロ等で片面打ちとし、活字またはその他印字によるものとする。英文の場合はダブルスペースとする。

(2) 論文概要書

使用言語は原則として日本語とする。

書式は横書きとし(用紙は縦)、A4判タイプ用紙等にワープロ等で片面打ちとし、活字またはその他印字によるものとする。

字数は、2,000字以内とする。

6. 博士学位論文審査員について

論文審査員は、人間科学研究科の博士後期課程研究指導担当の教員または教員であった者3名以上をもって構成し、その内研究科運営委員の教員1名を主任審査員とする。必要な場合には、修士課程研究指導担当教員および他の大学院あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。

※ 博士後期課程に3年以上在学し、かつ所要の研究指導を受けて退学した場合（通称、満期退学または単位取得退学）は、退学した日から起算して3年以内に限り『課程による者』として博士学位論文を提出することができる。なお、退学後3年以内とは、博士学位論文の「受理」を決定する研究科運営委員会の開催日が、3年以内にあることであり、例年、受理を決定する研究科運営委員会は6月と11月に開催される。

※ 審査に合格した学位論文は、本学中央図書館・所沢図書館・国会図書館に配架し閲覧に供する。

また、学内外から要望があった場合は、希望者にコピーのサービスをするのであらかじめご了承ください。

Ⅷ 人を対象とした研究および動物実験に関する倫理指針

「人を対象とした研究倫理指針」および「動物実験に関する指針」は、大学および人間科学学術院で規定化されている。人間科学研究科に所属する学生は、倫理指針を充分遵守のうえ研究活動に精進されることを期待する。

なお、指針に従い「研究計画書」または「動物実験計画書」提出にあたっては、指導教員と充分相談のうえ提出すること。

Ⅸ 研究生制度について

本研究科は、大学院学則第57条の定めるところにより本研究科博士後期課程に6年間在学し、博士論文を提出しないで退学した者のうち、引き続き大学院において博士論文作成のため研究指導を受けようとする者があるときは、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上、研究生として入学を許可することがある。(出願の時期、手続き方法等については掲示で伝達する。)

以下「大学院研究生に関する規程」の抜粋

(出願手続)

第2条 研究生として入学を志願する者は、所定の願書により、当該研究科長に願い出なければならない。

(入学手続、学費)

第3条 研究生として入学を許可された者は、次の区分による所定の学費を納入して、学生証の交付を受けなければならない。

- 一 研究指導料 博士後期課程の新3年生の授業料の半額。
- 二 演習料・実験実習料 博士後期課程の新3年生の演習料または実験実習料の全額。ただし、その年度の前期において学位を取得した場合は半額。

2 前項の学費の分納期は、次のとおりとする。

- 一 研究指導料 第1期 全額
- 二 演習料・実験実習料 第1期 半額 第2期 半額

(在学期間)

第4条 研究生の在学期間は1年とする。ただし、研究指導を継続して受けようとする時は、原則として2回に限り延長することができる。

2 在学期間の延長を希望する者は、毎年度の終わりまでに、理由を付して、当該研究科長に願いでなければならない。

X 人間科学研究科学科目配当

1. 学科目配当の構成

課 程	研究領域・コース	科目区分
修士課程 (2年制)	地域・地球環境科学研究領域 人間行動・環境科学研究領域 文化・社会環境科学研究領域 健康・生命医科学研究領域 健康福祉科学研究領域 臨床心理科学研究領域 感性認知情報システム研究領域 教育コミュニケーション情報科学研究領域 (2005年度以前入学者対象) スポーツ科学研究領域	研究指導 修士論文 演習(1) 演習(2) 講義科目 実習科目
修士課程 1年制コース	教育臨床コース	研究指導 課題研究論文 コース必修(演習) コース必修(実習) コース選択必修 コース選択 選択科目
博士後期課程	地域・地球環境科学研究領域 人間行動・環境科学研究領域 文化・社会環境科学研究領域 健康・生命医科学研究領域 健康福祉科学研究領域 臨床心理科学研究領域 感性認知情報システム研究領域 教育コミュニケーション情報科学研究領域 (2005年度以前入学者対象) スポーツ科学研究領域	研究指導 博士論文

2. 科目の説明

課 程	科目区分	配 当	期 間	単 位	備 考
修士課程 (2年制)	研究指導	1・2年	通年	無	曜日時限設定なし
	修士論文	2年	—	無	
	演習(1)	1・2年	通年	4単位	
	演習(2)	1・2年	通年	4単位	
	講義科目	1・2年	半期	2単位	
	実習科目	1・2年	通年	2単位	臨床心理実習ⅠⅡは2年配当
修士課程 1年制 コース	研究指導	1年	通年	無	曜日時限設定なし
	課題研究論文	1年	—	無	
	コース必修(演習)	1年	通年	4単位	
	コース必修(実習)	1年	通年	2単位	
	コース選択必修	1年	半期	2単位	
	コース選択	1年	半期	2単位	
	選択科目	1年	半期	2単位	修士課程(2年制)配当科目

課 程	科目区分	配 当	期 間	単 位	備 考
博士後期 課程	研究指導	1・2・3年	通年	無	曜日時限の設定なし
	博士論文	3年	—	無	

注意:集中講義として行う場合は期間相当分を実施

3. 2007年度大学院人間科学研究科学科目配当表

巻末に掲載。

備考:2007年度大学院人間科学研究科は、修士課程、博士後期課程共、人間科学専攻のみの学科目配当となっている。生命科学専攻および健康科学専攻に所属の学生は、人間科学科学専攻に設置されている科目を履修することとする。

X I 修了要件・学科目の履修方法

— 修士課程 —

【 修了要件 】

1. 修士課程（2年制）

修士課程(2年制)の修了要件は、通常2年以上4年以内在学し、所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けたうえ(研究指導の評価が2年以上にわたり合格「P」であること)、修士論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には、「修士(人間科学)」の学位が授与される。

ただし、優れた業績を上げた者について本研究科運営委員会が認めた場合に限り、修士課程に1年以上在学すれば修了できる。

2. 修士課程1年制コース

修士課程1年制コースの修了要件は、通常1年以上2年以内在学し、所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けたうえ(研究指導の評価が合格「P」であること)、課題研究論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には、「修士(実践人間科学)」の学位が授与される。

【 授業科目の履修方法 】

1. 修士課程（2年制）

(1) 研究指導および修士論文

研究指導を2年以上にわたり合格し、修士論文に合格しなければならない。

(2) 必修科目

各自が所属する研究指導の演習科目(1)、(2)の計8単位を履修しなければならない。

一部、研究指導教員が担当する研究指導名と演習科目名が異なる科目があるが、この場合、研究指導教員が担当する演習科目(1)、(2)を履修するものとする。

(3) 選択科目

演習科目、講義科目の中から研究領域にとらわれずに22単位(以上)を履修しなければならない。

各自が所属する研究指導以外の演習科目は、2科目8単位以内に限り、修了に必要な単位として算入することができる。各自が所属する研究指導以外の演習科目を登録する場合は、事前に当該演習科目の担当教員に了解を得なければならない。

(4) 各学年において登録できる授業科目の登録制限単位は30単位とする。

(5) 上記の履修方法を表にすると下記ようになる。

必修/選択	科目区分	科目の説明 (単位数)	修了要件
必修	研究指導		2年分合格(単位なし)
	修士論文		合格(単位なし)
	演習科目	所属する研究指導の演習(1)(2)	8単位
選択	演習科目	所属する研究指導以外の演習(1)(2)	22単位(以上)
	講義科目	領域にとらわれず自由に選択	
修了単位			30単位(以上)

2. 修士課程1年制コース

(1) 研究指導および課題研究論文

研究指導および課題研究論文に合格しなければならない。

(2) コース必修科目

① コース必修科目(演習)

各自が所属する研究指導の演習科目(1)の4単位を履修しなければならない。

② コース必修科目(実習)

心理教育臨床実習、心理臨床事例実習の各2単位、4単位分を履修しなければならない。

(3) コース選択必修科目

コース選択必修科目から12単位(以上)を履修しなければならない。

(4) コース選択科目

必要に応じてコース選択科目から履修する。

(5) 選択科目

修士課程(2年制)に設置されている演習科目、講義科目の中から研究領域・コースにとらわれずに、30単位を満たすように履修する。各自が所属する研究指導以外の演習科目は、演習(1)に限り1科目4単位を修了に必要な単位として算入することができる。各自が所属する研究指導以外の演習科目を登録する場合は、事前に当該演習科目の担当教員に了解を得なければならない。

(6) 1年間に登録できる授業科目の登録制限単位は46単位とする。

(7) 上記の履修方法を表にすると下記のとおりとなる。

科目区分	科目の説明	修了要件
研究指導	所属する研究指導	合格(単位なし)
課題研究論文		合格(単位なし)
コース必修科目(演習)	所属する研究指導の演習(1)	4単位
コース必修科目(実習)	心理教育臨床実習 心理臨床事例実習	4単位 (2単位×2科目)
コース選択必修科目		12単位(以上)
コース選択科目		30単位より上記で取得した 単位を除いた単位数を取得
選択科目	修士課程(2年制)設置科目	
修了単位数		30単位(以上)

3. 他箇所設置科目および入学前修得科目(修士課程(2年制)・修士課程1年制コース共通)

(1) 本大学の他箇所に設置されている大学院生対象科目を指導教員の許可を得て履修することができる。

修得した授業科目の単位のうち、10単位以内に限り講義科目の代替科目として修了に必要な単位に算入することができる。この場合の登録単位数は、当該年度の登録制限単位数の中に含めるものとする。

上記の他に、自由科目(修了に必要な単位とはならない科目)として他箇所を設置されている科目を履修することができる。

(2) 本研究科在学中に外国の大学院へ留学し、留学先で修得した講義科目の単位のうち、本研究科に設置されている講義科目(研究領域は問わない)のいずれかに該当すると認められるものに限り、10単位を限度として、当該講義科目に振り替えて認定することがある。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登

録制限単位数の中に含めるものとする。

- (3) 本研究科入学前に、本大学の研究科または他大学大学院(外国の大学院を含む)において修得した講義科目の単位(科目等履修生として修得した単位を含む)のうち、本研究科に設置されている講義科目(研究領域は問わない)のいずれかに該当すると認められるものに限り、10単位を限度として、当該講義科目に振り替えて、認定することがある。なお、本研究科の科目等履修生として在学し、本研究科に設置されている演習科目を履修している場合も同様の取り扱いとする。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登録制限単位数の中に含めるものとする。
- (4) 上記に規定する単位は、併せて10単位を限度とする。

【 9月修了について 】

修士課程の学位授与の要件中、3月までに

- ① 修士論文または課題研究論文に関する要件を満たさなかった場合
- ② 所定の単位を充足することができなかった場合
- ③ 上記 ① ② いずれの要件も満たさなかった場合

のために、修了に関する要件を具備することができず、そのために引き続き在学する者については、以下の基準によりその年の9月に修士の学位を授与(9月15日付)することができる。

1. 修士論文について

- ① 修了できなかった年度に修士論文計画書または課題研究論文計画書を提出していること
- ② 9月修了を希望する年度に指導教員の研究指導または課題研究論文を登録していること
- ③ 9月修了を希望する年度の9月までに修士論文または課題研究論文に関する要件を具備すること

2. 授業科目について

- ① 修士課程(2年制):修了所要単位に4単位以内の不足であること
修士課程1年制コース:修了所要単位に8単位以内の不足であること
- ② 不足単位を修得する場合は、前期終了科目であること
演習科目または講義科目の通年科目を履修する場合は、9月修了の対象とはならない。

3. 手続について

9月修了を希望する場合は、その年度の4月の科目登録時に研究科所定の書類で、その旨研究科長へ届け出なければならない。その場合、指導教員の承認印が必要となる。

— 博士後期課程 —

【 修了要件 】

1. 博士後期課程の修了要件は、通常3年以上6年以内在学し、論文作成のために必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には「博士(人間科学)」の学位が授与される。
2. 授業科目について必要単位はないが、指導教員の指示により、修士課程の授業科目を履修しなければならない場合がある。
3. 博士論文を提出しないで退学した者のうち、博士後期課程に3年以上在学し、かつ必要な研究指導を受けた者は、退学した日から起算して3年以内に限り博士論文を提出し審査および試験を受けることができる。

「3年以内」とは、提出された博士論文の受理を決定する研究科運営委員会が年2回(5月と11月)開催され、その開催年月日が退学後3年以内であれば審査および試験を受けることができるということである。

— 修士課程・博士後期課程 —

【 成績 】

成績は、次のとおり表示する。なお、入学年度により表記の方法が異なる。

1. 2006年度以降入学者

(1) 研究指導

合否区分	合格	不合格
成績通知書	P	Q
成績証明書	P	記載なし

(2) 授業科目、修士論文、課題研究論文

合否区分	合格				不合格
点数	100～90	89～80	79～70	69～60	59以下
成績通知書	A ⁺	A	B	C	F
成績証明書	A ⁺	A	B	C	記載なし

2. 2005年度以前入学者

(1) 研究指導、修士論文

合否区分	合格	不合格
成績通知書	P	Q
成績証明書	合格	記載なし

(2) 授業科目

合否区分	合格				不合格
点数	100～90	89～80	79～70	69～60	59以下
成績通知書	A ⁺	A	B	C	F
成績証明書	優		良	可	記載なし

— 科目名称変更 —

【 修士課程 】

1. 研究指導

下記の研究指導は名称が変更となっている。変更後と変更前とは同一科目として取り扱うものとする。

2006年度以降研究指導名	2005年度以前研究指導名
生物圏生態学研究指導	生物圏情報科学研究指導
学習動機づけ論研究指導	学習動機づけ研究指導

建築環境学研究指導	環境・行動学研究指導
移住論研究指導	応用言語学研究指導
物質文化論研究指導	考古学研究指導
生体発達科学研究指導	細胞生物学研究指導
生体構造学研究指導	神経形態学研究指導
生体機能学研究指導	健康生体機能学研究指導
神経内分泌学研究指導	神経行動学研究指導
運動制御・バイオメカニクス研究指導	身体運動科学研究指導
応用健康科学研究指導	身体行動科学研究指導
予防医学研究指導	環境保健学研究指導
学校カウンセリング学研究指導	学校カウンセリング研究指導
感性認知科学研究指導	色彩認知科学研究指導
安全人間工学研究指導	安全行動学研究指導
知識情報科学研究指導	データサイエンス研究指導
ネットワーク情報システム学研究指導	ネットワーク情報システム研究指導
スポーツ倫理学・教育学研究指導	スポーツ倫理学研究指導
健康スポーツ論研究指導	体力科学研究指導
スポーツビジネスマネジメント論研究指導	スポーツビジネス・マーケティング研究指導
スポーツ神経精神医科学研究指導	精神医学研究指導
スポーツ健康管理学研究指導	スポーツ内科学研究指導
スポーツ神経科学研究指導	生体機能学研究指導

2. 演習科目

下記の科目は、科目名称が変更となっている。変更以前の科目を履修した場合、変更以降の科目は履修することができない。

2006年度以降科目名	2005年度以前科目名
生物圏生態学演習(1)、(2)	生物圏情報科学演習(1)、(2)
学習動機づけ論演習(1)、(2)	学習動機づけ演習(1)、(2)
建築環境学演習(1)、(2)	環境・行動学演習(1)、(2)
移住論演習(1)、(2)	応用言語学演習(1)、(2)
物質文化論演習(1)、(2)	考古学演習(1)、(2)
生体発達学演習(1)、(2)	細胞生物学演習(1)、(2)
生体構造学演習(1)、(2)	神経形態学演習(1)、(2)
生体機能学演習(1)、(2)	健康生体機能学演習(1)、(2)
神経内分泌学演習(1)、(2)	神経行動学演習(1)、(2)
運動制御・バイオメカニクス演習(1)、(2)	身体運動科学演習(1)、(2)
応用健康科学演習(1)、(2)	身体行動科学演習(1)、(2)
予防医学演習(1)、(2)	環境保健学演習(1)、(2)
学校カウンセリング学演習(1)、(2)	学校カウンセリング演習(1)、(2)
感性認知科学演習(1)、(2)	色彩認知科学演習(1)、(2)
安全人間工学演習(1)、(2)	安全行動学演習(1)、(2)
知識情報科学演習(1)、(2)	データサイエンス演習(1)、(2)
ネットワーク情報システム学演習(1)、(2)	ネットワーク情報システム演習(1)、(2)
スポーツ倫理学・教育学演習(1)、(2)	スポーツ倫理学演習(1)、(2)
健康スポーツ論演習(1)、(2)	体力科学演習(1)、(2)
スポーツビジネスマネジメント論演習(1)、(2)	スポーツビジネス・マーケティング演習(1)、(2)
スポーツ神経精神医科学演習(1)、(2)	精神医学演習(1)、(2)
スポーツ健康管理学演習(1)、(2)	スポーツ内科学演習(1)、(2)
スポーツ神経科学演習(1)、(2)	生体機能学演習(1)、(2)

2005年度以降科目名	2004年度以前科目名
心理臨床学演習(1)、(2)	医療心理学演習(1)、(2)

3. 講義科目

下記の科目は、科目名称が変更となっている。変更以前の科目を履修した場合、変更以降の科目は履修することができない。

2006年度以降科目名	2005年度以前科目名
環境生態学特論	自然環境論
学習動機づけ特論	ヒューマン・モチベーション特論
学習環境心理学特論	環境認知学特論
自然人類学特論	人類学特論
生体発達科学特論	発生物理学特論
運動制御・バイオメカニクス特論	身体運動科学特論
健康医学特論	健康管理医学特論
応用健康科学特論	健康行動科学特論
老年社会福祉学特論	老年福祉学特論
安全人間工学特論	応用実験心理学
教授学習過程特論	認知科学特論
スポーツ表象特論	スポーツ表象論
健康スポーツマネジメント特論	健康スポーツ特論
スポーツビジネスマネジメント特論	スポーツビジネス特論
メディカルコンディショニング特論	メディカルコンディショニング論
スポーツ統計学特論	スポーツ統計学
運動器解剖実習	運動器解剖学実習

【博士後期課程】

下記の研究指導は、名称が変更となっている。変更後と変更前とは同一科目として取り扱うものとする。

2006年度以降研究指導名	2005年度以前研究指導名
建築環境学研究指導	環境・行動学研究指導
生体発達科学研究指導	細胞生物学研究指導
生体構造学研究指導	神経形態学
生体機能学研究指導	健康生体機能学研究指導
神経内分泌学研究指導	神経行動学研究指導
運動制御・バイオメカニクス研究指導	身体運動科学研究指導
応用健康科学研究指導	身体行動科学研究指導
予防医学研究指導	環境保健学研究指導
感性認知科学研究指導	色彩認知科学研究指導
安全人間工学研究指導	安全行動学研究指導
ネットワーク情報システム学研究指導	ネットワーク情報システム研究指導
健康スポーツ論研究指導	体力科学研究指導
スポーツ神経科学研究指導	生体機能学研究指導
スポーツ心理学研究指導	精神生理学研究指導

2003年度以降研究指導名	2002年度以前研究指導名
色彩認知科学研究指導	環境色彩認知科学研究指導
教育開発論研究指導	教育工学研究指導
スポーツ生理学研究指導	運動生理学研究指導
身体形態学研究指導	トレーニング科学研究指導

X II 教育職員免許状取得について

1. 人間科学研究科で取得できる免許の種類及び教科は、次のとおりである。

○印が取得できる免許状

免許状の種類 / 教科	社会	地理・歴史	公民	福祉	情報	保健体育
中学校教諭専修免許状	○					○ 注参照
高等学校教諭専修免許状		○	○	○	○	○ 注参照

注:保健体育の免許状の取得は、2005年度以前入学者のみ対象

2. 免許状取得の条件

本研究科入学以前に、当該教科の中学校教諭一種免許状又は高等学校教諭一種免許状を取得した者、又は教育職員免許法の5条第一項別表第1の所要資格を充たしている者。(「5条第一項別表第1の所要資格」とは、一種免許状取得に必要な「教職および教科に関する科目」の法令で定める単位数を言う)

3. 免許状取得に必要な科目

別表の人間科学研究科設置科目のなかから該当する免許状に関する科目を24単位以上履修し、修士の学位を得ることにより、専修免許状が取得できる。(24単位の履修方法は科目区分・分野に関係なく任意に履修して可) ただし、科目設置以前の年度に修得した科目については、専修免許科目として申請することはできない。

4. その他

(1) 免許状の申請は、本人が、自分の住所地又は教員採用学校所在地の授与権者(都道府県教育委員会)にたいして行う。ただし、3月の修了予定者に限り、大学がとりまとめて申請を代行(一括申請)し、学位授与当日に免許状を手渡せるようとりはからっている。

また、免許状授与証明書の請求は、授与権者に行うこと。

(2) 1997年6月「教育職員免許法の特例等に関する法律」が成立し、保健体育の中学校免許状を取得する場合は、7日以上介護等体験が義務付けられた。詳細については、教育学部から交付される「各種資格取得の手引」を参照すること。

別表 社会専修免許 2007年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
社会の教科に関する科目	社会人類学演習(1)・(2) 文化生態学演習(1)・(2) アジア社会論演習(1)・(2) 移住論演習(1)・(2) 日本物質文化論演習(1)・(2) フランス表象文化論演習(1)・(2) ドイツ政治社会文化論演習(1)・(2) 技術史・技術文化論演習(1)・(2) 環境社会学演習(1)・(2) 発達行動学演習(1)・(2) 産業職業社会学演習(1)・(2) 家族社会学演習(1)・(2) 都市社会学演習(1)・(2) 科学史科学哲学演習(1)・(2) 民族誌学特論 歴史人類学特論 アジア地域研究特論 移民研究特論 考古学特論 フランス表象文化史研究特論 ドイツ近代国民国家特論 生活文化史研究特論 スペイン社会文化特論 環境社会学特論 発達行動学特論 産業職業社会学特論 家族社会学特論 都市社会学特論 科学史科学哲学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 (つづく)

	心理療法特論 I 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育心理学特論 臨床心理学特論Ⅲ 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 学校臨床心理学特論 教育システム工学 学習教授評価法 教育集団心理学
--	--

別表 地理・歴史専修免許 2007年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
地理歴史の教科に関する科目	社会人類学演習(1)・(2) 文化生態学演習(1)・(2) アジア社会論演習(1)・(2) 移住論演習(1)・(2) 日本物質文化論演習(1)・(2) ドイツ政治社会文化論演習(1)・(2) フランス表象文化論演習(1)・(2) 技術史・技術文化論演習(1)・(2) 民族誌学特論 歴史人類学特論 アジア地域研究特論 移民研究特論 考古学特論 フランス表象文化史研究特論 ドイツ近代国民国家特論 生活文化史研究特論 スペイン社会文化特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育心理学特論 臨床心理学特論Ⅲ 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 学校臨床心理学特論 教育システム工学 学習教授評価法 教育集団心理学

別表 公民専修免許 2007年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
公民の教科に関する科目	環境社会学演習(1)・(2) 発達行動学演習(1)・(2) 産業職業社会学演習(1)・(2) 家族社会学演習(1)・(2) 都市社会学演習(1)・(2) 科学史科学哲学演習(1)・(2) 感性認知科学演習(1)・(2) 心理行動学演習(1)・(2) 環境社会学特論 発達行動学特論 産業職業社会学特論 家族社会学特論 都市社会学特論 科学史科学哲学特論 感性心理学特論 感情心理学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育心理学特論 臨床心理学特論Ⅲ 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 学校臨床心理学特論 教育システム工学 学習教授評価法 教育集団心理学

別表 福祉専修免許 2007年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
福祉の教科に関する科目	障害者支援論演習(1)・(2) 老年社会福祉学演習(1)・(2) 社会保障政策論演習(1)・(2) 福祉教育論演習(1)・(2) 障害児福祉論演習(1)・(2) 障害者福祉特論 障害者支援論 老年社会福祉学特論 社会保障政策特論 健康福祉管理特論 福祉教育特論 児童家庭福祉特論 福祉援助特論 比較高齢社会特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育心理学特論 臨床心理学特論Ⅲ 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 学校臨床心理学特論 教育システム工学 学習教授評価法 教育集団心理学

別表 情報専修免許 2007年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
情報の教科に関する科目	情報コミュニケーション科学演習(1)・(2) 言語情報科学演習(1)・(2) ネットワーク情報システム学演習(1)・(2) 情報処理心理学演習(1)・(2) インターネット科学演習(1)・(2) 知識情報科学演習(1)・(2) 感覚情報処理学演習(1)・(2) マルチメディア特論 言語情報科学特論 ソフトウェア工学特論 情報コミュニケーション技術特論 情報処理心理学特論 インターネット科学特論 知識情報科学特論 感覚情報処理学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論 I 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育心理学特論 臨床心理学特論 III 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 学校臨床心理学特論 教育システム工学 学習教授評価法 教育集団心理学 情報メディア教育特論 学習科学特論 臨床認知発達学特論 特別支援教育特論

別表 情報専修免許 2006年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
情報の教科に関する科目	情報コミュニケーション科学演習(1)・(2) 言語情報科学演習(1)・(2) ネットワーク情報システム学演習(1)・(2) 情報処理心理学演習(1)・(2) インターネット科学演習(1)・(2) 知識情報科学演習(1)・(2) 感覚情報処理学演習(1)・(2) マルチメディア特論 言語情報科学特論 ソフトウェア工学特論 情報コミュニケーション技術特論 情報処理心理学特論 インターネット科学特論 知識情報科学特論 感覚情報処理特論
教職に関する科目	教育実践学演習(1)・(2) 学習動機づけ論演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教師学特論 学習動機づけ特論 インストラクショナルデザイン特論 学習環境心理学特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教授学習過程特論 教育システム工学 学習教授評価法 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論 I 学校臨床心理学特論

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
体育原理、体育心理学、体育経営管理学、体育社会学」及び運動学(運動方法学を含む)	武道論演習(1)・(2) スポーツ人類学演習(1)・(2) スポーツ倫理学・教育学演習(1)・(2) スポーツメディア論演習(1)・(2) 健康スポーツ論演習(1)・(2) スポーツビジネスマネジメント論演習(1)・(2) 身体形態学演習(1)・(2)
生理学(運動生理学を含む)	生体ダイナミクス演習(1)・(2) 運動栄養学演習(1)・(2) 運動生化学演習(1)・(2) バイオメカニクス演習(1)・(2) スポーツ生理学演習(1)・(2) 生体機能学演習(1)・(2) 運動制御・バイオメカニクス演習(1)・(2) 生体機能学特論
衛生学及び公衆衛生学	運動免疫学演習(1)・(2) 予防医学演習(1)・(2) 予防医学特論
学校保健(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)	スポーツ神経精神医科学演習(1)・(2) スポーツ健康管理学演習(1)・(2) 運動器スポーツ医学演習(1)・(2) スポーツ外科学演習(1)・(2) スポーツ神経科学演習(1)・(2) 行動理論特論 行動医学特論

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
体育原理、体育心理学、体育経営管理学、体育社会学」及び運動学(運動方法学を含む)	武道論演習(1)・(2) スポーツ人類学演習(1)・(2) スポーツ倫理学・教育学演習(1)・(2) スポーツメディア論演習(1)・(2) 健康スポーツ論演習(1)・(2) スポーツビジネスマネジメント論演習(1)・(2) 身体形態学演習(1)・(2) 武道思想史特論 スポーツ人類学特論 スポーツ表象特論 スポーツ社会学特論 スポーツ経営学特論 健康スポーツマネジメント特論 スポーツビジネスマネジメント特論 スポーツクラブビジネス特論 トップスポーツビジネス特論 スポーツ統計学特論 スポーツ情報処理特論 コーチング特論 コーチ学特論 コーチングバイオメカニクス特論 コーチング心理学特論 パフォーマンス評価
生理学(運動生理学を含む)	生体ダイナミクス演習(1)・(2) 運動栄養学演習(1)・(2) 運動生化学演習(1)・(2) バイオメカニクス演習(1)・(2) スポーツ生理学演習(1)・(2) 生体機能学演習(1)・(2) 運動制御・バイオメカニクス演習(1)・(2) 生体機能学特論 生体ダイナミクス特論 スポーツ栄養学特論 運動生化学特論 バイオメカニクス特論 スポーツ生理学特論 コンディショニング特論
衛生学及び公衆衛生学	運動免疫学演習(1)・(2) 予防医学演習(1)・(2) 予防医学特論 つづく

<p>学校保健(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)</p>	<p>スポーツ神経精神医学演習(1)・(2) スポーツ健康管理学演習(1)・(2) 運動器スポーツ医学演習(1)・(2) スポーツ外科学演習(1)・(2) スポーツ神経科学演習(1)・(2) メディカルコンディショニング特論 スポーツ神経精神医学特論 スポーツ内科学特論 運動器発育・発達特論 スポーツ外科学特論 運動器解剖実習 精神生理学特論 行動理論特論 行動医学特論</p>
<p>保健体育の教職に関する科目</p>	<p>スポーツ教育学特論</p>

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
体育原理、体育心理学、体育経営管理学、体育社会学]及び運動学(運動方法学を含む)	身体形態学演習(1)・(2) スポーツ人類学演習(1)・(2) ストレスマネジメント演習(1)・(2) スポーツ倫理学演習(1)・(2) スポーツビジネス・マーケティング演習(1)・(2) スポーツメディア論演習(1)・(2) 武道論演習(1)・(2) スポーツ統計学 スポーツ社会学特論 スポーツ人類学特論 スポーツ教育学特論 スポーツ表象論 武道思想史特論 スポーツビジネス特論
生理学(運動生理学を含む)	身体運動科学演習(1)・(2) スポーツ生理学演習(1)・(2) バイオメカニクス演習(1)・(2) 体力科学演習(1)・(2) 運動栄養学演習(1)・(2) 運動生化学演習(1)・(2) 生体ダイナミクス演習(1)・(2) 生体機能学演習(1)・(2) スポーツ生理学特論 食品機能学特論 運動生化学特論 バイオメカニクス特論 生体ダイナミクス特論 生体機能学特論
衛生学及び公衆衛生学	環境保健学演習(1)・(2) 健康スポーツ疫学演習(1)・(2) 疫学・医療情報 I・II 健康スポーツ特論
学校保健(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)	精神生理学演習(1)・(2) 身体行動科学演習(1)・(2) 運動器スポーツ医学演習(1)・(2) スポーツ内科学演習(1)・(2) 精神医学演習(1)・(2) スポーツ外科学演習(1)・(2) 運動免疫学演習(1)・(2) スポーツ内科学特論 スポーツ外科学特論 精神生理学特論 行動医学特論 行動理論特論 運動器発育・発達論 メディカルコンディショニング論 運動器解剖実習

XIII 学費

1. 修士課程(2年制)

2007年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健保 組合費	
初年度	入学時	260,000	330,000	75,000	35,000	6,000	706,000
	後期	—	330,000	75,000	35,000	—	440,000
	計	260,000	660,000	150,000	70,000	6,000	1,146,000
二年度	前期	—	332,000	75,000	35,000	—	442,000
	後期	—	332,000	75,000	35,000	—	442,000
	計	—	664,000	150,000	70,000	—	884,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

2006年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健保 組合費	
二年度	前期	—	330,000	75,000	35,000	—	440,000
	後期	—	330,000	75,000	35,000	—	440,000
	計	—	660,000	150,000	70,000	—	880,000

2. 修士課程 1年制コース

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健保 組合費	
初年度	入学時	260,000	412,500	75,000	35,000	3,000	785,500
	後期	—	412,500	75,000	35,000	—	522,500
	計	260,000	825,000	150,000	70,000	3,000	1,308,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

3. 博士後期課程

2007年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健保 組合費	
初年度	入学時	260,000	273,500	40,000	35,000	9,000	617,500
	後期	—	273,500	40,000	35,000	—	348,500
	計	260,000	547,000	80,000	70,000	9,000	966,000
二年度	前期	—	273,500	40,000	35,000	—	348,500
	後期	—	273,500	40,000	35,000	—	348,500
	計	—	547,000	80,000	70,000	—	697,000
三年度	前期	—	273,500	—	35,000	—	308,500
	後期	—	273,500	—	35,000	—	308,500
	計	—	547,000	—	70,000	—	617,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

2006 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健保 組合費	
二 年 度	前期	—	273,500	40,000	35,000	—	348,500
	後期	—	273,500	40,000	35,000	—	348,500
	計	—	547,000	80,000	70,000	—	697,000
三 年 度	前期	—	273,500	—	35,000	—	308,500
	後期	—	273,500	—	35,000	—	308,500
	計	—	547,000	—	70,000	—	617,000

2005 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健保 組合費	
三 年 度	前期	—	273,500	—	35,000	—	308,500
	後期	—	273,500	—	35,000	—	308,500
	計	—	547,000	—	70,000	—	617,000

3. 学費納入に関する注意

(1) 学費振替日

学費を銀行口座から振り替えで納入する場合は、次の期日に振り替えを行う。

前期学費振替日： 5月1日（新入生を除く）

後期学費振替日： 10月1日

(2) 学費振込み

学費を銀行振込で納入する場合は、大学から送付される振込用紙に従い、期日までに学費を納入しなければならない。

(3) 学費延納

やむを得ない理由で期日までに納入できないときは、所定の「学費等延納願」に納入予定月日、理由等を記入し、延納の承認を得なければならない。

詳細については、所沢総合事務センター大学院カウンターに問い合わせること。

XIV 学生生活等

1. 学籍番号

学生は各自学籍番号をもつ。

学籍番号は各自の氏名にも代わるほど重要なもので、間違わないように記憶しておく必要がある。

2007年4月に人間科学研究科の1年次に入学した者は

3 8 0 7 C □ □ □ - □

a b c d e

a : 箇所コード (人間科学研究科)

b : 入学年度 (西暦下2桁)

c : 専攻コード:A-生命科学専攻、B-健康科学専攻、C-人間科学専攻

d : 個人番号

百の位は次の課程を示す

0~2: 修士課程(2年制)、3: 修士課程1年制コース、5: 博士後期課程、9: 科目等履修生

e : チェックデジット (CD)

2. 学生証 (身分証明書)

本大学の学生には入学と同時に学生証(身分証明書)を交付する。この学生証は、その身分を証明するために必要であるばかりでなく、学習上・事務手続き上のいろいろな場合に必要であるから破損・紛失のないように注意し、下記のことを留意すること。

- (1) 学生証は、入学時に人間科学研究科より交付する。
- (2) 学生証は、「学生証(カード)」(以下「学生証」という)と有効年限を明示した「裏面シール」とからなり、学生証の裏面に「裏面シール」を貼り合わせてから、効力が生じる。
- (3) 学生証の交付を受けたら、速やかに学生証の裏面に「裏面シール」を貼り学生証の表の氏名欄に、黒い油性のペンまたはボールペンで氏名(漢字)を楷書で記入すること。なお、漢字を持たない留学生は、裏面シールの氏名欄に印刷されているアルファベットと同じように、活字体で記入すること。
- (4) 学生証は、在学期間中使用し、「裏面シール」は、毎学年度末に所沢総合事務センター大学院カウンターで交付するので、貼り替えること。
- (5) 住所を変更したときや、通学定期券発行控欄が一杯になったときは、速やかに所沢総合事務センター大学院カウンターに届け出て、追加のシールの交付を受けること。
- (6) 学生証を紛失したり盗難にあたりすると悪用されるおそれがあるので十分注意し、その際は、ただちに所沢総合事務センター大学院カウンターに届け出ること。
- (7) 紛失などのために再交付を受ける場合は、所沢総合事務センター大学院カウンターに再交付願(カラー写真1枚と手数料 2,000円)を提出すること。なお、同一年度内に一度を超えて再交付を願い出る場合は、保証人の連署が必要になる。再交付は通常1週間程度かかる。
- (8) 試験、図書館や学生読書室の利用、各種証明書・学割・通学証明書の交付、種々の配付物を受け取る時、その他本学教職員の請求があったときは、学生証を呈示しなければならない。
- (9) 有効期間は、「裏面シール」に示された有効年の4月1日から翌年3月31日までの1年間である。
- (10) 学生証は、修了または退学などにより学生の身分がなくなると同時に、その効力を失うので、ただちに所

沢総合事務センターに返却しなければならない。修了の場合は、学生証と引き換えに学位記が授与されるので、その日まで必ず携帯すること。

3. 各種証明書の交付

(1) 在学中の課程の在学証明書・修了見込証明書・学業成績証明書及び健康診断証明書は、「自動証明書発行機」(各キャンパスに設置されているどの機械からも発行可)により発行される。(但し、健康診断証明書は当該年度の健康診断を受診したものに限る。)

その際、学生証・暗証番号(入学手続時に登録)および発行手数料が必要となる。

上記以外の証明書については、「自動証明書発行機」では発行できないので、所沢総合事務センター大学院カウンターへ申し出ること。

(2) 通学証明書を必要とする者は、所沢総合事務センター大学院カウンターにおいて所定の手続きをとり、その交付を受けること。

(3) 学校学生生徒旅客運賃割引証(学割と略称)は、本人に限り年間10枚を限度として各キャンパス内に設置されている「自動証明書発行機」により発行される。

有効期間は発行日より3ヶ月間である。特別の理由(研究活動等)により年間10枚以上の学割証が必要になった場合は、所沢総合事務センターに申し出ること。

(4) 各種証明書の料金は所沢総合事務センター内に掲示してある。

4. 諸願および諸届

学生諸君が勉学上の事故や身分その他に異動があった場合には、必ずその事項についての願または届を提出しなければならない。以下その要領を説明する。

(1) 諸願・諸届の作成についての注意

①用紙は所沢総合事務センター大学院カウンターで交付する所定の用紙を用いること。

②楷書ではっきり記入すること。(鉛筆不可)

③休学願、復学願、退学願の本人氏名および保証人氏名の記入は、それぞれの自署とする。押印も同じ。

(2) 諸願・諸届提出についての注意

①留学願

留学をしようとする者は、所沢総合事務センター大学院カウンターに問い合わせること。

②休学願

ア. 病気その他の正当な理由により、引き続き2ヶ月以上授業(試験を含む)に出席することができない者は、必ず指導教員に相談したうえで所定の「休学願」を提出(その際、医師の診断書も添付する必要あり)し、研究科運営委員会の承認を得て休学することができる。

イ. 休学は当該学期限りであるが、特別の事情のある場合には、継続して合計2年に限り休学を許可することがある。

ウ. 病気で休学する場合は必ず医師(公立病院等)の診断書を添えなければならない。

エ. 休学中の学費については、所沢総合事務センター大学院カウンターに問い合わせること。

③復学願

ア. 復学は学年始めに限られる。

イ. 病気による休学で復学する場合は、必ず就学可能と認める医師の診断書を添付しなければならない。

ウ. 復学が許された者は、復学する学期分の授業料等を納入し、裏面シールの交付を受ける。

④退学願

- ア. 退学を願っている場合は、退学願のほかに学生証を添えなければならない。
- イ. 学年の途中で退学する場合でも、その期の学費を納めなければならない。納入していない場合は、退学扱いとはせず抹籍扱いとする。

⑤現住所変更届、改姓(名)届、その他

- ア. 本人または保証人が住所を変更した場合には、ただちにその旨を所沢総合事務センター大学院カウンターに届け出なければならない。
- イ. 改姓(名)を行った場合には、その届に戸籍抄本を添付しなければならない。
- ウ. 保証人が死亡した場合、またはそのほかの理由で変更を必要とする場合には、新しい保証人を選定して届け出なければならない。

5. 各種補助

(1) 複写代補助費

複写代の補助として、博士後期課程在学者(助手・休学者は除く)に対して、年間5,000円相当のコピーカードを配付している。配付時期については、その都度掲示で通知する。

(2) 海外論文発表補助費

博士後期課程の学生に対して、国際会議・シンポジウム等に参加し、研究論文等の発表を行う際に必要な経費(①登録料、②海外旅費)の一部を補助する。

(補助対象者)

大学院博士後期課程に在学する学生(助手、DC奨励研究費の交付を受けている者、休学者は除く。ただし、海外留学による休学者は対象)。

(補助の対象となる国際会議等)

二ヶ国間以上の参加者を対象とする、専門学会等が主催する国際会議・シンポジウム等。

(補助額および補助回数)

- ①国際会議論文発表登録料補助：55,000円を上限として登録料の一部を補助する。学生1人に対する補助回数は年1回。
- ②海外論文発表出張旅費：海外で行われる国際会議・シンポジウム等において研究論文の発表を行う場合、110,000円を上限として海外旅行の一部を補助する。出張期間は、海外学会開催期間に移動日を加えた期間とし、それを越えた場合は補助されない場合がある。学生1人に対する補助回数は年1回とする。

(申請手続)

この補助費を受けようとする場合は、「海外論文発表補助費交付申請書」および「学会・研究出張願」とともに、申請者が研究論文等の発表を行なうことが明記されている、国際会議・シンポジウム等のプログラム等および航空運賃等の領収書または見積書を添付し、所属研究科を経由して、大学に申請すること。

(3) 学会発表補助費(2002年度以前入学者のみに適用)

学生本人が発表代表者として、学会発表に要した費用の一部を補助する。

(補助対象者)

大学院博士後期課程および修士課程に在学する学生。

(補助の対象となる学会等)

- ①博士後期課程:全国規模の学会等。

②修士課程：全国規模の学会等または、国内および国外で開催される二ヶ国間以上の参加者を対象とする国際学会等。

(補助額および補助回数)

補助の対象は参加費のみとし3,000円を上限とし年度内一人1回(交通費・懇親会費は含まない)。

(申請手続)

この補助費を受けようとする場合は、「申請書」「参加費の領収書」「学会の案内」「発表抄録」「プログラムの写し」を所沢総合事務センター大学院カウンターへ提出すること。

なお、申請の時期は領収書の日付から3ヶ月以内で原則として年度内。

(4) 学術論文掲載料補助費(2002年度以前入学者のみに適用)

学生本人が第一著者である原著論文の学術雑誌掲載に要した費用の一部を補助する。

(補助対象者)

大学院博士後期課程および修士課程に在学する学生。

(補助の対象となる費用)

投稿料・別刷代・追加別刷代(振替・送金の手数料は対象外)

(補助額および補助回数)

1件10,000円を上限とし年度内に一人1件。

(申請手続)

学会等の請求書および学生本人が宛先になっている領収書(コピー不可)を所沢総合事務センター大学院カウンターへ提出すること。

なお、申請の時期は領収書の日付から3ヶ月以内で原則として同年度内。

6. 所沢総合事務センター

100号館4階に所沢総合事務センターがあり、大学院に関する諸手続は事務センター内大学院カウンターで行っている。開室時間は、午前9時から午後5時を原則としているが、期間により変更することがあるため、事務センター前に掲示される開室時間を確認すること。

なお、日曜日、国民の祝日、創立記念日、夏季・冬季休業中の土曜日、夏季事務所一斉休業期間、年末年始は事務センターは閉室する。

また、土曜日は取り扱う業務が限定されるため、可能な限り平日に事務センターを利用されたい。

7. 掲示

大学および大学院からの学生に対する伝達事項は、すべて掲示によることになっているから、登校の際必ず見る習慣をつけること。

掲示を見落とすと、思いがけない重大な結果を招くことがあるから十分注意されたい。

掲示場は、教務に関する一切のこと、奨学金関係、大学および大学院からの伝達、その他事務所からの連絡などに使用する。

なお、本研究科の掲示場は、Dゾーン(所沢総合事務センター・図書館開放閲覧室横)に設置されている。

8. 交通機関のストライキと授業

首都圏のJR等がストを実施した場合の授業休講措置について

1. JR等交通機関のストが実施された場合(ゼネスト)

首都圏におけるJRのストが

- A 午前0時までに中止された場合、平常どおり授業を行う。
- B 午前8時までに中止された場合、3時限目(13時)から授業を行う。
- C 午前8時までに中止の決定がない場合は、終日休講とする。

上記はJRの順法闘争および私鉄のストには適用しない。

2. 首都圏JRの部分(拠点)ストが実施された場合平常通り授業を行う。
3. 首都圏JRの全面時限ストが実施された場合
 - A 午前8時までストが実施された場合、3時限目(13時)から授業を行う。
 - B 正午までストが実施された場合、6時限目(17時55分)から授業を行う。
 - C 正午を超えてストが実施された場合、終日休講とする。
4. JRを除く私鉄および都市交通のみのストが実施された場合平常通り授業を行う。
5. ただし、所沢キャンパスに設置された授業科目を受講する者については、上記1・2・3は適用されるが4については
 - ① 西武鉄道の新宿線または池袋線のどちらか一方でもストが実施された場合
 - ② ①の西武鉄道両線のストが実施されない場合でも、西武バスのストが実施された場合次のとおりとする。
 - A 午前8時までストが実施された場合、3時限目(13時)から授業を行う。
 - B 午前8時を超えてストが実施された場合、終日休講とする。

9. 気象警報の発表と授業休講・試験延期等の措置

気象庁より大雨、洪水、暴風、暴風雪、大雪のいずれかの気象警報が発表された場合、次の基準により、授業休講・試験延期の措置をとる。ただし、台風や大雪など、気象状況が時間の経過とともに悪化し、数時間後には警報の発令が十分予測される場合、教務部の判断により全学休講の措置を行うことがある。

1. 西早稲田キャンパス、戸山キャンパス、大久保キャンパス、日本橋キャンパスで実施される授業等については以下のとおりとする。
 - 各時限の授業始業時間90分前から授業始業時間までの間に、23区西部が警報下に置かれた場合、その時限の授業を休講とする。ただし、授業始業時間後から終了時間までの間に、23区西部が警報下に置かれた場合、その時限については、科目設置箇所判断の下、授業休講等の措置をとる。
 - 各時限の試験始業時間90分前から試験始業時間までの間に、23区西部が警報下に置かれた場合、その時限の試験は延期等の措置をとる。ただし、試験始業時間後から終了時間までの間に、23区西部が警報下に置かれた場合、その時限については、科目設置箇所判断の下、試験延期等の措置をとる。
- 注) 気象警報上、東京地方は23区東部、23区西部、多摩北部、多摩南部、多摩西部に分けられており伊豆諸島・小笠原諸島は含まれない。新宿区・中央区は、23区西部に含まれる。「23区西部が警報下に置かれる」とは、①東京全域、②23区東部および23区西部、③23区西部、のいずれかに警報が発表された場合が該当する。多摩地方にのみ警報が発表されても休講等の措置はとらない。
2. 所沢キャンパスで実施される授業等については以下のとおりとする。
 - 各時限の授業始業時間90分前から授業始業時間までの間に、埼玉南部(南中部)が警報下に置かれた場合、その時限の授業を休講とする。ただし、授業始業時間後から終了時間までの間に、埼玉南部(南中部)が警報下に置かれた場合、その時限については、科目設置箇所判断の下、授業休講等の措置をとる。
 - 各時限の試験始業時間90分前から試験始業時間までの間に、埼玉南部(南中部)が警報下に置かれ

た場合、その時限の試験は延期等の措置をとる。ただし、試験始業時間後から終了時間までの間に、埼玉南部(南中部)が警報下に置かれた場合、その時限については、科目設置箇所判断の下、試験延期等の措置をとる。

注) 埼玉地方は埼玉南部(南中部、南東部、南西部)、埼玉北部(北東部、北西部)、秩父地方に分けられている。所沢は、埼玉南部(南中部)に含まれる。

3. 東伏見キャンパスで実施される授業等については以下のとおりとする。

- 各時限の授業始業時間90分前から授業始業時間までの間に、多摩北部が警報下に置かれた場合、その時限の授業を休講とする。ただし、授業始業時間後から終了時間までの間に、多摩北部が警報下に置かれた場合、その時限については、科目設置箇所判断の下、授業休講等の措置をとる。
- 各時限の試験始業時間90分前から試験始業時間までの間に、多摩北部が警報下に置かれた場合、その時限の試験は延期等の措置をとる。ただし、試験始業時間後から終了時間までの間に多摩北部が警報下に置かれた場合、その時限については、科目設置箇所判断の下、試験延期等の措置をとる。

注) 東京地方は23区東部、23区西部、多摩北部、多摩南部、多摩西部に分けられており、東伏見(西東京市)は、多摩北部に含まれる。

4. 本庄キャンパスで実施される授業等については以下のとおりとする。

- 各時限の授業始業時間90分前から授業始業時間までの間に、埼玉北部(北西部)が警報下に置かれた場合、その時限の授業を休講とする。ただし、授業始業時間後から終了時間までの間に、埼玉北部(北西部)が警報下に置かれた場合、その時限については、科目設置箇所判断の下、授業休講等の措置をとる。
- 各時限の試験始業時間90分前から試験始業時間までの間に、埼玉北部(北西部)が警報下に置かれた時間帯があった場合、その時限の試験は延期等の措置をとる。ただし、試験始業時間後から終了時間までの間に埼玉北部(北西部)が警報下に置かれた場合、その時限については、科目設置箇所判断の下、試験延期等の措置をとる。

注) 埼玉地方は埼玉南部(南中部、南東部、南西部)、埼玉北部(北東部、北西部)、秩父地方に分けられている。本庄は、埼玉北部(北西部)に含まれる。

5. 北九州キャンパスで実施される授業等については以下のとおりとする。

- 各時限の授業始業時間90分前から授業始業時間までの間に、北九州地方が警報下に置かれた場合、その時限の授業を休講とする。ただし、授業始業時間後から終了時間までの間に、北九州地方が警報下に置かれた場合、その時限については、科目設置箇所判断の下、授業休講等の措置をとる。
- 各時限の試験始業時間90分前から試験始業時間までの間に、北九州地方が警報下に置かれた場合、その時限の試験は延期等の措置をとる。ただし、試験始業時間後から終了時間までの間に北九州地方が警報下に置かれた場合、その時限については、科目設置箇所判断の下、試験延期等の措置をとる。

上記の措置は、授業または試験始業時間90分前から終了までの時間帯の途中で警報が解除された場合でも変更しない。

また、所沢・東伏見・本庄・北九州の各キャンパスで実施される授業については、交通経路の気象状況等により、科目設置箇所が個別に判断し、休講とする場合がある。

なお、気象警報が発令された場合の休講等の措置については、各箇所のホームページ等で周知する。

<警報情報の入手方法>

1. NTT電話サービス(TEL 177)
2. 気象庁お天気相談室(TEL 03-3212-8341 但し、9:00~17:00)
3. 気象庁お天気案内<東京地方>(TEL 03-3212-3301 但し、9:00~17:00)

4. 熊谷地方気象台テレホンサービス<埼玉地方>(TEL 0485-26-8415)
5. 気象庁ホームページ <http://www.jma.go.jp/>
6. (財)日本気象協会ホームページ <http://tenki.jp/>
7. テレビ・ラジオ等のマスメディア

10. 自転車・自動車・オートバイの駐輪場・駐車場の利用について

所沢キャンパス内は、安全を確保するために、やむを得ない事情のない限り自動車・オートバイ(原付二輪車)の乗り入れはできない。

ただし、自転車で通学する場合には、所定の申請書を所沢総合事務センターへ提出し、駐輪場の利用許可を得なければならない。また、事情により自動車・オートバイで通学する場合にも、所定の申請書を所沢総合事務センターへ提出し、駐車場・駐輪場の利用許可を得なければならない。

自転車・自動車・オートバイでの通学にあたっては、交通の安全、災害・騒音の防止等をはかり、教育環境の保持に努めなければならない。

1) 自転車で通学する場合

(1) 登録ステッカーの交付を受けるには、次の書類を所沢総合事務センターに提出しなければならない。

- ① 登録申請書(所沢総合事務センターに備付)
- ② 学生証

※ 駐輪場利用料金は無料

(2) 登録ステッカーの有効期限は、大学院在学中とする。

(3) 登録申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、すみやかに所沢総合事務センターに届け出ること。

2) 事情により自動車で通学する場合

(1) 駐車許可証の交付を受けるには、次の書類等を所沢総合事務センターに提出しなければならない。

- ① 駐車許可申請書(所沢総合事務センターに備付)
- ② 学生証
- ③ 前年度分駐車許可証(前年度からの継続利用者のみ必要)
- ④ 駐車場利用料金(年額5,000円)

※ 駐車場利用料金については、年度途中からの申請でも同一額とする。

(2) 駐車許可証の有効期間は、交付を受けた年度(1年間)限りとする。次年度も利用する場合には、新規の申請時と同様の手続が必要である。

(3) 駐車許可申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、すみやかに所沢総合事務センターに届け出ること。

(4) 駐車許可証を他人に貸与し、または他人から借用してはならない。

3) 事情によりオートバイ(原付二輪車)で通学する場合

(1) 登録ステッカーの交付を受けるには、次の書類を所沢総合事務センターに提出しなければならない。

- ① 登録申請書(所沢総合事務センターに備付)
- ② 学生証

※ 駐輪場利用料金は無料

(2) 登録ステッカーの有効期限は、大学院在学中とする。

(3) 登録申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、すみやかに所沢総合事務センターに届け出ること。

4) 駐輪・駐車

- (1) 自転車・自動車・オートバイは、それぞれ指定された駐輪場(駐輪指定場所)・駐車場に駐輪・駐車しなければならない。駐輪場(駐輪指定場所)・駐車場以外の駐輪・駐車は厳禁する。
 - ① 自転車…正門自転車駐輪場または北門駐車場の自転車駐輪指定場所
 - ② 自動車…北門駐車場
 - ③ オートバイ…北門駐車場のオートバイ駐輪指定場所
- (2) 正門駐輪場の利用時間は、8:00から22:30(土日は21:30)までとする。(この時間帯以外は閉門となる。)
- (3) 自転車は登録ステッカーを後輪カバーに貼り、自動車は駐車許可証をフロントガラスに表を向けて置き、オートバイは登録ステッカーをナンバープレート付近に貼っておくこと。

5) 注意事項

- (1) 登録した自転車・自動車・オートバイ以外の駐輪・駐車は厳禁する。
- (2) 大学・大学院等の行事、施設・設備の工事等により、駐輪場・駐車場の使用制限をすることがある。
- (3) 駐輪場・駐車場内では徐行し、所定の区分に従って、整然と駐輪・駐車すること。
- (4) 駐輪場(駐輪指定場所)・駐車場以外の駐輪・駐車は、通行の妨げや災害時等の避難の妨げになるので厳禁する。駐輪場・駐車場以外に駐輪・駐車している場合、長期間放置されている場合は、管理上支障をきたすので排除または処分することがある。
- (5) キャンパス内、駐輪場・駐車場で的人為的事故、損傷等は、当事者間で解決すること。また、駐輪・駐車中の事故、災害、盗難等には、大学は一切責任を負わないので、各自十分に注意すること。(警察が指導する「防犯登録」は必ずしておくこと。)
- (6) 上記の事項に違反した場合、または大学の警告に従わない場合は、駐輪場・駐車場の利用許可を取り消すことがある。

1 1. 総合健康教育センター所沢分室

学生食堂近くの308号室にあり、次の業務を行っている。

内線 3308、緊急内線 3000、DI:04-2947-6706、Fax:04-2947-6804

業務内容

- (1) 学生・教職員の定期健康診断、特殊健康診断
- (2) 各種健康診断書の発行 (ただし、定期健康診断を受診した者に限る。)
- (3) 健康相談
- (4) スポーツ障害相談、リハビリ相談
- (5) 内科相談
- (6) 精神保健相談、その他の相談
※心療内科医および心理専門相談員による相談は、予約制
- (7) 救急処置・予防処置・傷病者の休養
- (8) 保健統計、健康管理に関する調査研究
- (9) 健康教育

1 2. 早稲田大学学生健康保険組合

この組合は、早稲田大学学生の相互扶助の精神に基づき、在学中の健康管理や傷病等につき一定額の補助を行い、学生の経済的負担をできる限り軽減させることを目的としている。

詳細については、「学生健康保険の案内」(所沢総合事務センターに常備してある)を参照のこと。
ホームページ:<http://www.waseda.jp/student/hoken/system.html>

1 3. 奨学金制度

本学の奨学金制度は、本学独自の大隈記念奨学金・小野梓記念奨学金・博士後期課程奨学金などの学内奨学金をはじめ、日本学生支援機構・民間団体・地方公共団体の奨学金がある。

いずれの奨学金も、人物・学業成績が優秀でありながら、経済的理由により修学が困難な学生に給付または貸与することによって教育の機会均等を図るとともに、社会に貢献する人材の育成を目的としている。

これらの奨学金を受けるには、所沢総合事務センターで配付している「CHALLENGE(奨学金情報大学院学生用)」を受け取り、これにしたがって必要な手続きを行うことになる。

なお、奨学金の募集時期は、毎年4月上旬(全学年)であるので、それ以前に「CHALLENGE(奨学金情報) 大学院学生用」を受け取る必要がある。

1 4. 学生教育研究災害傷害保険

本学は、教育研究活動中や課外活動中の不慮の災害事故補償のために、保険料全額大学負担で、全学部、全大学院、日本語研究教育センターの正規学生(過年度生を含む)に対して、「学生教育研究災害保険(学災保)」に加入している。

この保険は財団法人日本国際教育支援協会と国内損害保険会社との契約により実施されているもので、大学施設内外の正課中、大学行事中、課外活動中(大学施設外の場合は事前の届け出が必要)、大学施設内の事故を保険適用範囲にしている。

適用範囲や手続き方法については、早稲田大学ホームページを参照のこと(関連ホームページ 学生教育研究災害傷害保険 http://www.waseda.jp/student/hoken/gakusaiho_index.html 学生教育研究賠償責任保険 http://www.waseda.jp/student/hoken/gakkenbai_index.html)。

課外活動中の事故の場合は、事前の届け出がなければ、適用を受けることができない。

各サークルは、大学外での諸活動(合宿・研究・見学旅行・登山・試合など)を行う場合は、必ず、学生生活課事務所(学生会館1階)に事前に届け出ること。また、大学院におけるゼミ合宿は所沢総合事務センター 大学院カウンターへ、体育各部の部活動はオープン教育センター戸山分室(35号館)に事前の届け出を行うと共に、万一事故が発生した場合は、必ず事故報告を行うことを徹底すること。

特に、夏季・冬季授業休止期間中などに国外において課外活動を行う際には、事前に綿密な計画を立て、予備調査を行った上、届け出を行うと共に、早稲田大学学生であると同時に社会的責任を負うべき市民であることを自覚し、節度ある行動をとることを希望する。

X V 所沢図書館および中央図書館の利用について

はじめに

所沢キャンパスのほぼ中央に位置する所沢図書館は、人間科学、スポーツ科学に関連する専門書や学習書、学術雑誌を中心に、利用者の一般教養に資する図書、雑誌等を収蔵している。

中庭に面して「コ」の字形をした所沢図書館は、開架図書エリア、バックナンバー書庫、新刊雑誌コーナー等の資料収蔵施設と、一般閲覧席、教職員・大学院学生を対象とした閲覧個室、グループ学習ができるグループ閲覧室といった閲覧用の施設からなっている。

最近の情報化社会の中では大学図書館としてもデータベースの充実が必須であるが、図書館全体では国内外の各種データベースを契約している。またそれ以外にも所沢図書館固有の契約としてPsycINFO(心理学)、Sport Discuss(スポーツ医学)なども利用できる。

利用について

1. 開館時間

平日 9:00～21:00

土曜日 9:00～18:00

授業休止期間 月曜日～金曜日 9:00～18:00

2. 休館日

日曜日、祝日、大学創立記念日(10月21日)、夏・冬・春季休業期間の一定期間。

そのほか、業務上休館の必要がある場合。

3. 利用者カード

(1) 図書館の入館および図書の貸出には、学生証を利用者カードとして使用する。

(2) 学生証は、在学中有効なので大切に扱うこと。

(3) 学生証は、本人以外は使用できない。

(4) 学生証を紛失したときは、ただちに大学院事務所に届け出ること。

4. 入退館

(1) 入館するときは、学生証を自動入館装置にスキャンして入館する。

(2) 退館口には、BDS(図書無断帯出防止装置)が設置されている。

図書を館外に貸出する時は、必ずカウンターで手続きをすること。

5. 資料の探し方

(1) 全ての図書は、日本十進分類法(NDC)によって分類され、配架されている。

(2) 図書を探すときは早稲田大学学術情報検索システム(WINE)の端末を利用する。端末の使い方がわからないときは館員に相談すること。

6. 貸出・返却

(1) 貸出・返却は、カウンターで手続きをすること。なお、閉館時の返却には、専用のブックポストも利用できる。

(2) 貸出冊数は30冊、貸出期間は30日とする。

(3) 参考図書および雑誌等は、館外に貸出できない。

(4) 返却期間が過ぎても返却がない場合には、反則規定が適用される。

(5) 図書を紛失したり、破損したときには、ただちに届け出ること。原則として現物または相当金額を弁償することになる。

7. 利用上の注意

- (1) 館内では他人に迷惑をかけないよう、雑談などは慎むこと。
- (2) 閲覧した図書は、配架されていた元の正確な位置に戻すか、返却台に置くこと。
- (3) 館内は禁煙とする。
- (4) 館内への飲食物の持ち込みは禁止されている。
- (5) 入館の際は携帯電話のスイッチを切ること。
- (6) 館内では盗難の恐れもあるので貴重品などは机上に放置しないこと。

8. 施設の利用

(1) 開放閲覧室(46席)

ホールから入るとすぐに開放閲覧室があり、ここは図書館の閉館後も利用できる。

(2) 新聞閲覧コーナー

ソファを配置してロビー風にしてあるので、気軽に利用できる。前月分まで保存してある。

(3) AVコーナー

VTR・LD・DVDが利用できる。また、このコーナーでは就職ガイダンス用のビデオも利用できる。

(4) 情報検索室

WINE検索用端末機、外部データ・ベース検索用端末機およびインターネット検索用のパソコン、マイクロリーダー・プリンター等が利用できる。

(5) エントランスホール

カウンター脇のエントランスホールは、ソファを配置してロビー風になっている。付近に学生向の雑誌および文庫本を配架してあるので、勉強の合間に気軽に利用できる。

(6) グループ閲覧室(10席/2室)

少人数授業が優先だが、空いた時間はグループで学習および研究等を行うときに利用できる。

(7) コピーコーナー

カード式複写機をコピーコーナーと新刊学術雑誌コーナーに設置してある。利用は図書館所蔵資料のコピーに限る。

(8) 参考図書コーナー

辞書、事典、便覧、ハンドブック、地図等の参考図書が集められている。

(9) 開架閲覧室(200席)

和書が配架されている開架書架をはさんで、南側と北側の雰囲気の違いの違う閲覧席がある。

(10) 教員・大学院生用開架図書エリア

①新刊学術雑誌コーナー、②ラウンジ・コピーコーナー、③検索コーナー、④閲覧個室、⑤洋書書庫、⑥バックナンバー書庫、⑦キャレル(閲覧席)等で構成されており、教員・大学院生等の研究者が利用しやすいエリアになっている。

中央図書館およびキャンパス図書館の利用について

早稲田大学創立100周年記念事業の一環として計画され建設された中央図書館は、蔵書数・座席数ともに大学図書館としては日本有数の設備規模である。また、学内の各キャンパスには、高田早苗記念研究図書館、戸山図書館、理工学図書館があり、それぞれ特色ある資料を収集し、利用に供している。

所沢図書館は、キャンパス図書館の一つとして位置づけられ、学術情報検索システムで結ばれているので、所沢の端末機から上記各図書館の図書がオンラインで検索可能であり、資料の取り寄せもできる。また、中央図書館、各キャンパス図書館へ直接出向いて利用することもできる。利用の方法は各館の利用案内を参照のこと。

XVI 研究指導・演習・講義科目の概要

－修士課程－

【研究指導】

[地域・地球環境科学研究領域]

環境管理計画学研究指導

天野 正博

地球規模での環境問題のうち、地球温暖化と熱帯林の減少問題に焦点を当てながら、地球環境問題の現状を統計データなどから分析するとともに、問題が生じる社会構造を明らかにするため現象をモデル化する手法を習得し、モデルを用いてどのような対策を立てるべきかを考える。また、地球環境問題を解決するための様々な国際的取り決めについて、それに対する各国の利害関係と取り組み方について検討する。

人口学研究指導

阿藤 誠

文献講読とディスカッションを通じて、人口研究分野のなかで修士論文のテーマとして興味のもてる研究課題を絞り込む。各自の研究計画書に基づき、研究指導スケジュールを立て、必要な技術の習得を勧め、修士論文の作成につなげていく。

生物圏生態学研究指導

太田 俊二

人間圏を含む生物圏の動態をいかに定量化するかが修士研究の鍵となるであろう。本研究指導では、毎週各自の修士研究の進捗状況を報告、討論していく過程を通じて、新しい知見を得られるような研究デザインを描けるように指導する。また、研究成果を学会発表、学術雑誌などで公表する具体的な方法についても指導する。

環境生態学研究指導

森川 靖

産業革命以降、「人」は化石燃料と近代科学を手にし、生産活動を飛躍させた。このような人間活動は、環境に影響を与え、またその影響は「人」の存在そのものを危うくし始めた。本研究指導では、環境生態学演習(1)(2)での習熟をふまえ、人間活動が地域、地球環境に及ぼす影響を総合的に考察し、今後の人間生存に関する問題を具体的にとりあげて、研究をすすめる。

環境社会学研究指導

鳥越 皓之

論文作成にあたっての具体的な指導をおこなう。各自のテーマに合わせて指導をおこなうことになるが、それに必要な基本文献の検討なども随時おこなう必要がある。基本的には環境社会学の分野での研究指導になるだろう。

社会人類学研究指導

矢野 敬生

〈異なる文化〉を対象として、それぞれの文化を成り立たせている社会システムを中心に解析することを目的とする。履修院生各自の研究課題に即して具体的な研究テーマを設定する(たとえば、「東南アジア島嶼部社会

の分析視角に関する再検討]・「東アジア社会の基層構造」など)。こうした理論的研究に加えて、各自の研究発表・フィールド調査の指導・論文プロポーザルの作成等について研究指導を行う。

[人間行動・環境科学研究領域]

学習動機づけ論研究指導

青柳 肇

教育に関係する心理学のなかから、特に発展の著しい領域として、学習動機づけ(達成動機づけ、内発的動機づけ、自己決定傾向、原因帰属、学習性無力感)を取りあげるが、そればかりでなく親和動機、アタッチメント、愛他動機などそれに付随する領域も取り上げる。学生各人の専門領域の研究(卒業研究、学会発表、修論計画)を発表させ、それについて、研究方法と考察の仕方からアドバイスを与える。

発達行動学研究指導

根ヶ山 光一

各自の研究テーマについて、研究計画(いかなる課題に焦点化し、そこに他の先行研究と差違化していかにか originality を盛り込むか、どう仮説を立てそれをどういう手法によって明らかにするか)・実施(フィールドや実験場面をどう確保し、具体的な手続きをどうするか)・分析(どのような分析手法を用いて、どのように結果をまとめるか)・考察(データと仮説・先行研究をつきあわせ、整合性のある議論をどう行うか)・発表(研究成果をどうまとめ、口頭もしくは論文で発表するか)の指導を行う。

環境心理学研究指導

佐古 順彦

人間と環境の関係に心理学の理論と方法を適用してアプローチする。自然と人工の環境が人間心理に関係して問題を生じる時に、それらを緩和し解決するモデルを提案する。人間の心理と関連する環境の側面は、しばしば多様で、直接の周囲であったり、住居や施設・機関であったり、より広い地域や、場合によっては地球環境である。これらの環境によって影響を受け、あるいは影響を与える人間の心理的要因について考察する。

建築計画学研究指導

佐野 友紀

建築、都市計画に関わる問題を発見し、分析を行うことで、問題解決の方法を提案することを目的とする。受講者各自が設定した、建築、都市計画に関わるテーマについて、実習的に調査分析を行う。加えて、数理的、統計的分析を含んだ手法によって、現象を分析し、結論を導きだす過程をまなぶ。指導は受講者の発表、ディスカッションを通して問題解決の方法を探る。また、研究指導を通して、成果を論文形式にまとめ発表する。

[文化・社会環境科学研究領域]

産業職業社会学研究指導

河西 宏祐

産業社会学、職業社会学の分野における研究テーマ(仕事、職業、日本的経営、人事管理、労使関係、労働組合など)についての文献を講読するとともに、産業・職業の領域について設定した研究課題に即して実態調査を実施する。収集した調査資料と文献資料とあわせて考察し、理論化を行う。それを通して論文を作成できるよう指導する。

文化生態学研究指導

蔵持 不三也

この研究指導では、受講生の研究テーマの展開を促すための助言とともに、論文作成のための実践的な手

法を教授する。そのため、受講生は研究発表を義務づけられる。

アジア社会論研究指導

店田 廣文

中東・北アフリカ、アジアおよび日本の都市社会を主たる対象に、各自の研究課題に即して、実証的な比較研究を実施する。研究課題は都市社会研究に限定せず、近代化以降の、日本および発展途上社会の多様な研究課題が指導の対象となる。現在のところ、イスラーム、少子高齢化、貧困と開発政策、近代家族の変容など、日本とアジア諸国を対象とする研究指導が中心である。また、諸外国を対象とする調査研究をおこなう学生については、学部の東南アジアにおける現地調査に協力参加させて現地調査の企画・実査と分析の能力養成をはかり、自ら現地調査研究をおこなうよう指導している。

移住論研究指導

森本 豊富

越境する民としての移民と在留民の異文化接触に関する調査研究を行う。具体的には、日本における移民研究の蓄積を踏まえながら世界の移民研究動向にも目を配り、個々の関心にあわせて越境する民にまつわる様々な現象を学際的な観点から考察する。

履修者は、自らの研究に関する先行研究を批判的に検証、整理し、オリジナリティのある調査を目指す。

家族社会学研究指導

池岡 義孝

家族をめぐるさまざまな社会現象や家族問題を研究テーマとする。研究のアプローチとしては、インタビューや会話データ、活字記録、画像・映像などの言説データやドキュメントデータにもとづく質的な研究法を重視する。そのため、質的な家族研究法および欧米と日本の家族研究史ないしは家族学説史の学習を、文献研究と実際の社会調査を併用したかたちで行うことにしたい。各人の研究については、これら基礎的な学習を前提にしながら取り組むよう指導する。

都市社会学研究指導

臼井 恒夫

都市は人間がつくった最大の創造物であるといわれる。しかし、人間のためにつくられたはずの都市は、しばしば人間の手を離れて一人歩きをしていく。現代の都市や都市社会を理解するためには、どのような視点が必要とされるのか。本研究指導では、都市社会学の研究を参照しながら、受講生の問題関心に沿った研究を進めていくための指導を行う。

科学史・科学論研究指導

加藤 茂生

受講生の関心に応じて、科学史、科学哲学、科学社会学など広い意味での科学論の研究の指導を行う。

物質文化論研究指導

谷川 章雄

考古学は、主として発掘調査の成果をもとに、モノと人間との関係を読み解く学問である。また、考古学は調査・研究のさまざまなレベルにおいて、歴史学・民俗学をはじめとする他の領域との接点をもっており、総合的、学際的方向性を本質的に内包している分野である。こうした視点にもとづいて、各自が論文を作成していく上での資料の特質と限界と観察・記載の方法、分析の方法、解釈の方向性などについて指導する。

表象文化論研究指導

中村 要

人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、

異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題: 表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

政治社会文化論研究指導

村上 公子

ドイツ連邦共和国の「過去」との取り組みの変遷を学び、それを通して一つの国家が国家として成立するとはどのようなことであるのかを考える。

技術文化論研究指導

余語 琢磨

技術文化論とは、モノ(資源、道具、身体)に働きかけるヒトの技術的営為を軸として、自然・社会・文化環境における両者の民俗的・歴史的な相互作用を追求する研究である。本研究指導では、技術史・技術文化論演習での理論的・実践的な蓄積をふまえたうえで、日本および東アジア・東南アジアをフィールドとする生活史・生活文化研究、生業史・生業研究、医療人類学・身体論研究について、調査研究計画の立案から修士論文の作成にいたるまでの指導を行う。

[健康・生命医科学研究領域]

生体発達科学研究指導

木村 一郎

細胞の増殖、分化、形態形成を制御している様々な要因について研究する。特に、細胞培養系を用いて骨格筋前駆細胞の分化過程の制御機構、とりわけ、成長因子などの液性因子の作用を中心に研究する。主な研究課題は、体節の筋原細胞や成体の筋衛星細胞の増殖、分化、細胞移動等の制御機構、筋細胞の死と再生の制御機構、筋前駆細胞における細胞融合の制御機構など。

生体構造学研究指導

小室 輝昌

末梢神経系終末部とその支配領域の構造について、主として電子顕微鏡的手法、免疫組織化学的手法等を使って明らかにし、各組織、器官における神経性調節機構について理解をすすめる。現在は、自律神経系末梢部の構造について、特に意を注いでいる。

生体機能学研究指導

今泉 和彦

骨格筋の可塑性(肥大・萎縮)とその調節機構、微量元素(亜鉛・鉄)欠乏による遺伝子発現および生体情報伝達シグナル応答とその機構、ドーピング作動薬(β_2 -アゴニスト)・茶カテキン・アルコール・香辛料摂取による代謝応答とその調節機構を明らかにするため、主として動物実験を中心として研究する。これらの研究を推進すると共に、日々の研究、論文の検索・読み方、実験法の測定・解析の習得および研究発表・論文の書き方・纏め方などについて直接指導・助言する。

神経内分泌学研究指導

山内 兄人

生殖細胞の成熟、排卵、性行動、妊娠、授乳、母性行動にいたる子どもをつくる雌の生殖機能は、脳と生殖器官それに内分泌器官の相互作用により正常に保たれている。雄においても精子形成や性行動は神経とホルモンにより制御されている。雌雄の生殖機能には大きな違いがあるが、それは脳の性分化の結果でもある。当研究指導では、ラットの脳における生理現象および行動の制御機構を神経内分泌学、神経組織化学、神経解剖学、および神経行動学的手法により解析し、また脳の性差および、その機序を明らかにする。生殖機能に

関しては特にセロトニン神経系に着目している。

運動制御・バイオメカニクス研究指導

鈴木 秀次

身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。本研究指導の特徴は、姿勢維持やロコモーション中における身体運動を運動制御とバイオメカニクスの領域から総合的に研究し、動きの仕組みを解明するところにある。よって指導内容は、その動きが神経的にどのように制御されているかを研究する神経生理の領域と、動きについて研究するキネマティクス、そしてその動きの起こりとなる力について研究するキネティクスの領域が中心となる。そのため、上記の研究課題に関連の深い文献を読み、十分な討論を行うと共に、特定の研究課題に対する問題点の所在を明らかにし、修士論文を纏める上での科学的なものの見方や考え方を養うことを目的とする。

統合生理学研究指導

永島 計

体温のリズム解析、その疾患との関係(不登校、不眠などとの関係)

体温調節の性差 呼吸不全患者の運動処方(在宅半管理型リハビリ) 温度感受性の機序の解明を大きなプロジェクトとし、これらへの研究参加をテーマとする。当初は補助的な役割であるが、到達度に応じて主導型の研究を行い、教官はこれを指導していく予定である。

体温、体液生理学の基礎を学習、研究することを目標とする。

また一般の医学、生理学の知識を習得し、到達度に応じて個々の研究をすすめていく。

応用免疫学研究指導

鈴木 克彦

本研究指導では、まず免疫学の基礎知識を習得しながら、それらがいかにライフスタイルと関連し、疾患の診断・治療・予防に応用されているかを幅広く学習する。その上で各自の研究テーマを設定し、修士論文の作成を進める。

健康医学研究指導

河手 典彦

わが国の平均寿命の延長について、多岐にわたる要因が関連していることは理解に難くない。

人生を謳歌するためには単なる生命の延長に止まらず、所謂健康寿命を延長することが肝要であり、健康医学もこの目標を実現するための方策を検討する一領域として捉えることができる。

人の健康寿命の延長は、健康医学を学びそして実践する際の大きな目標の一つである。

本研究指導では、Medical Aspects of Health Maintenance を根幹に据えている。即ち、臨床医学的要素の高い研究領域を特色とする。

健康医学の多岐にわたる取り組みの現状を学び取り、それらの中の問題点を探りながら各自で選択した課題について調査・研究を開始する。適時、応談による指針提示などを交えながら研究を進捗させ、論文作成指導を行う。

応用健康科学研究指導

竹中 晃二

身体活動・運動の心理・行動科学的研究を行う。主な研究課題は、身体活動増強を目的とした行動変容介入の効果、定期的な身体活動・運動習慣がメンタル・ヘルスに及ぼす影響、一過性の身体活動・運動が気分および感情の変容に及ぼす効果、身体活動と QOL およびウェルネスの関係、身体的セルフエフィカシーと心理的安寧、心理的安寧強化のための運動療法、運動アドヒアランス強化の方法、運動アディクションの評価基準と予防、身体運動、瞑想、およびリラクセーションの関係、子どものストレス・マネジメント教育、勤労者のスト

レス対処、高齢者・障害者の健康関連 QOL およびウェルネス、女性のスポーツ参加に伴う諸問題(月経障害、摂食障害、抑うつなど)とその予防、スポーツ選手のストレス・マネジメント、スポーツ競技の心理的スキル・トレーニング、スポーツ障害の防止と心理的ケアである。

医療人類学研究指導

辻内 琢也

健康や病い(health and illness)、そして医療や臨床の現実とは、身体的・心理的・社会的・文化的(bio-psycho-socio-cultural)な複合産物として構築されている。医療人類学では、その複合産物に影響を与える生物生態学のおよび社会文化的要因について、人類の歴史を背景に比較文化的に探求する。様々な世界各地における健康増進(health-promotion)運動、瞑想・気功などの宗教的・シャーマニック医療における“癒し”の精神生理学的メカニズム、近代の生物医学システムの抱える諸課題、災厄や苦悩の表象としての病いの語り(narrative)、などを研究対象とする。

<KeyWord>病いの語り、ナラティブ・ベイスト・メディスン(NBM)、保健医療行動、質的心理学研究、補完代替医療、東洋医学、世界の伝統医学、医療の文化人類学、臨床人類学、スピリチュアリティ

【健康福祉科学研究領域】

支援工学研究指導

山内 繁

WHOは2001年に国際障害分類(ICIDH)を改訂し、国際生活機能分類(ICF)を策定した。この背後にあるのは、古典的医学モデルを否定し、医学モデル(medical model)と社会モデル(social model)の弁証法としてとらえる障害モデルのパラダイム転換である。この転換に伴って、機能障害の補償とADLの回復を目的とした支援機器は、参加と活動を支援し、QOLの向上を目指すものと位置づけられる。このような立場に立った工学を構築する立場から研究課題を設定し、研究を進める。なお、ICFの提起した課題は、医学モデルと社会モデルの弁証法的対立を克服し、統合モデル(integrative model)を建設することにある。支援工学の構築を通じて、統合モデルの具体的検証を行いたい。

特に、研究の目的(intention)から出発し、それにアプローチするための戦略(strategy)に基づいて、限定された期間内の目標(goal)を設定し、それを達成するためのプロセスを体験する。なお、ディシプリンのモデルとしては、Thomas Kuhnのモデルを手がかりとしてきたが、必ずしもこれに固執するものではない。

福祉産業学研究指導

可部 明克

演習(1)・演習(2)をベースに、健康福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業との共同研究を中心として、プロジェクトの企画・推進を通じた実践力を養成する。

さらに、MOT(Management of Technology)の基本となる技術・経営の知識と実践的なプロジェクト経験により、企業での研究開発力の養成を行う。

老年社会福祉学研究指導

加瀬 裕子

高齢化や少子化によって生じる個人的社会的問題について、老年社会福祉学における研究をレビューし、問題意識から仮説モデルの策定、研究方法の設定へと研究計画を展開する方法を指導する。

バイオエシックス研究指導

土田 友章

履修者の研究について討議し、バイオエシックスの基礎的文献や最近の話題を参照しながら指導する。

スポーツ健康マネジメント論研究指導

吉村 正

スポーツ健康マネジメントを専門的に学習する場合、その現場を知ることが極めて重要である。本研究指導では、スポーツや健康に関連する組織や企業に出向き、あるいはチームやグループに合流し、そこでマネジメントの方法を学習する。

日々の研究・教育活動では、指導者の在り方学習、コーチング技術の習得学習、関連文献の講読、レジュメや論文作成の指導等を行う。

社会保障政策論研究指導

植村 尚史

社会保障政策は、年金政策、医療政策、介護政策等幅広い範囲にわたっているため、その中から具体的なテーマを選定し研究を進める。研究方法についても、テーマによって異なるため、その内容に応じた研究方法を選定する。

予防医学研究指導

町田 和彦

ライフスタイルと免疫能を中心とした生体防御機能(動物実験)、高齢者の健康増進運動(血清疫学調査と面接調査により、ライフスタイルと生体防御機能との関係把握とともにレセプト分析による医療費に及ぼす影響も視点に入れている)および健康に関するフィールド調査を行っている。

幼少児福祉教育論研究指導

前橋 明

子どもたちが心身ともに健康で生き生きとした暮らしがおくれるように、これまで数多くの福祉・幼少児教育研究がなされ、あわせて児童家庭福祉施策が講じられてきた。しかし、近年になって、子どもたちの抱える心身や生活上の問題は、非常に複雑、多岐にわたり、新たな展開が迫られている。

こうした社会や生活の背景を踏まえながら、近年のこの分野での研究動向について指導し、さらに各自の研究テーマに基づいて、研究計画の実践と論文の作成、成果の発表ができるよう、研究指導を展開する。

緩和医療学研究指導

小野 充一

個人の“死”を、“生命の終わり”と捉える視点から、新しい世代への“生命の伝承”という視点に変換していくことで獲得する様々な“受容の概念”について、伝承されるものを受け止める側と伝える側の両極から検証し、支える技術、支えられる方法、関係性調整の方法などを具体的に研究する作業を指導する。

障害児福祉論研究指導

川名 はつ子

障害の有無にかかわらず地域で共生する「ノーマライゼーション」について、障害をもつ子どもとその家族の支援に即して理論的・実践的に考究する。「障害はないにこしたことはない」というこれまでの前提をも疑う「障害学」の主張に耳を傾けながら、当事者のニーズに沿った援助のあり方を探っていく。(1)WHO による ICD や ICF 分類の意義、自閉症・ADHD・LD を発達障害と名づけることの社会的意味などについての理論的研究や、(2)事例にもとづく出生前診断、障害告知、障害受容、療育、特殊教育・統合教育、障害児・被虐待児の社会的養護についての実践的研究を通じて、真の社会参加と平等に至る、よりよい将来像の形成に寄与することをめざす。

[臨床心理学研究領域]

心身医学研究指導

野村 忍

心身医学は、患者を身体面のみならず心理社会面をも含めて全人的なアプローチを行う医学である。心身症や神経症の診断・治療のみならず健常者における心身相関の研究やヘルスプロモーションに関わる研究を行っている。ここでは、修士論文作成の指導(グループ指導ならびに個人指導)を行う。各自の研究計画書に基づき、研究指導スケジュールを立て、研究計画の実践、論文作成まで指導する。

認知行動カウンセリング学研究指導

根建 金男

認知行動カウンセリングは、従来の行動カウンセリングと精神療法などの認知的アプローチが融合して形成された比較的新しい科学的なアプローチである。近年は、認知行動カウンセリングを支える認知行動理論の発展もめざましい。特に、不安障害、強迫性障害、統合失調症などの新しいモデルが提示され、それらをめぐる実証研究も盛んである。一方、従来の典型的な合理的認知行動カウンセリングの限界を乗り越えるべく登場した構成主義的認知行動カウンセリングも活発になってきた。構成主義では、人の一生涯の発達を視野にいれたうえで、人が世界をどう構成(認識)しているかをその人の側から真剣に理解し、アプローチしようとする。この考え方はエビデンス重視の典型的な認知行動カウンセリングの難点を補い発展させるうえで重要である。カウンセリングは精神疾患のある人に限らず健常者をも広く対象とするものであることを念頭に置いたうえで、上記の研究動向を更に推し進めるような研究を行うことが必要である。そこで、この研究指導では、認知行動カウンセリング学あるいはそれと関連する領域の研究を実施し、修士論文をまとめることができるように指導する。

学校カウンセリング学研究指導

菅野 純

学校カウンセリングは、単に学校内でのカウンセリング活動というレベルにとどまらず、乳幼児期の発達心理学、発達障害心理学、そして児童期から青年期に至る臨床心理学、カウンセリング心理学、教育臨床心理学、教育社会心理学、教育心理学、家族心理学などを含む総合的領域である。ここでは学校カウンセリング演習(1)(2)と教育心理臨床体験をふまえ、各自が定めたテーマにそって研究をすすめていく。

心理臨床学研究指導

山崎 久美子

心理臨床の場では高度な専門的知識と技能とに裏打ちされた臨床心理査定や臨床心理面接・援助が行われる。ここでは、各自の心理臨床能力の向上につながる研究テーマを見つけ、心理臨床の場で臨床活動しながら研究を行うことを原則とする。

行動臨床心理学研究指導

嶋田 洋徳

臨床心理学におけるさまざまな問題に対して、(認知)行動論的アプローチを用いて研究と実践を行う。特に、不安、抑うつ、心理的ストレス、学校不適応、職場不適応、心身症などについて、行動療法、認知行動療法の観点から理解される症状や問題行動の理論モデルの検討、治療モデルの検討、症状の形成と維持、治療効果に及ぼす個人差変数の検討などが主なテーマとなる。

[感性認知情報システム研究領域]

感性認知科学研究指導

齋藤 美穂

情報化社会におけるバーチャルな空間は各国間の隔たりをますます小さくしている。このような環境において

他の文化における感性の違いを知ることはグローバルなマーケティング戦略を展開する為に必要不可欠と考えられる。

日本語の「感性」は今や国際語“Kansei”として認知されつつあるが、感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究方法も多岐にわたる。そこでこの研究指導では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当て、具体的研究として色彩やデザインの認知およびその利用方法、さらにそれらの嗜好に対する文化的差異を切り口とした研究を主たるテーマとして感性を検討し指導する。ノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知や感性的な側面を十分に検討する事は重要なテーマとなる。また特に文化的差異を視野に入れる事は、情報化社会においてこれからますます必要になると考えられる。これらの研究テーマ(具体的には「感性認知科学演習(1)」および「感性認知科学演習(2)」に記載)に沿って吟味された各人の研究について、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね、さらに学会発表や投稿論文に対する助言と指導、修士論文に対する直接的な指導を行っていく。

安全人間工学研究指導

石田 敏郎

安全人間工学は、人間を取りまく機械や環境および他の人間との関わりを如何にしたら安全を保てるかを考える科学である。現在システムの巨大化や複雑化に伴い、人間が意図しない事故や不具合が発生している。人間の行動的側面を検討することで、事故を未然に防止するための方策を中心に研究している。そのため、ヒューマンエラーの認知心理学的検討、事故分析の方法論、人間工学的対策の策定手法等の研究指導を行う。主な研究テーマは、人間の情報処理・応答特性、視知覚特性の計測と評価、ストレス下での作業特性、ヒューマンエラーの分析と評価等である。現実のフィールドとしては、自動車交通、航空、各種産業現場などを対象としている。

福祉工学研究指導

藤本 浩志

福祉工学演習(1)、演習(2)と併せて、具体的に修士論文研究を遂行するうえで必要な方法論を指導する。研究には、問題設定、アプローチの取捨選択、結果のまとめの3段階があるが、個々に具体例に基づいて合理的な論理展開が身に付くようトレーニングする。

システム人間科学研究指導

戸川 達男

人間は生命体であると同時に人格を持つ存在であるので、生物学を基礎とする生命体としての理解だけでは人間理解には至らない。一方、人格としての人間理解は科学的基礎がまだしっかり確立されていない。そこで、生物理解から人間理解に至る道筋をたどり、いま何がわかっているか、何がわからないかを明らかにし、これから人間科学に課されている重要課題は何かを理解した上で、その中から1つの課題を選び、自分なりの解決策を提案するように指導する。

情報処理心理学研究指導

中島 義明

主観主義パラダイムと客観主義パラダイムとの間での往復運動の中で、一つ止揚された弁証法的発展のプロセスの結果として誕生した認知心理学の視座よりさまざまな情報処理に関する問題を取り上げ、これらを実証的に研究する。例えば、処理資源、ワーキングメモリ、プライミング効果、認知地図、スキーマといったような現象に関連した問題の切り出しを行う。これらの研究を進める際には、これまでの理論モデルをより精緻化することを目指すだけでなく、現代の生活世界の中で直面する関連した諸問題の解決をも十分に志向する。本研究指導の過程を経て、修士学位論文作成へと導く。

社会的実践認知科学研究指導

宮崎 清孝

認知科学の中でも社会的な実践における認知の様相とその発達を問題とする。このような立場は認知に対する「文化歴史的アプローチ」と呼ばれている。広い意味での教授・学習、つまり文化と関わることによる認知の展開の過程が研究対象である。ここではそれに関する修士論文作成を指導する。

心理行動学研究指導

鈴木 晶夫

人間を研究する際に、大きく認知的、行動的、生理的側面に分類できよう。それぞれを単独に研究することもできるが、その相互作用も重要である。そこで、行動的側面と心理的側面との関係、身体と精神の相互作用、健康と感情の関係、言語的・非言語的情報伝達手段の構造と機能、非言語行動と感情、食行動と人間関係、生活習慣と健康などを手がかりとした研究を中心的なテーマとする。また、東洋的思想からの「からだところの知恵」「東洋的行法からの健康法」にも興味がある。心理行動学、身体心理学は既存の領域ではないので、関連する領域の広範な文献研究から、過去の関連研究、現在の動向を探り、将来への実践的研究にまとめた。さらに実験計画を踏まえた実験室的研究はもとより、調査研究、フィールド研究などの各種研究手法を駆使して新しい領域を開拓することも課題としたい。心理療法への応用のみならず、福祉・看護・医療場面への応用も考えたい。

言語情報科学研究指導

菊池 英明

情報化社会の進展に伴い音声言語メディアの役割は今後一層重要になる。言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。具体的には、言語学、心理学、認知科学、脳科学といった人間科学の基礎学問を前提としながら、コンピュータ・情報処理技術の導入や開発を通じて、音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデルを構築していく。主な研究課題は、会話メカニズムの解明、人と機械の対話インタフェース、音声による感情・態度の理解・表出モデル、知的検索エンジンなど。

知識情報科学研究指導

松居 辰則

「人間の感性情報処理と知識獲得への科学的アプローチ」というテーマに対して人工知能的手法、数理統計的手法を用いて多面的(理論的・技術的・実践的)に挑戦します。具体的には、1)人間の知識獲得プロセスの測定・評価のための量的&質的手法の開発、2)人間の感性への科学的アプローチ(ヒューマンインタフェース、音楽情報処理、映像やゲームの面白さの定量化など)、3)学習情報からのデータマイニングと具体的な学習支援システムへの実装、4)人間のもつ暗黙知(ノウハウ)の抽出・管理・共有の支援手法、5)感性を刺激するよう学習教材の開発、などが研究テーマとなります。

人間生体機能動態学研究指導

宮崎 正己

本授業では、日常における生活環境に対して人間がいかにか適な条件を獲得できるか、また人間自身が自己自身でいかにその環境に対してコントロールできるかという労働生理学的な観点から授業をおこなう。本研究指導を行うにあたり、人間生体機能動態学演習(1)及び(2)で学習した事例を中心として、周辺領域も含め、より高度の知識を習得することを目的とする。

感覚情報処理学研究指導

百瀬 桂子

さまざまな情報メディア・情報機器と人間の関わり合いを、生理的側面からとらえて解析し、得られた知見をヒューマンインタフェースの高度化や医療に活用するための研究を行う。主に、ヒトの視覚機能およびその情報

処理機構に着目し、それらを客観的にとらえるための技術として脳活動計測を利用する。研究テーマとしては、視覚情報処理機構を脳活動によりとらえるための生体信号処理方式の検討、生理指標によりヒューマンインタフェースを評価する方式の検討、感覚機能診断のための計測方法の開発などが挙げられる。

【教育コミュニケーション情報科学研究領域】

教育実践学研究指導

浅田 匡

学校教育を中心として、授業をはじめ教育実践の改善に資する実践研究を行う。教育実践における教師の役割は大きく、教師研究を中心とし、教師の実践に関する知識の獲得過程や教師間の相互作用による知識創造過程などを、具体的な授業実践に基づきながら研究を行う。そこでは、専門家としての教師の力量形成にとどまらず、人間的成長を視野に入れている。方法としては、インタビュー法、観察、ビデオによる授業分析など、いわゆる質的研究法と調査法を組み合わせる。また、教育実践学のバックグラウンドとして、自己心理学、人間性心理学、教育方法学、教育工学、システム論、組織マネジメントなどの文献講読をあわせて行う。キーワードは、リフレクション、メンタリング、アクション・リサーチ、実践知、である。

情報意味論研究指導

岩坪 秀一

アンケート調査等によって被験者から調査目的にそった正確な情報を取得しようとするとき、その調査結果は質問文の明確さの度合、質問項目の順序、分量等調査票の質に依存する。

情報コミュニケーション科学研究指導

金子 孝夫

音声、画像、データなどのマルチメディアによる情報コミュニケーション科学の研究の基礎手法について、実験と研究動向の調査などの研究指導を行う。具体的には、デジタル情報処理、デジタルデータ伝送、コンピュータによるデータ入出力、ヒューマンインタフェースなどの情報コミュニケーション科学研究のための入門技術を調査研究の対象とする。

ネットワーク情報システム学研究指導

金 群

情報システムはますます多様化、大規模化、ネットワーク化の様相を呈している。実用に耐えるネットワーク化した情報システムの構築を実現するため、従来のソフトウェア工学的アプローチに加え、システム利用者である人間のふるまいを考慮した広い視野に立って、設計・開発・応用・評価法およびそれらの支援環境の構築法に関する研究を行う。

また、ネットワーク情報システムで生じる諸問題と社会への影響や人間中心のネットワーク情報システムの未来像についても研究する。

それによって、専門分野と関連分野への理解とそれらを柔軟に応用でき、さらに、新しい技術の動向にすばやく対応できるような、見識の豊かな研究者・技術者を育成する。

インストラクショナルデザイン論研究指導

向後 千春

インストラクショナルデザインにおける各自の研究テーマを設定し、研究計画の立案、研究の実施、研究論文の執筆、学会での発表、学会誌への投稿までを指導します。

情報コミュニケーション技術論研究指導

スコット ダグラス

Individualized research related to information and communication technologies. Contact the instructor for more information.

教育情報工学研究指導

永岡 慶三

教育工学のなかでも特に情報を扱う分野あるいは情報の観点から見た領域についての研究指導を行う。外国語を含む文献の探し方、読み方、引用のし方、解釈のし方、またデータの収集、整理、分析、吟味、論理展開の各方法を基本として学習し、課題の設定、発見、分析、仮説設定とその実証方法としての実験または観察についての計画、実施、整理にもとづき、論文形式で研究成果をまとめるまでをOJT形式で指導する。

インターネット科学研究指導

西村 昭治

2006年現在、4.4億台のコンピュータが接続され6.5億人のユーザがいるというインターネットの世界は様々な意味で新しい研究対象となっている。私の意図する「インターネット科学」は100億ページにも及ぶ World Wide Web、P2Pネットワーク、ソーシャルネットワーキング(SNS)などを対象にその技術的な成り立ちを解析し、社会的な影響を数理的に評価するものである。本研究指導ではインターネット科学演習(1)(2)での学習をふまえ、インターネットという研究対象を数理的に分析するとともに、創造性のあるソフトウェアの開発を目指す。

教育開発論研究指導

野嶋 栄一郎

教育環境と学習の様々なレベルの交互作用を明らかにする。これらの研究を行っていく上で、最も重要視する方法論は、開発研究及び実践研究であるが、このような研究には必ず、実験研究や調査研究にもとづく裏付けが必要となり、両面からの方法論が展開される。各人固有の問題意識を尊重し、理論的、方法論的検討に院生全員の討議を重ね、常にパイオニア的研究に焦点を当てる。インターネットを利用したインターカルチャルコミュニケーションカリキュラムの開発、CSCW に関与するヒューマンファクターの研究、教育実践研究に対応した教育測定法の開発等、具体的研究事例をベースに研究領域の拡大を図る。

教育コミュニケーション学研究指導

保崎 則雄

教材開発、授業研究が大きな2つのテーマです。教材開発については、教科カリキュラムから抜け落ちていて、重要なものを扱うようにします。授業研究は、教授学習過程の観察、録画、記述、分析を扱います。具体的には、受講生の研究課題を中心に関連分野の論文、書籍の輪読、ディスカッションを行ないます。最終的には、修士論文作成に向けた準備を行ないます。毎回、何か細かな課題に基づいたものを発表してもらいます。必要に応じて、オンラインでの指導も行なう予定です。

【演習】

【地域・地球環境科学研究領域】

環境管理計画学演習(1)

天野 正博

数学モデル、計量地理学など地球環境問題の分析に必要な基礎的手法を習得するとともに、それらを用いて特定の地域を対象にランドスケープレベルでの環境計画を策定する。また、環境問題の解決に向け国際的に合意された文書等を取り上げ、合意内容やその背景について調べる。

環境管理計画学演習(2)

天野 正博

我が国の温暖化ガスの排出及び吸収量を主要な排出源、吸収源について統計データから算出するとともに、地球温暖化を防ぐため、温暖化ガスの排出削減、森林による大気中の炭素固定など様々な対策技術を組

み合わせて、京都議定書の枠組みの中で排出削減目標の達成方法を提示する。

人口学演習（1）

阿藤 誠

社会現象のうち特に人口変動に関連した分野、すなわち出生力、家族計画、結婚、離婚、死亡、国内・国際人口移動、人口転換、少子化、高齢化、家族政策などについて国際比較的視野からの研究を行う。文献講読と人口統計データ或いは人口関連の調査データの分析を通じて各自の論文作成能力の向上を目指す。

主な研究課題は、1) 日本を含む先進諸国の未婚化・少子化の諸問題、2) 日本を含む先進諸国の家族政策、3) 途上国の人口転換と家族計画プログラム、4) 都市化と人口移動、5) 高齢化と家族変動、6) 国際人口移動、7) 人口・開発・環境問題

人口学演習（2）

阿藤 誠

社会現象のうち特に人口変動に関連した分野、すなわち出生力、家族計画、結婚、離婚、死亡、国内・国際人口移動、人口転換、少子化、高齢化、家族政策などについて国際比較的視野からの研究を行う。文献講読と人口統計データ或いは人口関連の調査データの分析を通じて各自の論文作成能力の向上を目指す。

主な研究課題は、1) 日本を含む先進諸国の未婚化・少子化の諸問題、2) 日本を含む先進諸国の家族政策、3) 途上国の人口転換と家族計画プログラム、4) 都市化と人口移動、5) 高齢化と家族変動、6) 国際人口移動、7) 人口・開発・環境問題

生物圏生態学演習（1）

太田 俊二

地球環境システムの重要な構成要員である生物圏（人間圏を含む）に関わるさまざまな研究をとりあげ、気候学、生態学などの領域の最新の研究動向について理解していく。また、気候データ、地理情報、エネルギー利用などに関する膨大なデータの収集と整備を各自の修士研究にあわせて進めていく。

生物圏生態学演習（2）

太田 俊二

修士研究課題と関連する過去から現在までの原著論文、総説を多数収集して、各自の修士研究の位置づけを整理、再考する。同時に、収集した原著論文のデジタルなデータベース化をはかる。

環境生態学演習（1）

森川 靖

人間を含めた生態系をとりまく自然環境及び人間活動による環境変化と生態系の関係について、生態系科学の視点から解析された原著、総説、論文などを分担講読し、相互討論を通じて、環境管理、環境アセスメントの意義及び今後の研究展開を把握する。

環境生態学演習（2）

森川 靖

演習(1)における研究思想の理解、方法論の把握から具体的に研究を進めるにあたっての問題のありかと解決方法を検討する。そのため、修士研究課題と関連した最新の研究論文を検証し、総合科学としての環境生態学を担う若手研究者の育成を目指す。

環境社会学演習（1）

鳥越 皓之

環境社会学に関する理論研究と環境問題についての社会学的分析について講義をするとともに、討議の機会を設ける。学部レベルの環境社会学について、十分な理解があることを受講条件とする。また、この科目の性格上、教室に止まることなく、現地に出向き、調査をすることを授業の一環とするので、フィールドに出向ける

時間的用意が必要である。

環境社会学演習（２）

鳥越 皓之

環境社会学に関する専門的応用的な課題を対象とし、受講者の環境社会学分野の修士論文作成のための基本的な分析方法についての一助ともする。登録資格は原則として2年生であるが、1年生でも希望により特別に許可することがある。便宜的に授業曜日を設定しているが、環境社会学の科目の性格上、環境問題の現場近くで集中的に作業を行うことが多い。今年はとくに霞ヶ浦の環境問題を取りあげたい。

社会人類学演習（１）

矢野 敬生

地域研究としてのフィールドワークの手法を学ぶことを目的とする。そのために、①地域研究やフィールドワークの方法論の検討、②個別地域の民族誌の検討、③現代社会人類学の理論的動向と民族誌との関係について、文献の講読を行いつつ、受講者1人1人が自らフィールドワークを実践し、自前の理論を組み立てられる能力の養成をめざす。なお、今年度は、①については、近年数多く刊行されているフィールドワークに関する諸著書を、②については、C.Geertz の諸著作を素材とする予定である。実際のフィールドワークを希望するのは、私たちがこれまでフィールドワークを実施し、かつ継続中である東南アジア（フィリピン・ジャワ）、韓国、および日本の沿岸漁村等の調査への参加も可能である。

社会人類学演習（２）

矢野 敬生

履修学生の問題関心やフィールドに即して、院生諸君の研究発表および討論を中心に構成する。さらに、関連領域に関するモノグラフ研究および現代文化人類学の理論的研究について文献研究をあわせて行う。

【人間行動・環境科学研究領域】

学習動機づけ論演習（１）

青柳 肇

旧来の動機づけ心理学では、学習活動に関係する要因を一つ一つ取り上げて、その操作によって動機づけの変動を見るというのが中心であった。しかし、近年では、教育の文脈を考慮した動機づけ研究の重要性が叫ばれ始めた(Wentzel, 1996)。本演習では、従来の研究法を概観したあと、学習動機づけのうち特に社会的文脈に関した国内外の文献を講読し、その内容に基づいて教員と院生がディスカッションを行う。例年、学習の変容や発達に関した外国文献の講読が中心である。

学習動機づけ論演習（２）

青柳 肇

学習動機づけ演習(1)を基礎にして、外国の学術雑誌に掲載された最新の論文を院生各人の研究と関連させて講読し発表させる。それに基づいてディスカッションを行う。

発達行動学演習（１）

根ヶ山 光一

行動発達に関する諸問題について、基本的文献を講読し、あわせて関連の問題を討論し、それによって人間存在への理解を深める。とくに身体と行動発達の関連性にかかわる諸問題、たとえば哺乳・離乳、身体接触、食、姿勢と位置移動、事故、モノの介在、性、排泄と世話、遊び、攻撃などについて、霊長類行動や進化などにも言及しながら議論を重ね、そのことを通じて行動発達研究の理論と方法論に関する理解を促進する。

発達行動学演習（２）

根ヶ山 光一

行動発達に関する諸問題について、各自関心のあるテーマを文献あるいはデータに基づいてまとめ、それを個人発表するとともに、その問題について全員で討論する。発表に際しては、テーマの選定、基本的文献の選択、データの分析・読み取り・考察、議論の展開の論理整合性、今後の展開、他の研究との関連性と独自性、などについてとくに考慮する。また議論においては、身体と行動発達との関連を絶えず意識する。

環境心理学演習（１）

佐古 順彦

環境心理学の教科書、論文集、またハンドブックなどから主要な研究分野について学習し、理論と方法論を学習する。研究課題を特定して、実験や調査の計画を立ててデータを収集し、処理し、論文作成に進む。

環境心理学演習（２）

佐古 順彦

受講者の研究内容（計画、実施、データ処理、結果と考察）について議論し、学会発表の論文を作成する。

建築計画学演習（１）

佐野 友紀

建築、都市計画を主眼として、諸問題を解決するための実践的な調査、実験、分析手法を学ぶ。これらには、人間工学的分析、心理学的分析、生理学的分析などを含む。また、自分の考えを図的表現によって、プレゼンテーションする能力の習得を目的とする。建築、都市のデザインは、単なる設計の技術にとどまらず、より良い計画を行うための調査、実験、分析が必要である。

特に建築計画においては、安全性、機能性、持続性、価格妥当性、審美性など、さまざまなニーズを、あるときは複合的に、またあるときは取捨選択的に解決する事が重要である。

ここでは、与えられた建築、都市計画に関わるテーマに対して、実習的に調査分析を行う。受講者の発表、ディスカッションを通して問題解決の方法を探る。

建築計画学演習（２）

佐野 友紀

建築、都市計画を主眼として、諸問題を解決するための実践的な調査、実験、分析手法を学ぶ。また、自分の考えを図的表現によって、プレゼンテーションする能力の習得を目的とする。建築、都市のデザインは、単なる設計の技術にとどまらず、より良い計画を行うための調査、実験、分析が必要である。

特に建築計画においては、安全性、機能性、持続性、価格妥当性、審美性など、さまざまなニーズを、あるときは複合的に、またあるときは取捨選択的に解決する事が重要である。

ここでは、受講者各自が設定した建築、都市計画に関わるテーマに対して、実習的に調査分析を行う。受講者の発表、ディスカッションを通して問題解決の方法を探る。

[文化・社会環境科学研究領域]

産業職業社会学演習（１）

河西 宏祐

産業・職業の領域について、社会学的に研究する。具体的には以下のような領域について、重要な文献を取り上げ講読する。また実態調査を行い、実証研究を通して社会学的分析を行う。①日本の経営の思想と現状についての産業・経営社会学的研究。②職業・仕事、サラリーマン、働く女性などについての職業社会学的研究。③日本の労使関係、労働者、労働組合などについての労働社会学的研究。

産業職業社会学演習（2）

河西 宏祐

基本的には演習(1)と同様の研究領域について、より焦点を絞って研究を深める。具体的には各自が研究課題を設定し、重要文献資料の研究を行うとともに、現状の諸問題についての実態調査を行い、収集した調査資料に基づいて社会学的な分析を加える。

文化生態学演習（1）

蔵持 不三也

今年度における本演習の目的は、受講生の研究テーマについて、その方法論や展開、問題点などを、文化人類学や歴史学、社会学、言語学、画像学など多岐にわたる角度から再検討し、硬質な論文が作成できるよう指導するところにある。なお、2007年夏には、院ゼミ生主体の共同論集が言叢社から刊行・市販されることになっている。この種の論集はほとんど例がなく、各方面から注目を浴びるものと思う。いずれも第2弾も刊行する予定なので、受講生にはぜひそのことを念頭において研鑽をつんで欲しい。

文化生態学演習（2）

蔵持 不三也

今年度における本演習の目的は、受講生の研究テーマについて、その方法論や展開、問題点などを、文化人類学や歴史学、社会学、言語学、画像学など多岐にわたる角度から再検討し、硬質な論文が作成できるよう指導するところにある。なお、2007年夏には、院ゼミ生主体の共同論集が言叢社から刊行・市販されることになっている。この種の論集はほとんど例がなく、各方面から注目を浴びるものと思う。いずれも第2弾も刊行する予定なので、受講生にはぜひそのことを念頭において研鑽をつんで欲しい。

アジア社会論演習（1）

店田 廣文

中東・北アフリカや東南アジアの発展途上国社会に関する人口、都市、文化、環境、エイジング、家族、地域集団などをテーマとする文献講読および検討をおこなう。その際、常に我が国の社会との比較考察を意図しながら実施する。受講者個々人の研究上の論点や課題の整理をしながら、それぞれの研究テーマの絞り込みと展開をはかる。また、アンケート調査法やインタビュー調査などの現地調査の手法についても、研究補助などに参加させることで自ら調査を企画し実施する能力を修得させる。諸外国を対象とした調査研究に必要な言語修得については、受講者それぞれの責任においておこなう。また、適宜、アジア地域におけるフィールドワークに参加させて、現地調査を体験させるように指導する。(1年生向けの演習である)。

アジア社会論演習（2）

店田 廣文

演習(1)をふまえて、各自の研究課題に即した文献講読と発表、討論をおこなう。受講者個々人にとっては、修士論文の作成年度にあたるため、論文作成を主たる目的において、広義の学術論文または調査報告書の作成技能も習得するように指導する。また研究発表の能力向上についても積極的に指導する。(2年生向けの演習である)。

移住論演習（1）

森本 豊富

移住に関連する様々な文献を和文、英文で読み研究動向を探る。その上で、個別の関心に特化したテーマを選び先行研究に関するレビューを作成して発表する。また、修士論文計画書を作成し報告する。

移住論演習（2）

森本 豊富

演習(1)に引き続き関連文献を輪読すると共に、修士論文計画書に基づいた調査の進捗状況を逐次報告し、論文執筆にとりかかる。

家族社会学演習（１）

池岡 義孝

質的な家族研究の方法と研究成果を、主として文献講読によって検討する。文献は家族社会学のものが中心となるが、それ以外にも広く社会調査の質的研究法の文献を含むものとする。

家族社会学演習（２）

池岡 義孝

演習(1)を基礎にして、各人の研究テーマの報告とその検討を中心に進める。基本的な文献の講読は継続するが、新たに各人の研究テーマに関連した研究論文の講読が加わることとなる。

都市社会学演習（１）

臼井 恒夫

今日の第三世界において、都市化の進展はどのような影響を及ぼしているのだろうか。本演習では、上海、バンコク、マニラ、シンガポール、メキシコ・シティなどの第三世界の都市を事例としてとりあげながら都市化の現状とその影響について考察をしていきたい。テキストとしては、D.Drakakis-Smith, *Third World Cities*, Routledge, 1997 を使用する予定である。

都市社会学演習（２）

臼井 恒夫

本演習では、都市研究に関連した受講生各自の研究テーマを中心に、研究の意図、目的、研究計画、研究内容について毎回報告を進めながら、それにもとづいた討論を行う。

科学史科学哲学演習（１）

加藤 茂生

近代の西欧および東アジアの科学史について、一次資料と二次資料のリーディングセミナーを行なう。

関連するキーワードは以下のとおり。

精神史、知の歴史、概念の歴史、文化研究、西欧近代と日本、科学と宗教、科学と帝国主義。

科学史科学哲学演習（２）

加藤 茂生

近代の西欧および東アジアの科学史について、一次資料と二次資料のリーディングセミナーを行なう。

関連するキーワードは以下のとおり。

精神史、知の歴史、概念の歴史、文化研究、西欧近代と日本、科学と宗教、科学と帝国主義。

日本物質文化論演習（１）

谷川 章雄

日本考古学、とりわけ近世考古学および関連する領域の文献講読を行う。具体的には、①都市遺跡・村落遺跡・生産遺跡などの考古学的研究、②近世考古学に関連する歴史学・民俗学・自然科学などの諸分野の研究、③外国の近代遺跡の考古学研究に関する文献をとりあげる。近世考古学の現状と課題と研究の視点や方法を学ぶことが本演習の目的である。

日本物質文化論演習（２）

谷川 章雄

考古学演習(1)を基礎として、受講者各自の研究テーマに関する文献講読、研究計画・成果の発表、およびディスカッションを行う。また、学術論文の作成を目標として、そのための資料の分析・解釈の方法について習得する。

フランス表象文化論演習（１）

中村 要

人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、

主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題: 表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

フランス表象文化論演習（２）

中村 要

人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題: 表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

ドイツ政治社会文化論演習（１）

村上 公子

ヒトラー時代に反体制運動を行った人々の事蹟を学ぶ。

様々な立場からの「抵抗」の実態を知ること、ドイツ社会の理解を深める。

ドイツ政治社会文化論演習（２）

村上 公子

ヒトラー時代に反体制運動を行った人々の事蹟を学ぶ。

様々な立場からの「抵抗」の実態を知ること、ドイツ社会の理解を深める。

技術史・技術文化論演習（１）

余語 琢磨

人間が物質的存在（道具・生産物、身体、環境資源など）に働きかけるにあたっては、そこに必ず何らかのプラン（技術）やルール（文化）が介在して、モノとヒトを関係づけていくことになる。そこで本演習では、生活空間・生業・医療などのなかに潜在する技術と文化の問題をテーマとして、関連する文化人類学・民俗学・歴史学・考古学・自然科学系の研究論文・著作を精緻かつ批判的に分担講読しながら、技術／テクノロジー・生活文化研究の意義と方法について理解することを目的とする。

技術史・技術文化論演習（２）

余語 琢磨

演習(1)での理解をもとに、修士論文への実践的な研究展開を検討する。具体的には、受講生が各自の研究テーマ・対象設定・目的・調査方法・具体的な計画・仮説・予想される結論、および関連先行研究の学史的な整理と読み込みについて発表し、受講生による相互討議のなかで着想を鍛える。同時に、フィールドワークに関する諸問題についての理論書および調査事例を講読し、机上の演繹的研究とフィールドでの帰納的研究をつなぐ方法を身につけた若手研究者の育成をめざす。

【健康・生命医科学研究領域】

生体発達科学演習（１）

木村 一郎

近年続々と得られている生物体の構造と機能の単位である細胞に関する研究知見について、最新の文献を教材にしなが、また、生理学、遺伝学、形態学、発生学、免疫学、進化学等々と関連づけながら学び、修士論文研究、さらには将来の研究活動の土台づくりをはかる。

生体発達科学演習（2）

木村 一郎

演習(1)を基礎に、より高度な内容に関するもの、最新の研究成果等について、原著論文の講読を中心にしながら各論的に扱い、さらに発展させる。これらの演習(1)と(2)を通して、生命現象を理解する上で必須であり、現在の生命科学の基礎をなす細胞生物学の研究について、その基礎理論と実験手法を多面的に学習して、人間科学の生物系の分野での研究に展開することができるようにする。

生体構造学演習（1）

小室 輝昌

生体における神経系の役割を理解するためには、その形態学的構成に関する正確な知識が必要である。神経系の解剖学的なりたち、細胞組織学的構築について学習し、神経系の構造の基本的な知識を修得することを目的とする。取り上げる対象としては、1)中枢および末梢神経系、2)神経系の発生、3)ニューロンとグリアの細胞生物学、4)シナプスの微細構造と機能、5)感覚受容器の微細構造と機能など。

生体構造学演習（2）

小室 輝昌

新着の学術雑誌の論文から、神経系の構成要素であるニューロンおよびグリアの細胞生物学に関係ある論文を選び、輪読の形式で勉強していく。この演習の目的は神経科学の分野での今日的な問題に広く接して理解を進める事にある。

生体機能学演習（1）

今泉 和彦

健康と生体機能との関連について総合的に理解するため、健康を支える運動、栄養および休養についてそれぞれ独立して講義すると共に、運動と栄養が健康にどのように関わっているかを述べる。併せて、このような運動と栄養が関連している諸問題を示し、これらの問題を明らかにするための方法論、必要な理論や考え方を演習形式と実習形式で具体的に述べる。このような内容を中心にして専門分野の素養を身に付け、必要に応じて他者の見解や理論などに適切な批判を加え、柔軟に取り入れることができる能力を涵養する。

生体機能学演習（2）

今泉 和彦

ドーピング薬物・アルコール・香辛料を摂取したときの生体応答とその機構を健康科学および生理科学的立場より理解するため、文献学的に検討すると共に、研究レベルの知識や考え方を具体的に指導・助言する。併せて、骨格筋や腱の可塑性とその機構に関する研究についても指導・助言する。また、これらの分野の方法論を駆使して研究が展開できるように、測定法や解析法などについて具体的に指導する。さらに、論文の書き方についても詳細に指導・助言する。このような研究活動を通し、当該学問分野の学際性・国際性・総合力を兼ね備えた人材の育成を目指す。

神経内分泌学演習（1）

山内 兄人

動物の本能行動は基本的に2つにわけることができる。個体の生命維持に必要な摂食行動、飲水行動や攻撃行動などと、子孫を残すために必要な性行動や母性行動といった生殖行動である。それらの行動は脳と脊髄、すなわち、中枢神経系によって制御されている。第一に脳の基本構造を理解してもらうために、ラットの脳のテキストを読むと同時に、それぞれの行動の基本文献を読み、脳の構造と機能を結び付けて学ぶ。

神経内分泌学演習（2）

山内 兄人

演習(1)を基礎とし、特に生殖行動を中心に理解をふかめる。排卵ー妊娠ー分娩などの生殖生理とあいまって生殖行動が発現する。従って、生殖腺ホルモンや下垂体ホルモンと脳との関係も知る必要がある。それらを

総合的に理解するため、基本的テキストを用いると同時に、神経内分泌領域の最新の論文を読み進めていく。
2年生から登録できます。

運動制御・バイオメカニクス演習（1）

鈴木 秀次

人間の身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。ここでは、その相互作用に影響を与える要素に焦点を絞って考察を進め、身体運動の解明を目指す。具体的には、運動の制御に関する神経筋生理学を中心に、バイオメカニクスの分野を取り入れ、さらに生命系と外部環境との相互作用で起こる運動系の適応性についても、総説と原著論文を読みながら演習を進める。

運動制御・バイオメカニクス演習（2）

鈴木 秀次

「運動制御・バイオメカニクス演習（1）」を基礎に、より高度な内容に関するもの、最近の研究成果について、原著論文の講読を中心に各論的に演習を進める。

統合生理学演習（1）

永島 計

体温、体液の調節をキーワードにアップデートな研究を解説し、また実験技術の理論の理解、習得を目標にする。また教官の研究領域に収束してしまわないよう Nature, Science などの科学雑誌から生物系の話題をピックアップし、広く科学のトピックが理解でき、ひいては自分の実験、研究に導入していける能力を身につけられるようトレーニングしていく。

統合生理学演習（2）

永島 計

体温、体液の調節をキーワードにアップデートな研究を解説し、また実験技術の理論の理解、習得を目標にする。また教官の研究領域に収束してしまわないよう Nature, Science などの科学雑誌から生物系の話題をピックアップし、広く科学のトピックが理解でき、ひいては自分の実験、研究に導入していける能力を身につけられるようトレーニングしていく。

応用免疫学演習（1）

鈴木 克彦

まず免疫学の知識を幅広く習得しながら、その応用としてライフスタイルや疾患との関連を理解する。研究テーマについては、免疫機能測定法や検査法の開発、運動・ストレス・栄養と免疫変動の解析、生活習慣病や老化、ストレスの制御に関する研究、免疫学教材の開発等があげられるが、各自でテーマを設定し研究を遂行できるよう、文献収集を行い、研究計画を立案し、研究方法を検討する。

応用免疫学演習（2）

鈴木 克彦

応用免疫学分野における各自の研究テーマに関連する先行研究(原著論文・総説)を発表し、研究の進捗状況を逐次報告し、互いに問題点を議論することを通じて、研究の充実をはかる。また、学会発表や学術論文作成を支援する。

健康医学演習（1）

河手 典彦

健康寿命の延長に拮抗する各種の関連因子の中から「疾病」を念頭に置き、それらの予防、健診、診断、治療などについて演習を進める。

癌をはじめとする生活習慣病などの重要疾患について、それらに関連する多くの文献の調査、講読を行いながら、臨床医学に基盤を置いた医学的知識の習得に努める。

実践に関する検討も行いながら、健康医学の総合的な知識をできるだけ多く習得することを目指す。

健康医学演習（2）

河手 典彦

健康医学演習(1)を基礎として、健康医学研究領域の中から各自が興味を有する課題を選択し、そのテーマに関して調査、発表、討論を行って、健康医学研究を深める。

研究の目的、構成の仕方、結果の提示、考案の論点などについて、常に論文作成を念頭に置きながら具体的な検討を加えて各自の論文作成に迫る。

応用健康科学演習（1）

竹中 晃二

主に身体活動・運動に関わる健康心理学的研究について、欧米の関連文献を数多く読み、身体活動・運動に関わる行動医学および運動心理学研究の方法論を学ぶ。以下に本演習で取り上げる内容を示す。①定期的な運動習慣がメンタル・ヘルスに及ぼす影響、②一過性の身体運動が気分、感情の変容に及ぼす効果、③身体運動とQOLおよびウェルネス、④身体活動・運動関連セルフエフィカシーと心理的 well-being、⑤心理的 well-being 強化のための運動療法、⑥運動アドヒアランス強化の行動変容技法、⑦運動アディクションの評価基準と予防、⑧身体運動、瞑想、リラクゼーションの関係

応用健康科学演習（2）

竹中 晃二

演習(1)で学んだ方法論に関する知識を基にして、主に対象および目的を絞った研究のレビューとそれらの研究の今後の方向性について発表する。家事などの日常的な活動からスポーツまでを身体活動の範囲と見なし、広範な観点から身体活動の心理学的効果、また継続を促す介入方略について研究する。

医療人類学演習（1）

辻内 琢也

医療人類学とは、医療システムの通文化的研究を通して、健康と病気の発生に影響を与える生物生態学的; bio-ecological および社会文化的; socio-cultural 要因について、現状と人間の全歴史を比較文化的に注目しようとするものと定義される。演習(1)では、この基礎となる文化人類学・社会人類学・自然人類学の素養を身につけることを目標とする。本演習は大学院修士課程1年次に履修するものとする。

医療人類学演習（2）

辻内 琢也

演習(1)を基礎とし、より実践的な研究のアプローチ法を用いて、現代における医学・医療の特徴・課題について考察してゆく。ここでは、医療の歴史的変遷という時間軸を縦軸、世界各地の文化に応じた様々な医療という空間軸を横軸とし、健康を bio-psycho-socio-ecological-spiritual なレベルで多元的・多層的に捉えることを目標とする。本演習は大学院修士課程2年次に履修するものとする。

【健康福祉科学研究領域】

障害者支援論演習（1）

山内 繁

ICF における医学モデルと社会モデルの弁証法的対立の支援機器領域への投射として、機能障害の補償から QOL への支援機器パラダイムの転換について取り上げる。この転換と ICF における弁証法的対立の関連の追及を跡づける。機器 (Technology) としては、デバイスの他、物理的環境とアクセスをもスコープに含め、使用者としての障害者との関連、社会システムにおける役割にも着目する。また、工学の目的をこのように設定したとき、工学自身に求められるディシプリンとしての変革の内容についての検討を行う。

障害者支援論演習（２）

山内 繁

演習(1)を基礎に、研究テーマに沿って、具体的な研究を遂行するための方法を検討する。特に、限定された期間内に達成すべき目標(goal)を設定し、それを順次達成することによって目的に接近する手法を具体的に検討する。

福祉産業学演習（１）

可部 明克

健康福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業を選定し、事業戦略を調査・分析する。

その上で、新たな製品を開発するための「ユーザニーズ調査・技術開発」を行い、基本的な要素技術をベースに基本設計・構築を進める。このプロセスを通じて、企業での研究開発に必要な基礎技術力を養成する。なお、主に修士課程1年目を対象とする。

福祉産業学演習（２）

可部 明克

演習(1)をベースに、健康福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業を選定し、新たな事業戦略を立案する。

それに対応した、新たな製品の立案・試作を進め、ユーザ評価も行う。このプロセスを通じて、企業での研究開発および事業化に必要な実践的な技術センスを養成する。なお、主に修士課程2年目を対象とする。

老年社会福祉学演習（１）

加瀬 裕子

Gerontological Social Work や Social Gerontology の基本的文献を講読し、高齢者の強さに依拠したストレス・モデルによるサービスや社会制度のあり方について考察する。受講生各自が、関心のある領域での先行研究の収集を行い、研究論文の評価検討をおこなうなかで、実証研究の方法を体得することをめざす。

老年社会福祉学演習（２）

加瀬 裕子

演習(1)において得られた知見をさらに進め、先行研究を検証して、修士論文の課題に関連した研究計画を策定する。

バイオエシックス演習（１）

土田 友章

バイオエシックスは、主題も多様であり、アプローチも多様である。ここでは、その原点を振り返りながら最近の課題とそれに関する研究を参照し、できるかぎり多くの視点主題や方法を批判的に考察するが、主として、履修者各人の研究課題について支援・指導する。

バイオエシックス演習（２）

土田 友章

バイオエシックスは、主題も多様であり、アプローチも多様である。ここでは、その原点を振り返りながら最近の課題とそれに関する研究を参照し、できるかぎり多くの視点主題や方法を批判的に考察するが、主として、履修者各人の研究課題について支援・指導する。

スポーツ健康マネジメント論演習（１）

吉村 正

スポーツや健康に関する組織や職場、あるいはチームやグループ等がその目的を達成するために行うべき管理や運営についての理解と実践を学習する。

特に、仕事を円滑にする、人を活かす、元気のあるチームや魅力ある職場を作り出す、組織やグループを改

善する、失敗や敗戦から学ぶこと等のマネジメントを学習する。

スポーツ健康マネジメント論演習（２）

吉村 正

演習(1)で学習した基本的な内容を深める。

演習(2)では、より多くの関連文献を講読し、現場実習を行い、各自が研究発表を行う。

社会保障政策論演習（１）

植村 尚史

社会保障政策に関する具体的テーマを選定し、研究内容の報告、質疑応答、ディスカッション等を行う。

社会保障政策論演習（２）

植村 尚史

社会保障政策に関する具体的テーマを選定し、研究内容の報告、質疑応答、ディスカッション等を行う。

予防医学演習（１）

町田 和彦

人間をとりまく広範囲の環境がヒトの疾病の予防と健康の維持・増進に及ぼす影響を調査・実験・データ解析等多面的視点から研究していくための基本的理解と実際的方法の修得を目的とする。そのためには病原因子および環境側因子としての環境科学、生気象学、微生物学、人類生態学、医療・福祉問題等、又宿主側要因としてのヒトの構造と機能と疾病、生体の防御機構(免疫学)、加齢に伴う生体の変化、健康の保持・増進、栄養学・体力医学等の各要因に対して理解を深める。

予防医学演習（２）

町田 和彦

演習(1)を基礎として、病原因子および環境側因子としての環境科学、生気象学、微生物学、人類生態学、医療・福祉問題等、又宿主側要因としてのヒトの構造と機能と疾病、生体の防御機構(免疫学)、加齢に伴う生体の変化、健康の保持・増進、栄養学・体力医学等の各要因に対して学習していくことを目的とし、これら要因に関する講義とそれに対するディスカッションを中心に行なっていく。

福祉教育論演習（１）

前橋 明

本演習では、「福祉教育」に関する研究を進めていくための知識と技能、実践力をつけることを目的とする。とくに、「子どもたちの健全育成」や「いきいきとした、みんなの暮らしづくり」に主眼を置いて進めていく。具体的には、文献・資料講読、調査・実践(フィールドワークへの参加)、発表、討論などを行って、誰もがいきいきと健康的に生きていくための知見を、本講の講義と課題遂行をとおして整理していく。

福祉教育論演習（２）

前橋 明

本演習では、「福祉教育」に関する研究を進めていくための知識と技能、実践力をつけることを目的とし、どれもが穏やかに、自分らしく、いきいきと生きられるための知見を、調査・測定やフィールドワークを通して見だして、世の中に役立てていくように取り組む。調査・測定では、日常生活の身近なところで抱いた「ささやかな疑問」を大切に、その疑問を解決すべく、取り組む。そして、収集した結果(情報)をもとにして、自分の言いたいことを論理的に展開し、レポート作成に取り組む。

緩和医療学演習（１）

小野 充一

個人の“死”とその過程で生ずるつらさを具体的に和らげていくための知識や技術として、疼痛緩和、身体的症状緩和、精神的苦痛への対処、社会的苦痛の緩和、家族へのケアといった領域を学習し、どうにこれらの

分野における研究手法として、質的および量的研究の概要を理解することを目的とする。

緩和医療学演習（２）

小野 充一

演習(1)を基盤として、受講者の研究テーマを中心に、研究目的、研究計画、結果の分析などについて、関連する先行研究との比較を行いながら、討議を行う。

障害児福祉論演習（１）

川名 はつ子

当事者のニーズに沿った援助のあり方を現場での取材にもとづき組み立てていくことを目的とし、基礎知識と調査手法に関する文献を輪読する。また「障害者自立支援法」「発達障害者支援法」「特別支援教育」などの新しい法・制度について、利用者主体の援助をめざす立場から批判的検討を行う。併行して、各自がこの目的に沿った研究テーマを探り当てるために①障害をもつ子どもとその家族、あるいは障害をもつ子どもを家庭に引き取って育てている里親などと接触する ②子ども期からの援助が将来の自立と社会参加につながるように成人期知的障害者施設の巡回測定調査にも同行するなどして現場経験を積む。

障害児福祉論演習（２）

川名 はつ子

演習(1)を経て各自が研究テーマを絞り込んで立案した研究計画に基づき、先行研究を収集し、必要な技術を修得する。外部の研究会・研修会への参加も奨励する。定期的に発表会を開いてこれら研究法についての情報を全員が共有するとともに、逐次討論し、より適切な研究法について具体的に助言し合いながら修士論文の作成につなげていく。

【臨床心理学研究領域】

心身医学演習（１）

野村 忍

心身医学に関する最近の研究をとりあげ、ストレスと心身相関、ストレス評価、薬物療法、心理療法、疫学研究など幅広い領域について学習する。また、症例研究をとりあげ、その診断・治療法について考察する。これらを通して、心身医学的研究計画・治療法を理解することを目的とする。

心身医学演習（２）

野村 忍

演習(1)を基礎に、各受講者の研究テーマを中心に、研究目的、研究計画、結果の解釈について発表し、ディスカッションする。また、関連する先行研究の文献を講読する。

認知行動カウンセリング学演習（１）

根建 金男

認知行動カウンセリング学について理解を深めるために、論理情動行動療法、認知療法、ストレス免疫訓練などの、代表的な認知行動カウンセリングのアプローチについて学ぶ。また、認知行動理論や構成主義的認知行動カウンセリングの新しい知見を学ぶ。さらに、認知行動カウンセリングの源流となった後期ストア派の哲学や一般意味論などについても学習したい。これらのねらいを実現するために、文献を講読し、議論する。なお、1年生は演習(1)のみ登録すること。演習(2)を同時に登録することは認めない。

認知行動カウンセリング学演習（２）

根建 金男

受講者が、各自の研究テーマについての研究計画・進捗状況、関連の研究動向などを発表し、教員を含めて全員で議論する。なお、この講義の登録が認められるのは2年生のみである。

学校カウンセリング学演習（1）

菅野 純

学校期(幼児期～青年期)の子ども達がかかえる教育心理臨床的諸テーマ(例えば、不登校、家庭内暴力など)を対象に、実践的研究の方法を模索しながら、各自のテーマを研究することを目的とする。

学校カウンセリング学演習（2）

菅野 純

演習(1)で取りあげたテーマを更に深めるとともに、学校期の諸テーマのみではなく、社会文化的背景、発達との関連、家族問題、諸外国との比較など、幅広く研究することを目的とする。

心理臨床学演習（1）

山崎 久美子

心理臨床の場では高度な専門的知識と技能とに裏打ちされた臨床心理査定や臨床心理面接・援助を行う必要があり、そのためには時代の価値観や社会病理の理解から、科学的な臨床研究の手法に精通することまでが求められている。本演習では、この目的のために幅広い基礎的なテーマを扱う。

心理臨床学演習（2）

山崎 久美子

心理臨床の場では高度な専門的知識と技能とに裏打ちされた臨床心理査定や臨床心理面接・援助を行う必要があり、そのためには時代の価値観や社会病理の理解から、科学的な臨床研究の手法に精通することまでが求められている。本演習では、この目的のために応用的なテーマを扱う。

行動臨床心理学演習（1）

嶋田 洋徳

行動療法、認知行動療法に関する最近の研究を取り上げ、最新の知見、理論的発展、方法論に関する理解を深める。特に、臨床場面への応用を前提とした認知と行動に関する研究に主眼を置く。また、症例研究を取り上げ、研究知見との統合的理解、アセスメントや治療技法に関する行動論的理解を試みる。

行動臨床心理学演習（2）

嶋田 洋徳

演習(1)を基礎として、そのエビデンスを重視しながら、各受講者の研究テーマについて、関連する先行研究の理解、問題の設定、研究計画の立案を行い、それを互いに検討し、討論する。主な研究課題は、さまざまな不適応行動や症状の改善、適応行動や健康行動の形成に関する行動療法、認知行動療法などに代表される認知行動的アプローチである。

[感性認知情報システム研究領域]

感性認知科学演習（1）

齋藤 美穂

感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究手法も多岐にわたるが、本演習では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当てて、特に色彩やデザインの認知およびその利用方法を中心とし、主に文化的側面を切り口とした研究を主たるテーマとして感性を検討し指導する。具体的には色彩やデザインに関する嗜好と認知およびその文化的差異、異文化における安全色彩の利用方法、Web デザインの嗜好と文化的差異、香りや色の心理的効果や肌の色の嗜好等の感性研究と文化的差異、音声と対人認知などが挙げられる。これらに関連した文献講読とディスカッションを中心に演習をすすめる。

感性認知科学演習（2）

齋藤 美穂

本演習では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当てて、特に色彩やデザインの認知およびその利用方法

を中心とし、主に文化的側面を切り口とした研究を主たるテーマとして感性を検討し指導するが、各人が1) 色彩やデザインに関する嗜好と認知およびその文化的差異、2) 異文化における安全色彩の利用方法、3) Webデザインの嗜好と文化的差異、4) 香りや色の心理的効果や肌の色の嗜好等の感性研究と文化的差異、5) 音声と対人認知などのテーマに基づき設定した各人の研究テーマに関する研究計画、展望、分析に関してディスカッションし、具体的事例の検討を行う。さらに学会発表や学術論文作成の指導を行い修士論文に対する助言と指導を進めて行く。

安全人間工学演習（1）

石田 敏郎

安全に関係する学問分野は、人間工学、心理学、人間信頼性工学、安全工学などがある。近年、システムの巨大化とともにエラーの内容も複雑になってきており、個々の人間のエラーのみでなく、組織的なエラーに対する対応も求められている。ヒューマンエラーの心理学および人間工学的研究に関する文献を中心に、人間行動モデルの理解、ヒューマンエラーの実験的検討の方法、事故分析の実際、および事故防止対策立案の方法とその評価について学ぶ。対象となる分野は、道路交通、航空をはじめ、各産業現場である。

安全人間工学演習（2）

石田 敏郎

演習(1)を基礎とし、各分野の事故統計資料および事故・不具合報告書をもとに、統計的分析と事例分析を行い、ヒューマンエラー防止のための具体的な方策を探る。その際、人間行動からの観点および事故分析的な観点からのアプローチが必要となる。演習(2)では、これらの観点から、如何に事故防止対策を導き出すかについて、実際のデータをもとに検討する。さらに、安全に関する人間行動の理解には、観察、実験、調査といった手法が不可欠であるが、それらの手法について文献調査と過去に当研究室で実施してきた研究を基に検討を加え、修士論文を作成するための基礎的な研究知識の習得を目指す。

福祉工学演習（1）

藤本 浩志

福祉工学では、単にモノづくりのためのツールとしての工学的な知識のみならず、支援する対象であるヒトの諸機能に関する知見も不可欠である、実験や関連資料、現場での体験等を通じて、福祉工学の各論を構成する以下の事柄に取り組む。①移動支援機器、コミュニケーション支援機器、介助支援機器等、狭義の福祉機器である機能代行機器の現状とその問題点および研究開発動向の把握。②健常者のみならず障害者や高齢者の身体の諸機能(運動機能特性や感覚知覚機能特性等)の定量的な評価手法の検討。

福祉工学演習（2）

藤本 浩志

福祉工学演習(1)を踏まえて、ヒトの機能を補完して環境との円滑なインタラクションの実現を目指した適切なインターフェースに関する具体的な課題に取り組む。その際には、身体諸機能の機序の解明を目指した基礎研究と、同時にそれらの知見に基づいて実用化を目指した応用研究の両方の視点からのアプローチを想定している。また特に応用研究については、広義の福祉機器として、ユーザを障害者や高齢者に限定せずに全ての人々にとって有用となるようなユニバーサルデザインのモノづくりのコンセプトも重視したい。

システム人間科学演習（1）

戸川 達男

人間理解のための科学的アプローチとして、生体を生命体として客観的に見る立場からの取り組み方を学ぶ。人間を生命体とみなす立場は、遺伝、進化、個体発生など生物学の基礎の上に成り立っている。論文や成書の読解を通して、人間理解のためにとくに重要と思われるテーマとして、生命の発生、系統発生、高等動物の出現、ヒトの出現に至る道筋をたどり、ヒトと他の動物との共通点、相違点について考える。

システム人間科学演習（2）

戸川 達男

人間をひとつの生物種とみなす生物学的理解を前提とし、人格を持つ存在としての人間理解への取り組み方を学び、いま何が問われているかを考える。このようなアプローチにはいまだに統一的な見解がなく、文献等の検索も難しい。そこで、従来の専門にとらわれず、広く情報収集ができるように、さまざまな情報を活用する訓練を行う。ことに、インターネットによる文献検索や各種サイトの活用、英語圏の情報を利用する方法などを身につけ、人間理解の現状を具体的にとらえられるように指導する。

情報処理心理学演習（1）

中島 義明

参加者各人の研究テーマに即した、情報処理に関連する「理論的問題」を取り上げ、これらの諸問題につき、専門誌等の知見を参考にしつつ、全員で討論する。これらの過程の中で、研究遂行上必要な理論的背景、方法論等の「基礎的知識」の習得を目指す。

情報処理心理学演習（2）

中島 義明

参加者各人の研究テーマに即した、情報処理に関連する「実際的問題」を取り上げ、これらの諸問題につき、専門誌等の知見を参考にしつつ、全員で討論する。これらの過程の中で、現実生活場面と密着した研究の遂行上必要なこれまでの知見や方法論等の「応用的知識」の習得を目指す。

社会的実践認知科学演習（1）

宮崎 清孝

認知に対する文化歴史的アプローチといわれる考え方を対象とする。認知が個人だけではなく、それを取り巻く文化との相互作用の中で発展して生きているとする考え方である。ここではその研究誌、研究の方法などについて、基本的な論文を講読していく。

社会的実践認知科学演習（2）

宮崎 清孝

演習(1)を基礎として、特に教授学習過程、またそれ以外でも各受講者の問題関心のある領域を題材として、より具体的な研究の動向を最新の論文を講読することにより検討する。

心理行動学演習（1）

鈴木 晶夫

実験計画は、調査・実験的研究の基本であると考えられるので、整理しておきたい。

さらにこの演習では、ノンバーバル行動、コミュニケーション、感情、健康、からだ、行動をキーワードとして、身体と精神の相互作用を中心に考えたい。これらに関連する先行研究の文献を取り上げ講読する。人間科学という視点から心理行動学を幅広く追究したい。

心理行動学演習（2）

鈴木 晶夫

各受講者の研究テーマを中心に、その研究の背景、問題、研究目的、研究計画、結果等について個人発表してもらい、討論する。

言語情報科学演習（1）

菊池 英明

音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデル構築およびその応用を目的として、音声言語メディアの特性について調査・分析を行う。具体的には、音声対話インタフェース、感情・態度の理解表出モデル、知的検索エンジンなどへの応用を想定して、音声言語メディアの特性について関連分野の知見を文献により調査したり、音声言語データを収集・解析して、その特性を明らかにする。定期的に進捗状況報告、輪講、発表などを行なう。

言語情報科学演習（2）

菊池 英明

音声言語メディアの特性を踏まえ、コンピュータ・情報処理技術の導入や開発を通じて、音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデルを構築し、音声対話インタフェース、感情理解ロボット、知的検索エンジンなどの実現を試みる。ソフトウェア・システム開発やデータベース構築などの一連の技術サイクルを通して、進捗状況報告、成果発表、デモンストレーション発表などを行なう。

知識情報科学演習（1）

松居 辰則

人工知能に関する基本的な理論・技術を学習した上で、システム構築を行う。ここでは、記号論理による知識表現、推論、学習、そして、ニューラルネットワーク、遺伝的アルゴリズムなどの実装が対象となる。また、確率的な手法を用いてデータマイニング、Webマイニング、テキストマイニングなどの知識発見も対象とする。演習（1）では各人がシステム開発の目的と対象領域の設定、最適な理論・技術の選択とカスタマイズ（改良）、実装までを行う。

知識情報科学演習（2）

松居 辰則

人間の「感性」に科学的・工学的にアプローチする。特に、人間とコンピュータ、人間と人間、さらにはコンピュータを介した人間同士のインタラクションにおける「感性」の扱いを考究する。音楽情報処理、コンピュータによる感情の扱い、ゲームの面白さの定量化、人間の曖昧さの扱いなどがテーマとなる。また、人間の知識獲得過程における新しい測定・評価手法の開発なども想定される。ここでは、人工知能、認知科学、数理統計、評価・測定に関する理論・技術が基盤となる。

人間生体機能動態学演習（1）

宮崎 正己

本授業では、人間と人間が生活する環境の関わりに関して、労働生理学的な観点から、人間の諸機能に関して取り上げた文献等を選び、分担講読をおこなう。基本的な領域とその周辺領域を包括して、研究指針をたてる。

人間生体機能動態学演習（2）

宮崎 正己

本授業では、演習（1）を基礎として、さらに研究を展開するために、先行研究の論文を講読し、論議をおこなう。

感覚情報処理学演習（1）

百瀬 桂子

感覚系を脳活動により評価する方法の1つとして、脳波などの生体信号を評価するための技術を、文献輪読を通して学ぶ。生体信号特有の不規則性・非線形性を評価するために、まず不規則信号の統計学的取り扱いを学び、さらに特定の感覚応答信号を対象としてとりあげ、その信号処理技術を理解する。

感覚情報処理学演習（2）

百瀬 桂子

感覚系の情報処理過程に関して、コンピュータ技術を活用した評価法とその評価情報の応用・活用について、最近の研究論文輪読と討議を通して、具体的な評価対象や方法論に関する研究を学ぶ。これによって、情報通信技術の生体情報の測定への応用の現状と新たな可能性を論考する。

【教育コミュニケーション情報科学研究領域】

教育実践学演習（１）

浅田 匡

教育実践を対象とした研究に関して、授業研究を中心に扱う。システムズ・アプローチ、現象学的アプローチ、教育技術的アプローチなど、授業研究のさまざまなアプローチを国内外の文献研究により概観し、研究者としての教師が自らの授業実践を研究・改善していくアクション・リサーチおよびそれを共同で行うメンタリング・リサーチについて、研究方法に焦点をあてた文献講読を中心とした論及を行う。文献は、Coaching & Mentoring First-year and Student Teachers を用いる。

教育実践学演習（２）

浅田 匡

教育実践学が研究対象とする、教師の知識研究、教師の信念研究、教師の思考様式、など教師の思考過程に関する研究を概観し、これからの教師及び授業研究の研究課題を探究する。また、IT技術の発展による授業の変化は、教師の役割を含め、授業モデルの新たな構築が求められているため、これからの授業、あるいは学校学習モデルの構築を、今までの授業モデル、学校学習モデルをレビューし、考察する。基本文献は、Model of Teaching 6th ed.を用いる

情報意味論演習（１）

岩坪 秀一

アンケート調査の集計結果及び入学試験成績データについて本来の評価目的を達成できなかった例をいくつか取り上げ、その欠点がどこにあったか探るための統計的方法を示し、改善の指針を与える。

情報意味論演習（２）

岩坪 秀一

情報意味論（１）に基づいて、実際にアンケート調査を計画、実施し、その統計的分析結果から調査票の評価を行う。

情報コミュニケーション科学演習（１）

金子 孝夫

コンピュータメディアとしてのテキスト・音声・画像・アニメーションなどのマルチメディア情報を活用して、コミュニケーションネットワークを介して教育コンテンツを発信・受信することで、高等教育での講義・演習・実習・試験などを支援することができる。そこで、受講者の理解度の向上や授業の効率化などを評価尺度として、教育の方法とその効果について実験・調査検討を行う。

情報コミュニケーション科学演習（２）

金子 孝夫

コンピュータメディアとしてのテキスト・音声・画像・アニメーションなどのマルチメディア情報を活用して、コミュニケーションネットワークを介して教育コンテンツを発信・受信することで、高等教育での講義・演習・実習・試験などを支援することができる。そこで、受講者の理解度の向上や授業の効率化などを評価尺度として、教育の方法とその効果について実験・調査検討を行う。

ネットワーク情報システム学演習（１）

金 群

情報処理の基礎理論および高度な応用技術について学ぶ。

人間中心のネットワーク情報システムをテーマに、1. ネットワーク情報システムの基盤をなすデータベースの応用技術 2. 利用者の振る舞いに適応するユーザ・インターフェース 3. 人間の知性と感性を学んだ知能情報メディア 4. サービス指向の協調共有型検索エンジン 5. 高度な情報通信技術によるeラーニング支援

環境の構築などを、受講生の関心と興味に応じて一部選択し、取り上げる。

そして、これらのネットワーク情報システムに関する新たなモデル手法とフレームワーク、構築法などを紹介しながら、具体例を通して、研究遂行上必要な基礎知識と関連する基盤技術および問題発見・解決力を習得させる。

ネットワーク情報システム学演習（２）

金 群

分散コンピューティングおよび最新のネットワーク技術について学ぶ。

コンピュータと人間が協調できるネットワーク情報システムをテーマに、1. 情報を分散して蓄積、管理、利用するための分散データベース技術 2. 高度な自律分散協調を実現するピア・ツー・ピア技術とそれを利用した知識情報共有・活用支援 3. ライフタイムにわたるユビキタス情報マネジメント 4. 情報弱者を含む多様な利用者を対象とした Web サービス・ユニバーサルサービス 5. 時間・空間を越えたコラボレーションを円滑にするグループウェア技術とそれを利用した協調作業支援などを、受講生の関心と興味に応じて一部選択し、取り上げる。

そして、これらのネットワーク情報システムに関する最新の技術動向と展望を紹介しながら、具体的な実現を通して、研究遂行上必要な要素技術と研究方法論を習得させる。

インストラクショナルデザイン論演習（１）

向後 千春

インストラクショナルデザインの領域において有意義な研究をするための基礎を身につけます。前期には、この領域における自分のテーマを設定し、先行研究のサーベイ、研究計画の立案をします。後期には、研究計画に基づいて、研究を実施し、研究レポートを作成します。「インストラクショナルデザイン論演習(2)」との同時受講はできません。

インストラクショナルデザイン論演習（２）

向後 千春

インストラクショナルデザイン論演習(1)に引き続き、各自のテーマにあわせて修士論文レベルの研究を指導します。「インストラクショナルデザイン論演習(1)」の履修を条件とします。

情報コミュニケーション技術論演習（１）

スコット ダグラス

The theme of this seminar is information and communication technologies (ICT) and the emphasis is on using these tools for intercultural communication. This course is designed to help students pursue their interest in ICT-related topics with the goal of conducting research in their area of choice.

All communications will be in English, including class discussions and assignments. Students electing this course should have a TOEIC score of 600 or higher to more fully participate. Interested students should contact the instructor prior to enrolling.

情報コミュニケーション技術論演習（２）

スコット ダグラス

The theme of this seminar is information and communication technologies (ICT) and the emphasis is on using these tools for intercultural communication. This course is designed to help students pursue their interest in ICT-related topics with the goal of conducting research in their area of choice.

All communications will be in English, including class discussions and assignments. Students electing this course should have a TOEIC score of 600 or higher to more fully participate. Interested students should contact the instructor prior to enrolling.

教育情報工学演習（1）

永岡 慶三

コンピュータその他のテクノロジー利用による教育の方法について、その基本原理や具体的システム開発の手法について、演習する。受講者数によるがPBL(プロジェクト指向学習)の形態で行う予定である。

1年生が登録して下さい。

教育情報工学演習（2）

永岡 慶三

教育の場を中心として人間の活動を客観的・定量的に扱う方法を演習する。また、数理的なパズルを通し、人間の学習・思考について講究する。学校教師の立場からあるいは企業における人材活用の立場からも有効な技法である。

2年生が登録して下さい。

インターネット科学演習（1）

西村 昭治

インターネットの歴史、成り立ちとともにそれを成り立たせる技術について解説する。また具体的にTCP/IPプロトコル上の様々なインターネット上のサービスに関係するプロトコルを学習する。そしてそれらプロトコルを活用したプログラムを開発しその仕組みを深く理解して行く。

インターネット科学演習（2）

西村 昭治

演習(1)で身につけた技術を元にインターネット上の様々なデータを収集するプログラムを作成する。また、データマイニングの手法を用い収集してきたデータを分析する。そして、インターネットに関する数理的特徴を抽出し新たな分析対象とするとともに、その特徴を活用した創造性のあるプログラムを開発し評価する。

教育開発論演習（1）

野嶋 栄一郎

教えー学ぶ過程に関わるヒトと環境とそれらの接面に関するシステムについて講義及び討議を行う。通常このような分野は教育工学とよばれるが、より広く、教育に関する科学的研究を志向している。教育工学、教育心理学、教育測定学、認知心理学、教育学などの諸分野にまたがる内容となる。理論的中心課題、研究の方法論等、研究の核となる部分に関連するテーマが中心となる。特に人間科学としての教育工学の位置づけに、また人間科学とシステム理論の関連性に言及することを試みる。

教育開発論演習（2）

野嶋 栄一郎

教育開発論演習(1)は、比較的、基礎的、理論的色彩が強いが、ここでは演習(1)をベースに、データや開発課題を眼前にした、具体的な課題提供を試みる。カリキュラム開発と評価、教材開発と評価、教授＝学習過程に関わる実践的研究、コンピュータネットワークを前提とした新しい学習環境の開発研究、マルチメディアの教育効果、教育実践に関わる測定と評価等柔軟性に富んだテーマ設定を試みる。

教育コミュニケーション学演習（1）

保崎 則雄

学校での教科活動、教科外活動において、人、言語、アーティファクトがどのような役割を果たしているのか、どのように機能しているのかということの研究する。授業内言語活動、学習対象語での言語活動(英語教育など)を記述し、分析する。また、教育方法の技術について、ワークショップ型の授業構成、フィールドトリップの教育機能、体験型学習、正統的周辺参加による学習、online型学習などを学習対象教科との関連で研究する。関連分野のJournalを中心として、学習理論関連の書籍を輪読する予定である。

教育コミュニケーション学演習（２）

保崎 則雄

修士論文作成に向けての指導が中心となる。履修生の研究課題を論文として仕上げて行けるように指導を行なう。その過程で国内外における関連学会での発表を義務づける。論文作成にあたっては、APA スタイルを採用する。

【講義科目】

[地域・地球環境科学研究領域]

環境管理計画学特論

（偶数年度開講）

天野 正博

環境問題に関係するデータを用いて、重回帰、主成分分析、数量化理論等の多変量解析を用いた統計的処理方法について、実際にパソコンを利用して指導する。統計的な基礎知識、パソコンでの表計算に関する知識を有していることを前提に講義を進める。また受講者は環境問題に関連する具体的なデータを事前に準備しておくことが望ましい。

地球生態学特論

（偶数年度開講）

太田 俊二

生態学は葉一枚のなかでの生物の動きから、地球規模の植物群系や純一次生産力の分布まで、さまざまな空間スケールを理解する学問である。また、生物の分布や個体数が時間的にどのように変化してきているのかを探るため、時間スケールは数秒から数十年、ときには数万年単位に及ぶこともある。この講義では比較的大きな空間（地球規模）と長めの時間スケールで生物の生きていく姿を追いかけていこうと考えている。そのため気候学的な思考法について、また、生態学初学者向けに個体群動態などの時間変化の考え方についても講義する予定である。

環境生態学特論

（奇数年度開講）【2007年度休講】 森川 靖

光合成植物の誕生は 35 億年前である。この植物は、無限にある太陽エネルギーを、水と二酸化炭素から化学エネルギー（有機物）に変換し、この有機物から始まる複雑な生態系を地球にもたらした。人類がこの生態系の一構成員であった時代は長く、人類は生態系の変化に対応して生存する他の動物とまったく変わりはなかった。しかし、文明を手にした人類は、森林を耕地、草地に変え、また化石燃料を利用することによって、地球大気に影響を与えるようになった。生態系の構造と機能、生態系への人為影響（酸性雨、熱帯林減少問題など）、人間生存に関わる環境と食糧などについて論議する。

環境社会学特論

（偶数年度開講）

鳥越 皓之

環境社会学についての専門性の高いレベルの方法論の検討を内容とする。この分野の論文を執筆するための一助になることを目的としている。したがって、すでに学部レベルの環境社会学についての十分な知識および基本的な理論を習得していることを受講の条件とする。

民族誌学特論

（奇数年度開講）

矢野 敬生

「環境と文化」に関するモノグラフを素材にとりあげる。フィールドワークの成果としての民族誌を「書く」ことを念頭におきながら、モノグラフを「読む」ことを課題とする。文化人類学を専攻しない院生の受講も考慮して、前半は一般的な和書を取りあげ、後半は文化人類学に関する専門的な Ethnography を読む予定である（具体的

な書名については、開講時に提示する)。

人間環境変遷特論

井内 美郎

本講義では、人間環境を取り巻く自然環境変遷史の研究例を紹介する。自然環境の歴史は水域の堆積物に連続的に様々な状態で記録されている。水域堆積物から読み出された情報およびその手法について、国内・海外の例を紹介する。

地域資源特論

柏 雅之

20世紀以降、化石資源に依存してきた先進工業諸国の農業生産のあり方は、今日大きな限界に突き当たろうとしている。地球・地域環境問題と化石資源の枯渇問題である。こうしたなかで、資源保全・循環型の持続的農業・地域システムの構築が求められている。本講義では、こうした問題の背景を明らかにするとともに、ローカルレベルでの取組みのあり方について理解を深めてもらう。ここでのキーワードは、「地球環境時代にふさわしい農の再定義の必要性」、「財政支出が投資効果を発揮する地域社会経済システムの構築」である。EUの先進的な政策システムや実践事例、わが国の萌芽の事例をとおして問題解決への方向を考えられるようにしていく。

動物行動学特論

三浦 慎悟

野生動物の保全・管理の基礎となる行動生態学と個体群生態学を取り上げる。行動生態学については、各種動物群の行動と社会、繁殖システムなどを取り上げ、血縁選択、性選択、適応戦略の観点から輪読も含めて講義を行う。個体群生態学については、個体群の動態と成長、生活史戦略、人口学的確率性と絶滅リスクの評価について、講義を行なう。これを基礎に個体群動態のモデル化とシミュレーションの手法を習得し、野生動物の保全と管理への応用を試みる。

[人間行動・環境科学研究領域]

学習動機づけ特論

青柳 肇

最新の学習と動機づけ研究について講義した後、関連した文献を読み、それについて議論する。

発達行動学特論

根ヶ山 光一

親子関係の変化をめぐる諸問題について、動物行動学の知見もまじえつつ講じる。とくに現代社会における親子関係とその身体性に注目し、子別れの過程や、それを取り巻く哺乳類・霊長類としての生物学的要因、テクノロジーや価値観などの社会文化的要因と、その相互関連性を中心に検討する。

学習環境心理学特論

佐古 順彦

積極的な学習環境の構成について学習する。学校には人的資源と、物的資源があり、学習活動がある。学習活動の測定インベントリや、教授法の工夫や、学級と学校経営の方法が研究されてきた。システム論的アプローチ、生態心理学的アプローチ、建築心理学的アプローチ、動機づけ論的アプローチについて概観し、学習活動のための環境形成について学ぶ。

建築計画学特論

(奇数年度開講)

佐野 友紀

建築、都市計画のために、人間の行動観察や建築の使われ方等のフィールド調査、文献調査、実験室実験

の手法を学ぶ。また、実際の調査データをもとに、統計的分析を行い、現象を予測、評価することで、建築計画にフィードバックする手法を習得する。この際に、数理モデル、数学的・統計的分析手法を用いる。また、建築の安全性、利便性、持続可能性等についてのテーマについて、問題点の解明と解決策の提案を行った上で、論文形式のレポートとしてまとめる。

行動理論特論

木村 裕

適応を獲得するという事は、直面する問題、困難、課題、を解決することである。適応の過程を確認する方法として、一つに、行動の変容過程を確認することがあげられよう。心理学は、行動の形成の原理として“古典的条件づけ”を導入する一方で、“道具的条件づけ”の過程を見出し、困難を解決して新しい行動様式を獲得する過程を理解する可能性の幅を広げてきた。この特論では、まず、パブロフ(Pavlov, I. P.)が脳の機能の研究に用いた“古典的条件づけ”がどのようなものであったかを確認し、行動主義の唱者ワトソン(Watson, J. B.)によって心理学研究に用いられた事例などを確認するところから始めたい。“道具的条件づけ”については、ソーランドイク(Thorndike, E. L.)、ハル(Hull, C. L.)、スキナー(Skinner, B. F.)等の考え方や理論を、マッキントッシュ(Mackintosh, N. J.)、シュバルツ(Schwartz, B.)、メイザー(Mazur, J. E.)、アンダーソン(Anderson, J. R.)等によるとらえ方を参考にして確認してゆきたい。また近年の動向の一つにある生態学的、進化論的見地からの言及にも実験例等で確認できればと考えている。

発達科学特論

大藪 泰

他者との極めて豊かな共有世界をもつこと、それは人間の心がもつ特有な働きである。乳児と養育者が相補的に構築する共同注意(joint attention)関係は、生物としてのヒトの「ココロ」を文化化された人間の「心」に飛躍させるスプリング・ボードの一つであろう。共同注意の働きにより、多様な事物を養育者と能動的に共有しようとする人間の子どもは、文化既得者である養育者によって、人間が蓄積してきた文化すなわち集合的知の世界に導かれるからである。

この特論では、共同注意をキー・コンセプトにして、乳幼児の「自己感の発生」、「物との関わり」、「他者との関係性」、「シンボルの獲得」といった現象についての考察を試みてみたい。

建築環境学特論

小島 隆矢

建築学における環境心理生理研究分野では、近年、住居・建築・都市などの環境をよりよいものとするを目的として、広い意味での顧客(利用者、居住者、所有者、管理者等)の意識・行動・ニーズ・CS(顧客満足)を把握するための調査分析手法が独自の発展をみせている。本講義では、その発展状況を概観するとともに、いくつかの手法について講義と実習を行う。

[文化・社会環境科学研究領域]

産業職業社会学特論

河西 宏祐

日本の雇用問題、労使関係の変化について考察する。文献や調査報告書を素材として講読し議論する。あわせて受講生の調査研究についても指導する。

歴史人類学特論

蔵持 不三也

本講は、文化人類学と歴史学の接点で、近年その成果が世界的な評価を受けるようになってきている歴史人類学を再検討することを目的とする。具体的には蔵持自身の歴史理論のみならず蔵持もその一部を論文や翻訳

で紹介しているフランスのアナル派(新しい歴史学派)、さらにはイタリアのC・ギンズブルクなどの作業を取り上げるが、本講のもうひとつの狙いは、一連の講義を通じて、受講生が歴史に対していかなる視座を構築しようかにある。

アジア地域研究特論 (偶数年度開講) **店田 廣文**

アジア社会に関する英文文献の講読をおこなう。取り上げるテーマは、都市、都市化、人口、高齢化、少子化、環境、移民、移動などのうちから、選択する予定である。

移民研究特論 (奇数年度開講) **森本 豊富**

日本人及び日系人に関する移民研究について『日本の移民研究—動向と目録』(改訂版)をテキストとして用い、国際関係、コミュニティ、マス・メディア、芸術、ジェンダー、世代、言語、教育、国籍、デカセギ、医療・健康福祉、戦時収容、再定住などの諸側面に関する調査研究の最新動向を把握する。受講生はテキストの解題及び目録をもとに、それぞれの関心に応じて文献調査し報告することを課題とする。また、適宜、関連する英文の論文も輪読する。

家族社会学特論 (奇数年度開講) **池岡 義孝**

本講義では、日本の家族社会学の研究史を詳説する。対象とするのは、「家族社会学」という学問領域がまだ通常科学化していなかった戦前段階から現在に至るまでとし、日本の研究に影響を与えた欧米の研究も必要に応じて取り上げることにする。

都市社会学特論 (偶数年度開講) **臼井 恒夫**

近年、先進国の大都市の構造転換についてさまざまな視角から多くの研究が積み重ねられてきている。ここでは、都市社会学および都市地理学が蓄積してきた研究成果のなかから基本的かつ重要と思われる研究を取りあげながら、今日の都市の変化を読み解くための視点や論点について考察を進めていくことにする。

科学史科学哲学特論 (偶数年度開講) **加藤 茂生**

「近代とは何か」について科学史・科学哲学的視点から考察する。

私たちの精神は自由のようで実は時代の文化や社会、集合的精神によって支配されているようにも思える。今の私たちの精神を知るため、時代精神の歴史的变化を知り、心の深部をさぐりたい。そのような観点から、科学史、知の歴史という実験場で人文的・哲学的考察を行う。

以下のようなテーマのなかから、関連するテキストを選んで読む。

1. 西欧近代科学の東アジアでの受容について

19世紀以降、近代西欧の思考、特に近代科学が日本・中国など東アジアの伝統的思考にどう影響を与えたのか、また、西欧の思考はどのように変容されて受容されたのかなど。

2. 日本の近代化についての精神史

西欧の文化を吸収しつつ、近代日本の文化、ハビトゥス、意識はどのように変容したのか。たとえば、「衛生」や「精神病」という観念は社会をどう変えたかなど。

3. ヨーロッパの世界的拡大と近代科学

17世紀以降のヨーロッパにおいて自然のとらえかたはどのように変容したか。自然についてのイマジネーションと西欧の世界的拡大はどのように関連していたか、本国の文化と植民地の文化の関係など。

4. 生活世界と科学的世界

私たちは生活世界(感情的な質をもつ世界)と科学的世界の混在する世界のなかに生きている。科学的思考と日常的な感覚はどのように相互作用し、共存したり隠蔽したりしているのかなど。

考古学特論

(奇数年度開講)

谷川 章雄

近世都市江戸の考古学に関する研究論文をとり上げ、それを解説しながら、考古資料の特質と限界、考古学独自の分析方法、思考方法を明らかにし、隣接する歴史学・民俗学などの諸分野との学際的研究のあり方をみていくことにしたい。すなわち、考古学の視点から、総合的・学際的研究を行うにあたっての課題と展望を考えることがこの講義の目的である。

フランス表象文化史研究特論

(偶数年度開講)

中村 要

フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究の一環として、フランスの表象文化について歴史的展望を行なう。人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。日本文化との比較、異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題: フランスの特殊性と普遍性、表象と共同体、他者との共生、ヨーロッパの現在。

ドイツ近代国民国家特論

(奇数年度開講)

村上 公子

明治期の日本が、自国の「近代化」のモデルとしたのは、1871年に成立したばかりのドイツ帝国であった。「ドイツ」という国家はどのような成り立ちをし、そこにはどのような特徴が見られるのかを歴史的事実に即して考察する。

生活文化史研究特論

(偶数年度開講)

余語 琢磨

暮らし(生活・生業)をめぐる人々の多様な営みを、人類学と歴史学の交差する視座から複眼的に理解するために、いくつかの代表的な調査研究例および担当者自身の研究をとりあげ、その着想・対象・方法論・分析の妥当性・成果と残された問題点などについて概説する。とり上げるテーマとしては、ものづくり、食文化、地域共同体、祭礼、環境知識、民俗医療など予定しているが、新規開講科目であるため、受講生の関心のありように応じて柔軟に変更していきたい。

社会学説特論

西原 和久

グローバル化時代における現代社会学理論の諸学説を検討する。まず、現代社会学につながる社会学の古典(ヴェーバー、ジンメル、デュルケムなど)をふまえながら、60年代の知の変動(言語論、科学論、構造主義、現象学など)をおさえる。次いでポストモダンの言説と80年代の統合的な社会学理論(ハーバーマス、ギデンズなど)を検討対象にしつつ、90年代の社会学説を視野に入れた現代社会学理論の対立軸の焦点化と社会学基礎論(行為、権力、制度、国家など)の再検討を行う。基本的な視座は、現象学的社会学ないしは「意味社会学」の社会理論にあるが、広い意味ではグローバル化時代の社会学の人間学の視点といってもよいだろう。本年度は、身体・他者・国家の再検討を行うつもりである。

自然人類学特論

藤田 尚

自然人類学は、ヒトを主として生物学の立場から研究する学問領域である。われわれの身体的・社会的特徴が、どうして、いつ獲得されたのかは、実は霊長類の進化の過程の中に解答が求められる。人間科学を大学院レベルで専攻する学生諸君には、是非本講義を通じて、ヒトとは人間とは何者なのか、われわれはどのように形成され、どこへ向かって進化しようとしているのかを学んでほしい。

スペイン社会文化特論

(奇数年度開講)

竹中 宏子

スペインは、地域色が強く、多様性を特徴とする国だといわれる。本講義では、スペインの社会や文化に関する研究史を通して国家や地域社会と文化の問題を議論し、その視点からスペインの社会・文化的な内実を明らかにする。そこでは特に、フランコ独裁政権以後の時代を取り上げ、スペインにおける人類学やフォークロアの研究史を追いながら、「スペイン」という近代国民国家とその地域性について考えたい。なお、本授業は文献を輪読する演習形式で行なわれる。スペイン語で書かれた文献を扱う予定である。

[健康・生命医科学研究領域]

生体発達科学特論

(偶数年度開講)

木村 一郎

近年著しい進展を見せている生体発達科学(発生生物学)について、その基盤となっている伝統的発生学を踏まえながら、発生遺伝学を中心とした知見を紹介する。特に細胞の増殖・分化、形態形成等を扱いながら、個体発生における構造と機能の構築の基礎となる細胞の動態について考察する。また、発生生物学の応用としての発生工学、生殖医療などの生命操作技術についても紹介する。

細胞組織学特論

(偶数年度開講)

小室 輝昌

細胞組織学の基礎的事項の復習的内容と、研究トピックスの両者より構成。

生体機能学特論

(奇数年度開講)

今泉 和彦

本特論では、以下の最近のトピックスについて講義する。

- 1) 飲酒(アルコール摂取)と生体機能との関連(1)
- 2) 飲酒(アルコール摂取)と生体機能との関連(2)
- 3) 飲酒(アルコール摂取)と生体機能との関連(3)
- 4) 茶カテキン摂取による生体機能との関連(1)
- 5) 茶カテキン摂取による生体機能との関連(2)
- 6) ドーピング作動薬と生体機能との関連(1)
- 7) ドーピング作動薬と生体機能との関連(2)
- 8) 亜鉛欠乏と生体機能との関連(1)
- 9) 亜鉛欠乏と生体機能との関連(2)
- 10) 鉄欠乏と生体機能との関連
- 11) 香辛料(特にトウガラシ成分)摂取と生体機能との関連
- 12) 骨格筋の可塑性(肥大・萎縮)とその調節(1)
- 13) 骨格筋の可塑性(肥大・萎縮)とその調節(2)
- 14) 最近の研究成果の紹介

神経内分泌学特論

山内 兄人

体内には液性情報と神経情報がある。血液を介して情報を伝達するホルモンは液性情報の一つである。脳は脳神経により体内外の近く情報を受け、かつ、筋や内臓に司令情報を送る神経情報の本部である。ホルモンを分泌する内分泌器も脳による神経制御を受け、脳の神経細胞もホルモンによって影響を受ける。また、脳そのものからも、ホルモンが分泌されていることが、最近明らかにならつつある。内分泌系と神経系のお互いの関係や、神経と内分泌系によるからだの機能の制御を明らかにしていくのが神経内分泌学である。この講義

では性行動や母性行動、排卵、妊娠授乳等の生殖生理の神経内分泌制御を最新の知見を中心に学ぶ。特にセロトニン神経に焦点をあてる。

運動制御・バイオメカニクス特論（偶数年度開講）

鈴木 秀次

日常生活やスポーツ活動時に起こる動きの仕組みを運動制御とバイオメカニクスの立場から解説し、その動きの科学的根拠がどこにあるかを講義する。特にいま話題となっている初動負荷理論について、なぜこのトレーニングによって、スポーツ活動に必須の条件であるスピードとパワーがそなわり、躍動感、リズム、爆発力が身につくのか。さらにこのトレーニングによって、柔軟性が高まり、怪我の予防と健康増進につながるのかについて最近の実験データを踏まえながら解説する。

神経機能学特論（奇数年度開講）

永島 計

講義は生命の恒常性の維持を司る脳、視床下部の機能、解剖を解説していく。進行はテキストに基づき基本的な知識をまず教官が講義する。その後、学生個人がテキストを読み、理解、必用な知識を添付し、プレゼンテーションを行い、教官がコメント、補完していく。

テーマは視床下部であるが、基本的な発表の方法、脳科学の実験法、解析法の基本を学んでいくことを目的とする。

免疫学特論（偶数年度開講）

鈴木 克彦

免疫とは、体外から侵入した微生物や異物、あるいは体内に生じた異常物質や老廃物、病的細胞などを排除し、体内の恒常性（ホメオスタシス）を維持しようとする生体の防御システムをさす。多種類の細胞（食細胞、リンパ球等）や液性因子（抗体、補体、サイトカイン等）が協働作業をおこなすが、エイズにみられるような免疫不全症では感染症や腫瘍増殖をきたし、逆に過剰な免疫応答はアレルギー疾患や自己免疫疾患を引き起こす。本講義では、前半は免疫学の基礎知識と基本的概念の習得に重点を置き、後半は関連する生命現象やライフスタイルとの関連、疾患まで、さまざまな側面から免疫現象について解説する。

健康医学特論（奇数年度開講）

河手 典彦

わが国での人間生活において、人の健康の重要性に対する関心の高まりは近年とくに顕著である。

全ての人間生活の基盤である健康を保持するためにはまず、一次予防、即ち日常の生活習慣や環境因子などの検証に基づく対策を実践できるというレベルで考えることが重要と考える。

更に健康を保持するための管理面から見ると、所謂二次予防や三次予防といった、より臨床医学に密接な領域についても正確な知識を持って、万が一の際にも慌てる事なく適切な選択と行動がとれることが望ましいと考える。

以上の観点に基づいて、わが国で遭遇する頻度の高い代表的疾患を対象として、基本的な医学知識の整理、健診にも繋がる有効な診断方法の実状、標準的並びに第一線の治療のトピックスなどを紹介しながら人の健康を考えていく。

各自の健康の重要性の認識を新しい視点を加え、自身の健康医学観を形成することが本講の基本的な狙いである。

応用健康科学特論

竹中 晃二

従来、健康教育の研究では、ヒトの健康阻害要因の除去や制御、たとえば喫煙、飲酒、栄養（肥満）、運動不足、ストレス問題など、健康に対するネガティブな要因を別々に評価し、それらを除去したり、変容させることに

注意が向けられていた。しかし、最近ではヒトの健康関連問題を「総合的」に捉えたり、健康関連問題を「行動」として扱う観点が主流を占めるようになってきた。前者の観点では、健康阻害要因のそれぞれは複雑にリンクしており、そのため総合的な健康プログラムとしてのウェルネス活動、またはヘルスプロモーション活動が目目を浴びている。たとえば、健康危険因子の評価、禁煙、血圧コントロール、運動や体力作り、体重コントロール、栄養教育、ストレス・マネジメント、腰痛予防などを一つの総合的プログラムとして扱い、健康教育と実践を一つの範疇で捉える動きである。もう一つの観点は、ヒトの健康に関わる行為を「行動」と見なし、その行動を変容させたり維持させるためにいくつかの健康行動モデルを想定し、それらのモデルによって介入を考えるという研究である。

ヘルスプロモーション特論 (奇数年度開講) 辻内 琢也

世界保健機構(WHO)は、健康のための基本的条件・資源として、平和・住居・教育・食物・収入・安定した生態系・生存のための諸資源・社会的正義と公正、を挙げている。また、疾病の予防は個人のみで実現できるものではなく、社会環境の整備が必要であり、病気になった人をいわずらに非難することは避けるべきであると明言している。本特論では、健康増進言説・予防医学言説・自己決定言説の背後にあるポリティクスを浮き上がらせた上で、物語りと対話に基づく医療(NBM; Narrative Based Medicine)に基づいた新しい健康づくりのあり方について考察してゆく。本講座はグループ学習と発表を中心としたボトムアップ方式で行う。

[健康福祉科学研究領域]

障害者支援論 (奇数年度開講) 山内 繁

障害基礎論における現代的課題のうち最も重要なものに、ICF において定式化された「医学モデルによるアプローチと社会モデルによるアプローチの弁証法的対立」を止揚した統合モデルの確立がある。この講義では、この課題にアプローチするための準備作業として、この対立の形成並びに未解決の問題点を原典を通じてたどる。

この対立を具体的に検討するための障害者支援の場面として、支援機器による支援を取り上げる。このとき、支援機器においては、オーファンプロダクツとユニバーサルデザインとの二元論的でとらえることができる。オーファンプロダクツは医学モデルに、ユニバーサルデザインは環境に着眼する点において社会モデルに通じるものがあるが、必ずしも概念として対応しているわけではない。これらの概念の検討において、QOL をキーワードとして、統合モデルへの道を探る。

福祉ロボット工学特論 (奇数年度開講) 可部 明克

健康福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業を想定し、製品を開発するための基礎技術を習得する。

- 1 ロボットの数値制御(メカ構造の把握、座標系、数値制御等)
- 2 ロボットのセンサシステム (ビジョン、音声、ICタグ、生体等)
- 3 ネットワークシステム(基本構成、通信プロトコル、具体的なネットワークシステム)
- 4 ロボットの応用システム(福祉用アプリケーション機能、生体計測応用システム、応用システムの設計)

老年社会福祉学特論 (偶数年度開講) 加瀬 裕子

老年学は、個人の身体的変化から社会的現象まで、老化に伴う諸問題について研究する学問である。老化に伴う問題を、社会福祉学の視点から研究する老年社会福祉学は、単に老人福祉を対象とするものではない。

高齢化や少子化によって生じる個人の生活への影響や社会構造への影響について、国際的動向を踏まえて概説する。

生命医療倫理学特論

(偶数年度開講)

土田 友章

生命医療の倫理の基本的諸問題を通覧し、とりわけ死生学に焦点をあてて検討する。さらに、それらの基礎となる倫理論を考察する。

スポーツ健康マネジメント特論 (奇数年度開講)

吉村 正

チームマネジメント、目標達成マネジメント、「やる気」が出るマネジメント、監督やコーチ(指導者)の在り方、役割、指導法、また、施設・用具や金銭の扱い方等について講義する。加えて、スポーツ健康マネジメントに関する文献講読や現場実習も行い、それらについて相互に議論する。

社会保障政策特論

(奇数年度開講)

植村 尚史

年金、医療、介護など社会保障に関する具体的なテーマについて、最近の政策の動向を中心にコメントするとともに、課題を設定し、報告、ディスカッションを行う。

健康福祉管理特論

扇原 淳

本講義では、健康管理と福祉管理の2つの領域に関する最新の研究成果や政策の現状と展望について概説する。健康管理領域では、日本および世界が抱える健康問題(人口・保健統計、感染症、生活習慣病、環境汚染、気象・気候、薬物、国際保健協力等)とその対策の現状について具体的事例を挙げるとともに最新の研究成果について概説する。福祉管理領域では、福祉管理政策・制度の歴史、現実の福祉行政組織・機関・施設等の運営・管理(組織や人材管理の基本、医療保険、介護保険、ヘルスプロモーション、事故防止と安全確保等)および地域福祉管理(NPO、NGO、ボランティア等)の現状と課題および当該分野の研究動向(ヘルス・コミュニケーション、総合的品質管理等)について概説する。

予防医学特論

(偶数年度開講)

町田 和彦

広義の予防医学の定義としては個々の疾病に対して臨床家が患者に対して衛生活動を行う場合も含めることもあるが、日本では人間を取り巻く自然環境や社会的環境の健康に及ぼす影響を調べ、疾病の予防と健康の保持増進を図る衛生学と公衆衛生学を統括したものと考えられてきた。特に本研究科は医学部ではないので後者を重視した予防医学の立場をとるが、近年では健康の保持、増進から疾病の早期発見、疾病悪化予防、リハビリテーション、福祉政策にいたる広域的な健康福祉医療政策を見据えた予防医学について講義を中心に行っていく。学部の広義と異なり、予防医学の全般について講義するものでなく、私が今まで衛生学、公衆衛生学、環境保健学の各分野で行ってきた研究を特に研究のプロセスにこだわって授業を行うつもりである。

取り上げられるテーマとしては、今まで研究者としてたどってきた順に次のようなテーマを考えている。1. 日内リズムの生体に与える影響(動物実験)、2. 感染症の疫学(麻疹ワクチンの効果と流行に及ぼす影響の把握)(血清疫学調査)、3. カドミウムを中心とした微量元素の生体影響(動物実験)、4. 鉱山地域における微量元素の飲料水、農作物、生体に及ぼす影響(試料分析調査)、5. 無医地区における健康管理(健康調査)、6. 非A非B肝炎および成人T細胞白血病の血清疫学調査(試料分析調査)、7. ライフスタイル(特に自由運動習慣とストレスについて)の非特異免疫を中心とした生体防御機能に及ぼす影響(動物実験)、8. 高齢者のライフスタイルと健康や生きがいとの関係についての健康管理調査、9. 渡良瀬川・利根川・江戸川水系における河川水と水道水の関係(化学分析調査)、10. 大学時代の運動と中高年期の健康と生きがいについて(アンケ

ート調査)、11. ライフスタイルが医療費に及ぼす影響に関する調査研究(日本におけるレセプト調査)、12. 中国(天清市)における高齢者に対する健康増進運動と医療行動調査、13. 健康福祉医療政策

福祉教育特論

前橋 明

本講では、児童を対象にした福祉教育をとりあげる。福祉教育は、将来、社会の担い手となる子どもたちが、人を人として尊び、人間一人ひとりが平等で、かつ、相互に思いやりの心で援助し合っていくという「福祉」の心を育てることを通して、福祉に対する理解と関心を深めるとともに、社会に奉仕する実践的態度の育成を図ることをねらいとする。

また、福祉教育は、子どもたちの人間性の育成に密接な関わりをもつものであるから、学校における全教育活動だけでなく、学校外における家庭や地域の全教育活動を通して行う必要性を理解する。したがって、本講では、学校ならびに家庭や地域における福祉教育のあり方やその具体的実践について演習する。

緩和医療学特論

(偶数年度開講)

小野 充一

“生命の終わり”に象徴されるような、個人の力で乗り越えることが困難で深刻な課題に向き合うために必要とされる、個人の能力や家族のあり方、精神・社会的支援システムの展開方法について概説し、既存の社会システムの問題点や変革の方向性について多角的な検討を行う。

障害者福祉特論

(奇数年度開講)

小野 充一

「障害をもつこと」を一人称あるいは二人称の立場から検討する視点と、三人称の立場から社会的に検討する視点を対比しながら、個人の「内なる障害観」が「対話の障壁」になることを学ぶことと、集団や社会における「障害観」の蓄積が、特定の社会通念として形成された場合に出現する様々な問題について概説し、次世代の社会システムを構築する条件や環境などについて多角的な検討を行う。

児童家庭福祉特論

川名 はつ子

少子高齢社会の脅威を強調した社会防衛のための少子化対策を超えて、誰もが人間らしい生き方を追求できるように、子どもと家庭の側から「よりよく生きること」を考えたい。児童家庭福祉を専攻しない院生の受講も考慮し、この分野を網羅しながら刺激的問題提起を含む教科書を選定する予定である(具体的な書名は、開講時に提示する)。「子どもとは何か」「女性の権利と子どもの権利」などの問題意識を念頭におき、トピックスや事例をまじえた講義とする。

福祉援助特論

(偶数年度開講)

川村 匡由

福祉援助は一般的には社会福祉援助技術といい、直接援助技術、間接援助技術、関連援助技術に大別される。このうち、直接援助技術は個別援助技術(ケースワーク)と集団援助技術(グループワーク)、間接援助技術は地域援助技術(コミュニティーワーク)、社会福祉調査法、社会福祉計画法など、関連援助技術はネットワーク、ケアマネジメント、スーパービジョンなどからなる。

そこで、まずこの社会福祉援助技術の意義について考えたうえで、それぞれの援助技術の概要について整理したのち、それぞれの事例研究を通し、その現状と課題について考察する。

比較高齢社会特論

(奇数年度開講)

川村 匡由

高齢社会の定義については国連や人口論、社会福祉学の研究者によって異なるため、その定義について検証する。そのうえで、各国の人口の高齢化の違いやそれによってもたらされる社会保障制度上の問題、およ

びその課題や方策について比較研究をする。

具体的には、人口の高齢化の概念、高齢化と高齢化社会、高齢化と少子化との関係について検証する。また、これらの概念の整理を踏まえ、先進国や発展途上国における社会保障制度の動向について比較研究し、我が国における課題と展望を考える。

精神保健福祉特論

(偶数年度開講)

田中 英樹

精神保健福祉学は、精神保健という特定領域分野における社会福祉の政策と実践を範疇に形成されつつある。しかし、成立間もない若い学問であり、その体系化は今日の課題でもある。歴史的に見ると精神保健福祉学は、1997年の精神保健福祉士法の制定により、指定科目として「精神保健福祉論」が登場したことを契機に実体化した。この内容には、精神障害者福祉論そのものであり、必ずしも精神保健福祉と同義語ではない。しかし、精神保健福祉学の主要な内容であることも明らかである。

そこで、本講義では、精神障害者福祉をベースに広く精神保健福祉を国民の精神保健全般を福祉的視座から論考・解題していくこととする。講義では、精神障害者福祉の歴史と形成過程、関連する法の変遷、障害の構造的理解、障害者自立支援法、関連施策、精神障害者の現状と人権、スティグマなどを取り上げながら考察していきたい。

健康福祉支援工学特論

(奇数年度開講)

島山 卓朗

障害のある人と生活支援機器、さらにはそれを支える社会環境などに着目し、障害のある人の QOL(Quality of Life、生活の質)の向上を目指した研究を行うための基礎を身につけます。

テーマ設定、先行研究のサーベイ、研究計画の立案と実施、プレゼンテーションとディスカッションを通して研究を進めます。

具体的なテーマとしては、自立生活への動機付けと生活支援機器が果たす役割、生活支援機器供給システムのあり方、障害者用インタフェースの開発とユーザビリティ評価、生活支援機器に関する経験情報の知識化など、広範囲の研究テーマをカバーします。

[臨床心理学研究領域]

社会病理学特論

野村 忍

現代社会は、技術革新、情報化、国際化、バブルの崩壊による深刻な不況など多くの難問に直面している。こうした社会環境の中で生活する現代人は多くのストレスを経験している。ストレスの影響は、不快な危機的な情動変化とそれに伴う身体的変化とそれらを解消するための行動変化としてあらわれる。したがって、ストレス性健康障害としては、種々の心理反応、身体反応と行動上の問題に分類される。ここでは、産業ストレスの今日的課題、ストレスのアセスメント法、ストレスマネジメントの方法論について講義する。

臨床心理査定特論Ⅱ

佐々木 和義

簡易知能スケール、ウェクスラー・メモリースケール、視覚記名検査、高次動作性検査、高次視知覚検査、失語症検査などの神経心理学的検査、および人格検査(Big Five理論、Y-G性格検査、エゴグラム)、健康尺度(CMI)、感情尺度(POMS)、不安尺度(STAI)、抑うつ尺度(DBI)、ストレス尺度などの質問紙検査に関して、その理論、実施方法、結果の解釈について、講義する。

臨床心理学特論Ⅱ

根建 金男

近年、従来の典型的な認知行動療法への批判として構成主義心理療法 (constructive psychotherapies) が台頭してきた。それに伴って、構成主義心理療法におけるアセスメントが重要味を帯びてきた。そこで、関連の文献を輪読し、議論することを通して、構成主義心理療法で用いられるアセスメントについて学ぶことにしたい。

臨床心理面接法特論Ⅰ

菅野 純

教育臨床場面 (教育相談、発達相談、スクールカウンセラー、学校心理士など) を想定し、そこでの援助、治療、コンサルテーションなどの展開の方法を学ぶ。基本的方法を学んだのちは、事例検討を行う。受講者がそれぞれの臨床現場でかかわる事例をもちよっての検討も行いたい。

教育臨床心理学特論

菅野 純

現代の学校教育場面では、従来の教育的方法では対処できない問題が数多く出現している。たとえば、子供の発達障害から不適応行動、家庭崩壊や愛情飢餓など心理環境の原因からくる問題行動、そして子どもへの指導や保護者との対応などに悩み追い詰められていく教師たち・・・など学校はあたかも社会の縮図のごとく問題が折り重なっている。それらの問題に対して臨床心理学的理論と方法を援用し、問題の解決をはかったり、予防をはかったりするものが教育臨床心理学の課題である。本講義では教育臨床心理学に基づく、子ども理解の方法、アセスメントの方法、そして問題へのアプローチの方法を事例をもとに取り上げていきたい。

臨床心理査定特論Ⅰ

山崎 久美子

ロールシャッハ・テスト (片口式) について学ぶ。スコアリングを練習問題を解きながら習得し、実際の症例を通して所見の書き方を知る。時間が限られているが、高次精神機能を査定する神経心理学的検査についても学ぶ。医療・リハビリの場では、脳血管障害をはじめとする各種神経疾患を有する患者の精神機能の評価ができることが重要である。失語・失認・失行の領域と、記憶・認知症等の検査を施行し、体系的かつ包括的な検査報告書が作成できるようになることも臨床心理士には必須である。

臨床心理学特論Ⅰ

鈴木 伸一

うつ病 (うつ病性障害)、不安障害、適応障害、摂食障害、身体表現性障害などといった成人に比較的多く見られる精神関連障害の心理社会的特徴を理解するとともに、これらの問題へのアセスメントと治療的介入 (認知行動療法、行動療法など) の実際について解説する。また、事例検討などを通して介入のプランニングや他職種との連携などについても具体的に学んでいく。

<参考図書>

鈴木伸一・神村栄一 実践家のための認知行動療法テクニックガイド 北大路書房
坂野雄二 (編訳) エビデンスベース心理治療マニュアル 日本評論社

臨床心理面接法特論Ⅱ

嶋田 洋徳

本特論では、①主訴の把握、②臨床心理アセスメント、③診断基準、④問題の焦点づけ、⑤治療方針・治療仮説の立て方 (主として行動分析)、⑥面接の進め方、⑦治療の中間評価と方針の変更、⑧治療の終結と評価の方法、を中心に概説を行い、同時に実習を行う。また、受講生が担当している事例についても、前述の観点から検討を行う。

行動療法特論

嶋田 洋徳

行動療法とは、学習理論、もしくは行動理論に基づいた心理療法の総称である。行動療法の特徴は、様々な心理的諸問題を、人間の社会化あるいは個性化のプロセスにおいて誤って学習された結果や習慣もしくは適応的な行動や反応を未だ獲得していない結果や状態であると考ええる点にある。本講義では、行動療法の歴史や基本的発想、理論的基礎を概観するとともに、症例研究を通して行動療法の理論と実際について理解することを目的とする。

臨床心理基礎実習Ⅰ

菅野 純、根建 金男

前半は菅野が担当し、臨床場面でのインテーク面接から終了に至るまでのプロセスを実習を通して学んでいく。主にクライエントセンタードの技法を中心に、クライエントの見たて方、カウンセリング上生じる諸問題の解決法などを学ぶ。描画療法、コラージュ、箱庭療法、プレイセラピーの実習も行っていく。

後半は根建が担当し、行動療法と認知行動療法の技法を実習を通じて学ぶ。具体的には、行動療法の技法(リラクゼーション法、系統的脱感作法など)、認知行動療法の技法(認知的再体制化法、自己教示訓練など)をとりあげる。必要に応じて、これらの技法の背景になっている考え方や理論についてもふれる。

臨床心理基礎実習Ⅱ

菅野 純、根建 金男

前半は菅野が担当し、臨床場面でのインテーク面接から終了に至るまでのプロセスを実習を通して学んでいく。主にクライエントセンタードの技法を中心に、クライエントの見たて方、カウンセリング上生じる諸問題の解決法などを学ぶ。描画療法、コラージュ、箱庭療法、プレイセラピーの実習も行っていく。

後半は根建が担当し、行動療法と認知行動療法の技法を実習を通じて学ぶ。具体的には、行動療法の技法(リラクゼーション法、系統的脱感作法など)、認知行動療法の技法(認知的再体制化法、自己教示訓練など)をとりあげる。必要に応じて、これらの技法の背景になっている考え方や理論についてもふれる。

臨床心理実習Ⅰ

山崎 久美子、嶋田 洋徳、鈴木 伸一

この授業の受講生は、心理臨床基礎実習ⅠおよびⅡを履修した大学院生に限る。心理臨床面接におけるインテーク、アセスメントおよび治療支援的援助の実際について、実習を通して理解することを目的とする。大学院の心理相談室におけるインテーク面接および関連施設で担当したケースについてのスーパービジョンを中心に実践的な面接スキル、他のスタッフとの連携などを学習する。

臨床心理実習Ⅱ

山崎 久美子、嶋田 洋徳、鈴木 伸一

この授業の受講生は、心理臨床基礎実習ⅠおよびⅡを履修した大学院生に限る。心理臨床面接におけるインテーク、アセスメントおよび治療支援的援助の実際について、実習を通して理解することを目的とする。大学院の心理相談室におけるインテーク面接および関連施設で担当したケースについてのスーパービジョンを中心に実践的な面接スキル、他のスタッフとの連携などを学習する。

心理療法特論Ⅰ

(偶数年度開講)

菅野 純、嶋田 洋徳、根建 金男
野村 忍、山崎 久美子

医療、学校臨床、教育相談などさまざまな臨床場面における心理療法の諸技法の理論的背景と実際について学習する。心身医学(野村)、認知行動理論(根建)、カウンセリング(菅野)、精神分析的精神療法(山崎)、行動療法(嶋田)のそれぞれの立場から心理療法の理論と実際について講義する。

心理療法特論Ⅱ

(奇数年度開講)

三浦 正江

本講義では、治療的手法および予防的手法として注目されているストレス・マネジメント・プログラムについて取り上げる。具体的には、心理的ストレス理論の主要概念であるストレスラー、認知的評価、コーピング、ストレス反応について理解する。そして、治療場面において認知やコーピングの問題をどのように取り扱うかを考える。また、ストレス反応を軽減する効果的な方法として、漸新的筋弛緩法や自律訓練法の実施方法と臨床事例への適用を紹介する。最後に、ストレス・マネジメント・プログラムや心理的ストレス理論を活かした予防的介入の具体例を取り上げる。心理臨床の専門家として、ストレス・マネジメント・プログラムを様々な領域において実施可能となることが本講義の目標である。

学校臨床心理学特論

小林 正幸

学校心理学を理論的背景に、スクール・カウンセラーあるいは校内で教育相談推進者のレベルの力量を目指す。ある意味ではそれ以上の水準の習得を目指す。①カウンセラー、教育相談担当者、研究者としての構え・働きかけ・姿勢を形成する。②実践に密着した題材から学ぶ。③実践的に思考し、実践的な技術を習得する、実践にかかわる体系的知識を獲得する。内容としては、現代の教育問題の中核を占める不登校問題を中心に講義する。

行動医学特論

熊野 宏昭

行動医学は、人間の身体・心理・社会面の相互連関を前提として、医師、コメディカル、心理、教育、スポーツ、栄養など様々な分野の専門家が協力して成り立つ分野である。本講義では、(1)行動医学的に見た不健康や病気の成り立ちとそれへの介入法(ストレス、リラクゼーション、認知行動療法、マインドフルネス)、(2)行動医学の主要な対象疾患としての心身症と生活習慣病(心身症と生活習慣病、パーソナリティと健康、糖尿病の行動医学)、(3)行動医学における先進的な研究法とその成果(行動変容の脳内機構、生態学的経時的評価法、QOL と治療の科学化)について順次講義を進め、日本ではまだまだ発展途上ではあるが大きなポテンシャルを持つこの分野の本質的理解を目指す。レジュメが、<http://hikumano.umin.ac.jp/kougi.html> に置いてあるので、予め目を通し、自らの問題意識と重なるかどうかを確認した上で科目登録することが望ましい。

社会心理学特論

坂本 真士

社会心理学には、帰属過程、攻撃、自己呈示、自己意識、態度、認知的不協和などの理論があるが、社会心理学の発展と共に、社会心理学での理論や知見から、精神的不適応について明らかにしようとする動きが盛んとなってきた。実際、抑うつ、不安、アルコール依存、摂食障害など広範囲の精神疾患の生起には、自己の問題や対人関係の問題が関与している。抑うつを中心に、精神的不適応に関する社会心理学的なアプローチについて解説する。

心理学研究法特論

福井 至

主要な心理学研究法である実験計画法、調査研究法、および事例研究法について、その意義と実際の方法について解説していく。また、質的研究法による仮説構成法や、Evidence-based Psychotherapy に必要なRCT、準実験や単一事例の実験計画法などの比較的新しい展開についても、その意義と実際の方法について解説する。

心理統計法特論

逸見 功

心理学は、多くの要因(変数)が関わる複雑な現象を対象としている。とくに量的研究では、研究デザインや

データ収集法を工夫するとともに、統計法を利用してデータを解析することによって、変数間の関連性から現象のメカニズムや因果関係を解明していく。したがって、さまざまな統計法について知り、それらの考え方を理解した上で適切に使えるようにしたい。そこで、心理研究に有用な統計法について、広く心理学や行動科学から題材を採りあげながら、統計法の概念的理解と適用法および結果の解釈に重点を置いて解説する。

精神医学特論

赤穂 理絵

精神医学の最近の話題から、トピックを選んで講義する。その中で、精神医学の体系についても身につけられるように配慮する。

心身医学特論

野村 忍

心身医学は、患者を身体面のみならず心理社会面をも含めて全人的なアプローチを行う医学である。この授業では、心身症や神経症・うつ病などの病態についての理解および診断・治療法について、講義および実習を行う。また、最近のトピックスについてのレポート発表およびディスカッションをとおして学習を深める。この授業は、心理臨床の実践を志す人を主な対象として、必要な知識・技術の修得を目標とする。

心理臨床現場実習Ⅰ

菅野 純

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

心理臨床現場実習Ⅱ

野村 忍

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室ならびに学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解、支援技術の習得、その他の関連する諸問題に対するスーパービジョンを定期的に行なう。

心理臨床現場実習Ⅲ

根建 金男

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

心理臨床現場実習Ⅳ

山崎 久美子

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを

向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

心理臨床現場実習V

嶋田 洋徳

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

心理臨床現場実習VI

鈴木 伸一

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

[感性認知情報システム研究領域]

感性心理学特論

(奇数年度開講)

齋藤 美穂

感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究方法も多岐にわたる。そこでこの特論では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当てて講義する。特にノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知や感性的な側面に着目することを手がかりとして感性を考えていく。また文化的な共通点を知ると共に、相違点を講じることによって、感性に対する理解を深めるのと同時に自文化・他文化に対する理解も深めていく。

安全人間工学特論

(偶数年度開講)

石田 敏郎

人間工学は、異なるシステムおよび環境下における精神的、身体的タスクを行うための人間の役割、能力およびその限界を研究することを目的としている。本講では、産業現場、交通場面での人間行動を取り上げ、安全を保つための人間工学的研究について述べる。また、近年多発するヒューマンエラーに関し、その考え方、分析の方法および人間工学的対策立案に関して概括する。

生活支援工学特論

(奇数年度開講)

藤本 浩志

自立した生活を機器や道具によって支援することについて、その基本的な考え方や具体的な機器や道具の原理等について講義する。また併せてその効果の評価方法についても言及する。様々な生活支援機器が開発されているが、それらの効果の評価を試みる場合、それらを利用する目的に立ち戻って評価方法を検討する必要がある。感覚機能支援、運動機能支援について、それらの機器や道具の具体的な事例を紹介しながら

解説を行なう。そのために必要な基礎的な知識や方法もその際に同時に説明する。

生体システム工学

戸川 達男

生物の体は巨大システムであり、その上に高等動物は脳という巨大システムを持つに至った。さらにヒトに至ると、文化ことに言語を持つことによって広大な精神活動の領域が現れた。今日では、生命の誕生からヒト出現に至る進化の過程とともに、人間の文化の変遷をかなりの精度でたどることができる一方、まだ多くの謎が残されている。トピックスとして、人間理解に不可欠な生物理解、すべては進化の大原則に帰着する、大規模システム構築の謎、動く生き方にこだわった動物の宿命、謎の多い言語、いまだに解けない心身問題、自由意志は幻想か、多様な自己理解の可能性、ヒト絶滅の危機、人間はまだ良い生き方がわからない、などをとりあげる。

情報処理心理学特論

(奇数年度開講)

中島 義明

認知心理学が登場してから、最初の「第一の時代」が経過した。この間に、この新しい視点に立つ心理学はそれなりの実績を積み上げてきた。しかし、この時代になされた「認知変数」の切り出しは、本来は「統合体」として融合し一つのまとまりをもった対象を、分析的研究に「都合の良いように」切り取ったものと言えよう。それゆえ、認知心理学の次の「第二の時代」には、これらの変数の一部を重ね合わせたり、さらに別の方向から眺めることによりそれまで独立して取り扱われてきた複数の「認知変数」を統合したり、接続させるといった作業がなされるべきである。

「今」こそ、認知心理学は自ら努力してでも「第二の時代」に入るべきである。本講義では、この信念に基づき、これまで認知心理学や伝統的心理学で取り扱われてきた諸「認知変数」(もしくは「認知的構成概念」)を理論的に検討し、この種の「連結」作業を試みるものである。

教科書として、下記の書物を使用する。

中島義明著『認知変数連結論』(仮題)コロナ社(2007年9月末までに刊行予定)

教授学習過程特論

宮崎 清孝

本科目は認知科学について、特に教授学習という面から学んでいくための授業である。認知科学に対する今日的アプローチには、その脳神経的基盤を求めるもの、認知自体を(特に神経系へのアナロジーを用いながら)モデリングしていこうとするもの、さらに認知の個人史(発達)的、歴史的成立過程を見ていこうとするものなどが存在する。この最後の立場からは、学習は認知研究の中心的問題である。認知過程の学習は個人個人を問題にするだけでは足りず、その発達を支える周りの人間、つまり社会やその文化との相互作用の中で起こる。そのような考えで研究を進めている立場を文化歴史的アプローチと呼び、ここではそれについて学ぶ。なお大学院の授業としては英語論文を読む力を養うことも重要であると考えており、そのときそのときの最新の話題も考慮しつつ英文文献を選び、講読していき、適宜講義を交える予定である。

感情心理学特論

鈴木 晶夫

感情の定義はいろいろな側面から記述できるが、「精神の働きを知・情・意に分けた時の情的過程全般を指す。情動・気分・情操などが含まれ、主体の状況や対象に対する態度あるいは価値づけをする心的過程」と考え、感情研究の歴史、感情の生物学的・神経心理学的アプローチ、感情の心理学的アプローチ、測定方法・アセスメント、感情の発達、個人差、感情表出、文化、臨床、感情障害、健康、感情に関連する社会的プロセスなど、さまざまなテーマが含まれ、その関連領域は広範に及んでいる。

この講義では、上記のテーマに関するこれまでの研究を概観し、感情研究の考え方について学ぶ。さらに研究論文などを材料に感情研究の様々な問題を考えたい。

言語情報科学特論

菊池 英明

言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。この講義では、コンピュータ・情報処理技術を導入した音声言語理解・生成・インタラクションのモデル化及びシステム開発の事例を紹介する。

知識情報科学特論

松居 辰則

この講義では、人工知能に関する基本的な理論や技術を多くの事例を通して紹介します。人工知能はコンピュータに「人間のような振る舞いをさせる」ことを目的とした、理論・技術です。講義の進め方は、数学的、技術的な話に偏ることなく、「人工知能」というものが正しくイメージできるようになることを目標とします。この講義を通して、人工知能の魅力を知ると同時に、その限界も知ることにより「人間とコンピュータの共存」というテーマについて深く考えます。

人間生体機能動態学

(奇数年度開講)

宮崎 正己

人間と環境を中心とした労働生理学に関する原著・評論・概説を中心とした話題を取り上げる。さらにその現代的な意義に関して、論議をおこなう。

感覚情報処理学特論

(奇数年度開講)

百瀬 桂子

本講義では、視聴覚の情報処理過程の生理学的機構およびそれに伴う脳神経活動の評価法や関連する計測技術について理解することを目的とする。英語の文献の輪読を通して基礎知識を得た上で、最近の関連研究論文・事例をとりあげて討議しながら、視聴覚情報処理の応用的側面について考察する。

視覚デザイン

(奇数年度開講)

市原 茂

感覚・知覚測定法、視覚系の構造と機能、視覚刺激の特性、色覚、形態知覚、空間知覚、運動知覚、感覚間相互作用などの領域の基礎的な問題を解説するとともに、関連するトピックスを紹介し、さらには、視覚研究の応用的な側面を考察する。

生態心理学特論

(偶数年度開講)

三嶋 博之

本講義では、心理学における生態学的アプローチについての歴史的な展開を確認しながら、その現代的意義について再検討する作業を行いたい。James J. Gibson の生態心理学を中心的に取り上げるが、これに先行もしくは平行して発展してきた他の生態学的アプローチについても取り上げる予定である。

[教育コミュニケーション情報科学研究領域]

教師学特論

浅田 匡

教師の成長・発達の問題を、専門家としての省察のあり方とそれを促進する方法、さらには「研究者としての教師 (teacher researcher)」としての専門的スキルに関して論及する。また、それらが実践される場としての学校及び校内研修のあり方を、教師による知識創造の視点から論及する。とくに、実践に基づく知識マネジメントの方法を検討する。それらに基づき、教師としてのあり方、教師としての専門性を、「技術熟達者モデル」と「反省的実践家モデル」とを統合するということから考察する。具体的には、Action Research in Organizations 等の文献をベースに進める。

マルチメディア特論

(奇数年度開講)

金子 孝夫

文字、音声、静止画、映像などの各種マルチメディア情報のそれぞれの高度な表現法と技術の詳細について理解することを目標に講義する。これらの各メディアを統合し、コンピュータ上で処理する技術(情報圧縮、メディア変換、情報解析)、ならびにマルチメディアを支えるハードウェアとソフトウェア(記録、再生、編集処理)について最新の情報を中心に解説し、さらにマルチメディア技術の応用サービス(通信、放送、情報家電、教育)について理解を深める。

ソフトウェア工学特論

金 群

ソフトウェア工学とは、品質の良いソフトウェアをいかに効率良く開発するかを研究する学問である。ソフトウェアの開発・管理は、ユーザの要求を適確に把握することから始まり、要求分析、仕様作成などの設計プロセスを経て、具体的なプログラムを作成し、テストを行い、運用、保守に至るものである。

授業では、ソフトウェア開発プロセスを中心に、ソフトウェア工学の基本理論と技法について学び、最新のソフトウェア開発手法と関連知識を理解する。

ソフトウェアは論理的な人工物であり、ソフトウェアの開発は人間が行うものである。ソフトウェア工学は、開発対象となるソフトウェアそのものを研究するだけでなく、ソフトウェア開発プロセスにおける人間の行う行動を研究する学問でもある。

授業では、ソフトウェア工学の人間的な側面についても考察する。

科学英語論文作成法

ロバート グレイ

Guidance in the conventions of writing research reports, abstracts and bibliographies following the conventions of the 'academic genre' are presented. A textbook-focused approach addresses a variety of topics such as Organization, Sentence Structure, Grammar and Mechanics, and The Writing Process. Assessment is based on class participation, and an English report of 1,000 words due at the end of the semester.

科学英語論文口演法

ロバート グレイ

Public speaking practice for the purpose of making academic presentations in English. Students are required to speak on their main field of study, and their current research program. Speeches are critiqued by participating class members. Guidance is given by the instructor to facilitate proficiency in oral presentations, and in taking and responding to questions from the floor. Evaluation is based on the presentation of speeches, and on class participation.

インストラクショナルデザイン特論

向後 千春

インストラクショナルデザインは、教育を効率よく(速く)、効果的に(深く)行うための手法を追求する学問です。そして、人間の学習についての科学と情報技術を利用した教育を指向する研究領域です。この授業では、心理学の学習理論を背景として、学校、企業、生涯教育で行われている実践をインストラクショナルデザイン的な視点から検討していきます。具体的には、グループワークの形態をとり、個々のケースを検討し、解決案を作っていきます。

情報コミュニケーション技術特論

スコット ダグラス

Advanced topics in the area of information and communication technologies. Contact the instructor for more information.

教育情報工学特論

(奇数年度開講)

永岡 慶三

教育・学習支援システムの開発、教育データ解析手法の開発など、あるいは国際間の同時双方向遠隔授業の実証実験を通じて、テクノロジーの教育への適用に関する基本的目的・理念・指針について、論文や資料の輪講をしつつ討論する。

インターネット科学特論

西村 昭治

2006年現在、4.4億台のコンピュータが接続され6.5億人のユーザがいるというインターネットはもはや単なる情報通信ネットワークにとどまらず、社会基盤あるいはそのもの自体が様々なコミュニティを生み出す場となっている。本講義ではインターネットの定義から始まり、その歴史をひもとくとともにそれを成り立たせる様々な技術の解説を試みる。また、インターネット上の様々なサービスを解説するとともに、今後の動向について考察する。

教育開発特論

野嶋 栄一郎

本講義は2つの柱をもつ。

その一つは教育思潮の変遷の歴史である。

今一つは教育思潮の流れに沿って開発されていった具体的な教育システム、教育評価、教育方法の歴史である。

本講ではあざなえる縄のごとくある、2つの流れを教育実践との関係の中で解説する。

言語教育方法特論

保崎 則雄

この授業では、まず Krashen のインプット仮説を理解し、その過程で BICS、CALP という概念をカリキュラムにどのように関連づけるのかということを探る。そして、言語教育にメディアが歴史的にどのような役割を果たして来たのかということ、1940年代米国で開発された Language Lab に始まって、現代の CALL、遠隔教育、online 教育の事例とともに理解、評価する。主に扱う言語教育は、2007年度は、一応 TESOL、TEFL、JASL、JAFI である。合わせて、言語教育における、状況的学習とフィールドトリップの機能、メディア利用の教育の効果と効率、ティームティーチングの課題、教員養成・研修における教材開発などについても、受講生の人数を鑑み、扱う予定である。輪読する雑誌は、言語教育、TESOL Quarterly、Language Laboratory を中心とする。

教育システム工学

(奇数年度開講)

赤堀 侃司

教育システム工学特論では、情報科学・情報工学や認知科学などの立場から、教育事象を分析し、システムとして支援するいくつかの方法とそれについて講義する。①教育工学の研究分野、②学習理論と教育システム、③数理モデル－分析法－、④数理モデル－構造化法－、⑤システム開発－コンピュータ教材－、⑥システム開発－CAI－、⑦問題解決過程の分析、⑧ヒューマンインターフェース、⑨教育システム設計(ISD研究)、⑩現代の教育課題研究

学習教授評価法

(偶数年度開講)

伊藤 秀子

学習、教授、評価の理論と実際について学ぶことを目的とする。これらは教育における重要な概念である。ここでは教育活動を人間の基本的な営みととらえ、制度化された教育の枠組みを超えた広い視点から考えていきたい。

授業は受講生の発表を中心に行い、授業への参加を通して学習、教授、評価を体験する。また、メディア教材や具体的資料などを使用し、理論と実際の関連を考える。

学習科学特論

菅井 勝雄

近年の情報ネットワーク社会における教育の課題として、情報化、国際化、環境問題への教育の対応がある。そこでこの特論では、地域から世界へ広がる学習環境のより良いデザイン・実施・評価論の構築をめざして、主として学習科学(発達科学を含む)から探求する。ゼミ形式で進め、内外の文献をもちいるが、ヴィゴツキー系理論、社会的構成主義、人間発達の生態学理論などを予定している。

情報メディア教育特論

(偶数年度開講)

森田 裕介

情報メディア教育とは、情報技術やメディアを活用した教育のことである。情報メディアとは情報を伝えるメディアのことで、動画像、静止画像、音声、文字などの表現メディアと、表現メディアを伝達する通信メディアによってその特徴を表すことができる。本講義では、情報メディアを活用した教育について、方法、開発、評価の観点から理解を深め、有用性と限界について議論を行う。

－修士課程 1 年制コース－

【教育臨床コース】

【研究指導】

学校臨床心理学研究指導

菅野 純

学校教育における教育臨床の諸問題に関する参加各人の研究テーマをもとに指導を行なう。データの収集、分析、研究論文作成、発表などの各方法についての指導を通して、参加各人が教育臨床に関する研究能力を獲得することを目指す。

臨床認知発達学研究指導

佐々木 和義

学習障害、広汎性発達障害(自閉性障害、アスペルガー障害)、注意欠陥／多動性障害などを中心とした発達障害児に関連したアセスメント、支援法、社会的スキル訓練、ペアレント・トレーニング、教師へのコンサルテーション、ティチャー・トレーニング等、その他各人が関心を持つテーマに関して、文献検索、研究方法、結果の整理と解釈、論文へのまとめ方、学会活動(可能な者は発表)に関して具体的に援助する。これによって、実践のみならず、研究的な指向性も併せ持つ人材の育成を目指す。

【コース必修(演習)】

学校臨床心理学演習(1)

菅野 純

学校教育における教育臨床の諸問題をテーマに演習を行なう。

学校臨床心理学に関する理論、子どもの心理や能力、対人行動などのアセスメント方法、不登校、いじめ、反社会的行動、家庭内暴力、自殺といった問題への対処および援助方法、教職員のメンタルヘルスなどについて、文献講読や実践発表、事例研究などを中心に演習をすすめていく。

臨床認知発達学演習（1）

佐々木 和義

学習障害、広汎性発達障害（自閉性障害、アスペルガー障害）、注意欠陥／多動性障害などを中心とした発達障害児に対するアセスメントや支援に関する専門誌の学術論文を持ち回りで報告し、受講者全員で討議する。さらに、実際にアセスメントや支援を実際に行ってきた結果を報告し、受講者全員で討議することによって、実践力を養う。

【コース必修（実習）】

心理教育臨床実習

菅野 純、佐々木 和義、鈴木 伸一

教育臨床を行なっていくうえで必要とされる心理教育方法を実習を通じて学ぶことを目的とする。以下の内容とする。

①各種心理アセスメント、②構成的エンカウンター（SEG）、③カウンセリング、④グループカウンセリング、⑤認知行動療法、⑥ソーシャルスキルトレーニング、⑦アサーショントレーニング、⑧描画療法、⑨箱庭療法、⑩リラクセーション、⑪スクールソーシャルワーク

心理臨床事例実習

菅野 純、佐々木 和義、鈴木 伸一

受講生がそれぞれの場で実際にかかわっている事例を取り上げ事例研究を行なう。心理的・環境的原因によって生じる児童・生徒の教育臨床的問題と発達・障害の原因によって生じる教育臨床的問題を取り上げる。

【コース選択必修】

教育心理学特論

青柳 肇

教育心理学のうち「学習」と「発達」に関して文献講読する。文献を読み、その内容についてディスカッションを行う。

臨床認知発達学特論

佐々木 和義

学校教育において通常学級の中で活動する発達障害児に関する諸問題を取り上げ、理論的背景に関する理解を深める。特に、学習障害、広汎性発達障害（自閉性障害、アスペルガー障害）、注意欠陥／多動性障害などを中心に、認知処理の観点からの障害の理解と臨床心理学的アセスメントについて講義する。

臨床心理学特論Ⅲ

山崎 久美子

心理臨床に携わる人々が治療の場で遭遇することが多い精神障害について理解を深める。本特論では、青年期以降老年期までを取り上げる。各障害の定義・診断、特徴・症状、精神病理・性格特徴、治療や家族への対応、発症の社会文化的特徴などを学ぶ。さらに、臨床心理学の最新のトピックについて言及する。また、精神科治療学の最前線についての理解を深め、カルテに記載されるテクニカル・ターム（英・独・仏）を修得することも目指す。

特別支援教育特論

佐々木 和義

学校教育において通常学級の中で活動する発達障害児、特に、学習障害、広汎性発達障害（自閉性障害、

アスペルガー障害)、注意欠陥/多動性障害などを中心に、物理的環境調整、社会的スキルなどの適応的行動の獲得、不適応行動の調整、保護者や地域へのアプローチ、担任教諭や養護教諭や特別支援教育コーディネーターなどとの行動連携に関して実践面の理解を深める。また、生涯発達心理学的、および福祉援助的な視点からの適応行動の獲得の方法論についても学ぶ。

教育臨床査定特論

根建 金男

臨床心理学、特に行動療法や認知行動療法における査定法としての機能分析では、問題行動の形成・維持に関わる環境的要因を重視する立場から、問題行動の機能を分析し、治療法へと守備よくつなげていけるようにする。機能分析の対象には、狭義の行動だけではなく、思考や生理的反応なども含まれる。この講義では、発達障害、精神保健、行動医学など、あらゆる分野で心理臨床に従事する人たちのためにまとめられたテキストを輪読することによって、査定法としての機能分析について学ぶ。

乳幼児発達心理学特論

井原 成男

最も大きい括りでいうと、アタッチメントの発達について論じる。今年度は、これまでの研究を集大成した、移行対象から見たアタッチメントについて論じるが、常に病院での小児科臨床を念頭に置き、そこで得た知識が、学校現場ほかの他領域に、本質を変えることなくどのように応用できるか、受講生とともに考えて行きたい。

使用予定教科書:移行対象の臨床的展開—ぬいぐるみの発達心理学、岩崎学術出版社、2006年刊(教科書については、開講時に著者割引で購入できるよう配慮します。)

教育開発特論

野嶋 栄一郎

本講義は2つの柱をもつ。

その一つは教育思潮の変遷の歴史である。

今一つは教育思潮の流れに沿って開発されていった具体的な教育システム、教育評価、教育方法の歴史である。

本講ではあざなえる縄のごとくある、2つの流れを教育実践との関係の中で解説する。

発達行動学特論

根ヶ山 光一

親子関係の変化をめぐる諸問題について、動物行動学の知見もまじえつつ講じる。とくに現代社会における親子関係とその身体性に注目し、子別れの過程や、それを取り巻く哺乳類・霊長類としての生物学的要因、テクノロジーや価値観などの社会文化的要因と、その相互関連性を中心に検討する。

インストラクショナルデザイン特論

向後 千春

インストラクショナルデザインは、教育を効率よく(速く)、効果的に(深く)行うための手法を追求する学問です。そして、人間の学習についての科学と情報技術を利用した教育を指向する研究領域です。この授業では、心理学の学習理論を背景として、学校、企業、生涯教育で行われている実践をインストラクショナルデザイン的な視点から検討していきます。具体的には、グループワークの形態をとり、個々のケースを検討し、解決案を作っていきます。

学校臨床心理学特論

小林 正幸

学校心理学を理論的背景に、スクール・カウンセラーあるいは校内で教育相談推進者のレベルの力量を目指す。ある意味ではそれ以上の水準の習得を目指す。①カウンセラー、教育相談担当者、研究者としての構

え・働きかけ・姿勢を形成する。②実践に密着した題材から学ぶ。③実践的に思考し、実践的な技術を習得する、実践にかかわる体系的知識を獲得する。内容としては、現代の教育問題の中核を占める不登校問題を中心に講義する。

応用健康科学特論

竹中 晃二

従来、健康教育の研究では、ヒトの健康阻害要因の除去や制御、たとえば喫煙、飲酒、栄養(肥満)、運動不足、ストレス問題など、健康に対するネガティブな要因を別々に評価し、それらを除去したり、変容させることに注意が向けられていた。しかし、最近ではヒトの健康関連問題を「総合的」に捉えたり、健康関連問題を「行動」として扱う観点が主流を占めるようになってきた。前者の観点では、健康阻害要因のそれぞれは複雑にリンクしており、そのため総合的な健康プログラムとしてのウェルネス活動、またはヘルスプロモーション活動が注目を浴びている。たとえば、健康危険因子の評価、禁煙、血圧コントロール、運動や体力作り、体重コントロール、栄養教育、ストレス・マネジメント、腰痛予防などを一つの総合的プログラムとして扱い、健康教育と実践を一つの範疇で捉える動きである。もう一つの観点は、ヒトの健康に関わる行為を「行動」と見なし、その行動を変容させたり維持させるためにいくつかの健康行動モデルを想定し、それらのモデルによって介入を考えるという研究である。

インターネット科学特論

西村 昭治

2006年現在、4.4億台のコンピュータが接続され6.5億人のユーザがいるというインターネットはもはや単なる情報通信ネットワークにとどまらず、社会基盤あるいはそのもの自体が様々なコミュニティを生み出す場となっている。本講義ではインターネットの定義から始まり、その歴史をひもとくとともにそれを成り立たせる様々な技術の解説を試みる。また、インターネット上の様々なサービスを解説するとともに、今後の動向について考察する。

【コース選択】

家族臨床心理学特論

菅野 純

不登校やいじめ家庭内暴力など、子どもの臨床的諸問題は家族と切り離せない。本講義では家族心理学や家族療法についての最近のテーマを取り上げ、家族がかかわるさまざまな事例を検討し、教育臨床実践との関連をはかりたい。以下のテーマを行なう。

①家族臨床心理学総論、②家族の機能、③家族システム理論、④システムズ・アプローチ、⑤家族療法の理論、⑥心理教育的アプローチ、⑦家族の病理・事例検討

学校臨床生徒指導学特論

嶋田 洋徳

本特論では、学童期から思春期、青年期に至るまでに生じるさまざまな学校の内外の生徒指導(特にいわゆる生徒指導や教育相談)上の諸問題を取り上げ、それらの理解と臨床心理学的な立場からの具体的な援助の方法を概説する。また、それらの援助方法の基盤となるカウンセリングの諸理論についても概説する。さらに、スクールカウンセラーなどの相談職員との連携の具体的なあり方についても言及する。

教育集団心理学

岡安 孝弘

現代の学校においては、特に不登校やいじめへの適切な対処方法や予防的対策を講じることが急務の課題

となっている。本講義ではそれらの問題を中心に提起し、最近の実証的な研究成果を踏まえながら、より効果的な具体的な対策について解説する。また、そのような問題の背景にあると考えられる現代の子どもの社会性に焦点を当て、学校や家庭における子どもの社会性の育成方法について、行動論的観点から講義する。さらに、受講者とともに討論することを通して、子どもが充実した毎日を送ることができるような学校環境を構築するための方策について検討したい。

生徒指導・進路指導特論

浅田 匡

本講義は、学校教育の課題としての、生徒指導およびキャリア教育の視点からの進路指導について、その理念や基本的な原理および具体的な方法等について理解し、それらの指導に必要な実践的な能力を育成することが主たるねらいである。生徒指導に関しては、問題行動とその把握、カウンセリングの基本的な理解をねらいとする。進路指導に関しては、キャリア教育の視点からキャリア発達支援、進路指導の基礎理論の理解および具体的な実践の紹介を行い、進路指導の意義と具体的な方法の習得をねらいとする。

備考

通信教育課程との合併科目であるため、通信教育課程で生徒指導進路指導論の単位取得者は受講できない。

教授学習過程特論

宮崎 清孝

本科目は認知科学について、特に教授学習という面から学んでいくための授業である。認知科学に対する今日のアプローチには、その脳神経的基盤を求めるもの、認知自体を(特に神経系へのアナロジーを用いながら)モデリングしていこうとするもの、さらに認知の個人史(発達)的、歴史的成立過程を見ていこうとするものなどが存在する。この最後の立場からは、学習は認知研究の中心的問題である。認知過程の学習は個人個人を問題にするだけでは足りず、その発達を支える周りの人間、つまり社会やその文化との相互作用の中で起こる。そのような考えで研究を進めている立場を文化歴史的アプローチと呼び、ここではそれについて学ぶ。なお大学院の授業としては英語論文を読む力を養うことも重要であると考えており、そのときそのときの最新の話題も考慮しつつ英文文献を選び、講読していき、適宜講義を交える予定である。

発達科学特論

大藪 泰

他者との極めて豊かな共有世界をもつこと、それは人間の心をもつ特有な働きである。乳児と養育者が相補的に構築する共同注意(joint attention)関係は、生物としてのヒトの「ココロ」を文化化された人間の「心」に飛躍させるスプリング・ボードの一つであろう。共同注意の働きにより、多様な事物を養育者と能動的に共有しようとする人間の子どもは、文化既得者である養育者によって、人間が蓄積してきた文化すなわち集合的知の世界に導かれるからである。

この特論では、共同注意をキー・コンセプトにして、乳幼児の「自己感の発生」、「物との関わり」、「他者との関係性」、「シンボルの獲得」といった現象についての考察を試みてみたい。

福祉教育特論

前橋 明

本講では、児童を対象にした福祉教育をとりあげる。福祉教育は、将来、社会の担い手となる子どもたちが、人を人として尊び、人間一人ひとりが平等で、かつ、相互に思いやりの心で援助し合っていくという「福祉」の心を育てることを通して、福祉に対する理解と関心を深めるとともに、社会に奉仕する実践的態度の育成を図ることをねらいとする。

また、福祉教育は、子どもたちの人間性の育成に密接な関わりをもつものであるから、学校における全教育活動だけでなく、学校外における家庭や地域の全教育活動を通して行う必要性を理解する。したがって、本講

では、学校ならびに家庭や地域における福祉教育のあり方やその具体的実践について演習する。

障害者福祉特論

(奇数年度開講)

小野 充一

「障害をもつこと」を一人称あるいは二人称の立場から検討する視点と、三人称の立場から社会的に検討する視点を対比しながら、個人の「内なる障害観」が「対話の障壁」になることを学ぶこと、集団や社会における「障害観」の蓄積が、特定の社会通念として形成された場合に出現する様々な問題について概説し、次世代の社会システムを構築する条件や環境などについて多角的な検討を行う。

産業職業社会学特論

河西 宏祐

日本の雇用問題、労使関係の変化について考察する。文献や調査報告書を素材として講読し議論する。あわせて受講生の調査研究についても指導する。

知識情報科学特論

松居 辰則

この講義では、人工知能に関する基本的な理論や技術を多くの事例を通して紹介します。人工知能はコンピュータに「人間のような振る舞いをさせる」ことを目的とした、理論・技術です。講義の進め方は、数学的、技術的な話に偏ることなく、「人工知能」というものが正しくイメージできるようになることを目標とします。この講義を通して、人工知能の魅力を知ると同時に、その限界も知ることにより「人間とコンピュータの共存」というテーマについて深く考えます。

社会病理学特論

野村 忍

現代社会は、技術革新、情報化、国際化、バブルの崩壊による深刻な不況など多くの難問に直面している。こうした社会環境の中で生活する現代人は多くのストレスを経験している。ストレスの影響は、不快な危機的な情動変化とそれに伴う身体的変化とそれらを解消するための行動変化としてあらわれる。したがって、ストレス性健康障害としては、種々の心理反応、身体反応と行動上の問題に分類される。ここでは、産業ストレスの今日的課題、ストレスのアセスメント法、ストレスマネジメントの方法論について講義する。

感情心理学特論

鈴木 晶夫

感情の定義はいろいろな側面から記述できるが、「精神の働きを知・情・意に分けた時の情的過程全般を指す。情動・気分・情操などが含まれ、主体の状況や対象に対する態度あるいは価値づけをする心的過程」と考え、感情研究の歴史、感情の生物学的・神経心理学的アプローチ、感情の心理学的アプローチ、測定方法・アセスメント、感情の発達、個人差、感情表出、文化、臨床、感情障害、健康、感情に関連する社会的プロセスなど、さまざまなテーマが含まれ、その関連領域は広範に及んでいる。

この講義では、上記のテーマに関するこれまでの研究を概観し、感情研究の考え方について学ぶ。さらに研究論文などを材料に感情研究の様々な問題を考えたい。

言語教育方法特論

保崎 則雄

この授業では、まず Krashen のインプット仮説を理解し、その過程で BICS、CALP という概念をカリキュラムにどのように関連づけるのかということを探る。そして、言語教育にメディアが歴史的にどのような役割を果たして来たのかということ、1940年代米国で開発された Language Lab に始まって、現代の CALL、遠隔教育、online 教育の事例とともに理解、評価する。主に扱う言語教育は、2007年度は、一応 TESOL、TEFL、JASL、JAFLL である。合わせて、言語教育における、状況的学習とフィールドトリップの機能、メディア利用の教育の効

果と効率、ティームティーチングの課題、教員養成・研修における教材開発などについても、受講生の人数を鑑み、扱う予定である。輪読する雑誌は、言語教育、TESOL Quarterly、Language Laboratory を中心とする。

言語情報科学特論

菊池 英明

言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。この講義では、コンピュータ・情報処理技術を導入した音声言語理解・生成・インタラクションのモデル化及びシステム開発の事例を紹介する。

児童家庭福祉特論

川名 はつ子

少子高齢社会の脅威を強調した社会防衛のための少子化対策を超えて、誰もが人間らしい生き方を追求できるように、子どもと家庭の側から「よりよく生きること」を考えたい。児童家庭福祉を専攻しない院生の受講も考慮し、この分野を網羅しながら刺激的問題提起を含む教科書を選定する予定である(具体的な書名は、開講時に提示する)。「子どもとは何か」「女性の権利と子どもの権利」などの問題意識を念頭におき、トピックスや事例をまじえた講義とする。

生体機能学特論

(奇数年度開講)

今泉 和彦

本特論では、以下の最近のトピックスについて講義する。

- 1) 飲酒(アルコール摂取)と生体機能との関連(1)
- 2) 飲酒(アルコール摂取)と生体機能との関連(2)
- 3) 飲酒(アルコール摂取)と生体機能との関連(3)
- 4) 茶カテキン摂取による生体機能との関連(1)
- 5) 茶カテキン摂取による生体機能との関連(2)
- 6) ドーピング作動薬と生体機能との関連(1)
- 7) ドーピング作動薬と生体機能との関連(2)
- 8) 亜鉛欠乏と生体機能との関連(1)
- 9) 亜鉛欠乏と生体機能との関連(2)
- 10) 鉄欠乏と生体機能との関連
- 11) 香辛料(特にトウガラシ成分)摂取と生体機能との関連
- 12) 骨格筋の可塑性(肥大・萎縮)とその調節(1)
- 13) 骨格筋の可塑性(肥大・萎縮)とその調節(2)
- 14) 最近の研究成果の紹介

－博士後期課程－

【研究指導】

[地域・地球環境科学研究領域]

環境管理計画学研究指導

天野 正博

地球環境問題の構造を分析することによりドライビングファクターを明らかにし、その解決に向けた方策提案

に関する研究を実施する。とくに地球温暖化と森林の関連、熱帯林減少問題について調査や得られたデータの分析を行うとともに、問題を引き起こしている社会経済環境についても明らかにし、問題解決に向けた方策を提示するための研究を進めている。研究指導においては、こうした研究に関連したテーマを設定し、共同研究の形で指導を行う。

人口学研究指導

阿藤 誠

人口研究分野のなかで各自が選んだ研究課題について各自の研究計画に基づき、研究指導スケジュールを立て、博士論文の作成につなげていく。

環境生態学研究指導

森川 靖

環境は生態系に影響を与えるが生態系もまた環境に影響を与える。こうした環境と生態系との関係を、地球的規模で起こっている環境変動の視点から解析する。解析には生態系の諸機能の知識及び測定・解析手法の習熟が重要で、これらの基盤的研究から環境問題の解決に資する研究を進める。

環境社会学研究指導

鳥越 皓之

環境社会学・環境民俗学分野の博士論文作成のための指導を目的とする。当該分野の方法論の検討、現代社会との関わり等についても分析を深めることになろう。

[人間行動・環境科学研究領域]

発達行動学研究指導

根ヶ山 光一

各自の研究テーマについて、研究計画(いかなる課題に焦点化し、そこに他の先行研究と差違化していかにか originality を盛り込むか、どう仮説を立てそれをどういう手法によって明らかにするか)・実施(フィールドや実験場をどう確保し、具体的な手続きをどうするか)・分析(どのような分析手法を用いて、どのように結果をまとめるか)・考察(データと仮説・先行研究をつきあわせ、整合性のある議論をどう行うか)・発表(研究成果をどうまとめ、口頭もしくは論文で発表するか)の指導を行うとともに、博士論文の執筆を指導する。

[文化・社会環境科学研究領域]

産業職業社会学研究指導

河西 宏祐

産業社会学、職業社会学の分野における研究テーマ(仕事、職業、日本的経営、人事管理、労使関係、労働組合など)についての文献を講読するとともに、産業職業の領域、とくに日本の労使関係に関する各自の設定した研究課題について、実証的研究を実施し、その理論化を行う。それを通して論文の作成を行う。

文化生態学研究指導

蔵持 不三也

この研究指導では、受講生の研究テーマの展開を促すための助言とともに、論文作成のための実践的な手法を教授する。そのため、受講生は研究発表を義務づけられる。

アジア社会論研究指導

店田 廣文

中東・北アフリカ、アジアおよび日本の都市社会を主たる対象に、各自の研究課題に即して、実証的な比較研究を実施する。とりわけ「近代」以降の都市社会の歴史的な社会変動も視野におさめつつ、比較研究の指導

をおこなう。研究課題は、都市化や都市成長などの都市社会研究に限定しておらず、少子高齢化、家族の変容、開発協力、移民や人口政策、イスラーム化など、発展途上社会の多様な研究課題が指導の対象となる。また、諸外国を対象とする調査研究については、積極的に現地留学などの機会を得るようにさせている。

移住論研究指導

森本 豊富

日本及び海外の移住に関する動向を踏まえ、個々の研究課題に即して指導する。国内外の関連学会での発表や執筆活動を重ねながら、移住に関する学問分野において独創的かつ貢献度の高い博士論文の執筆を目指す。

【健康・生命医科学研究領域】

生体発達科学研究指導

木村 一郎

細胞の増殖、分化、形態形成を制御している様々な要因について研究する。特に、細胞培養系を用いて骨格筋前駆細胞の分化過程の制御機構、とりわけ、成長因子などの液性因子の作用を中心に研究する。主な研究課題は、体節の筋原細胞や成体の筋衛星細胞の増殖、分化、細胞移動等の制御機構、筋細胞の死と再生の制御機構、筋前駆細胞における細胞融合の制御機構など。原則として、修士課程の研究指導と同内容のものをより高度に発展させる。

生体構造学研究指導

小室 輝昌

末梢神経系終末部とその支配領域の構造について、主として電子顕微鏡的手法、免疫組織化学的手法等を使って明らかにし、各組織、器官における神経性調節機構について理解をすすめる。現在は、自律神経系末梢部の構造について、特に意を注いでいる。

生体機能学研究指導

今泉 和彦

骨格筋の可塑性(肥大・萎縮)とその調節機構、微量元素(亜鉛・鉄)欠乏による遺伝子発現および生体情報伝達シグナル応答とその機構、ドーピング作動薬(β_2 -アゴニスト)・茶カテキン・アルコール・香辛料摂取による代謝応答とその調節機構を明らかにするため、主として動物実験を中心として研究する。これらの研究を推進すると共に、日々の研究、論文の検索・読み方、実験法の測定・解析の習得および研究発表・論文の書き方・纏め方などについて直接指導・助言する。このような能力を涵養することによって健康と生体機能に関わる生理科学分野を発展させ、広い視野に立って深い専門性を活かせる人材の育成を目指す。

神経内分泌学研究指導

山内 兄人

修士課程と同様に、ラットの脳における生理現象および行動の制御機構を神経内分泌学、神経組織化学、神経解剖学、および神経行動学的手法により解析し、また、脳の性差および、その機序を明らかにする。生殖機能に関しては特にセロトニン神経系に着目している。国際誌に掲載できる研究を行う。

運動制御・バイオメカニクス研究指導

鈴木 秀次

学部および大学院修士レベルにおける運動制御とバイオメカニクスをベースとして、より高度な身体運動の仕組みの研究を実施するための研究指導を行う。よって研究指導内容は、1)筋の収縮様式とそれらの神経制御機序、2)姿勢維持や運動時の脊髄レベルにおける反射の関与、3)筋収縮後の短期可塑性、4)ロコモーション等における身体運動時の力の物理的特性と神経筋協応能などのテーマが中心である。これらの研究を推進

し博士論文を完成させるためのレベルの高い指導・助言を行う。

統合生理学研究指導

永島 計

恒常性の維持、体温、体液をキーワードに研究を遂行し、主に生理学、神経科学の研究方法を習得する。また学会発表、論文発表を行い、生理科学者として独立して研究を遂行する知識、能力、意欲を獲得することを目標にする。

応用健康科学研究指導

竹中 晃二

ヒトの自発的身体操作に関わる身体活動全般(リラクゼーション、趣味活動、運動、スポーツ)を研究材料として、それらの社会・心理学的効果を行動科学の視点に基づいて研究を行う。子どもから中高年、高齢者を対象として、身体活動を用いたストレス関連指標の改善効果を様々な視点で検討し、また身体活動・運動の継続を促す介入効果についても研究を行う。

[健康福祉科学研究領域]

支援工学研究指導

山内 繁

障害モデルが医学モデルから社会モデル、統合モデルへと転換してゆく中で、障害者・高齢者のための支援機器の役割は、従来の機能障害の補償から使用者の QOL と尊厳へと転換しつつある。「QOL と尊厳」という従来の工学の方法論には含まれていない価値にどう接近し、これを推進するかが基本的な問題意識である。この転換を、使用者と福祉機器との関係にとどまらず、環境・社会システムをも包含したものとしてとらえたい。この立場から解決すべき問題に取り組み、今後の支援工学のあり方を追求する。

予防医学研究指導

町田 和彦

21世紀の日本は人類がかつて経験しなかったほどの急速な高齢化社会と様々な要因による地球環境の悪化が現実のものとなることが予想される。そのため、予防医学では人間をとりまく各種外部要因(汚染物質、栄養、運動、ストレス等)と我々の生命を維持する内部環境との関係を血清疫学的手法と生体防御機構である貧食・殺菌能、非特異、特異免疫能の測定等の生化学的手法を用いて明らかにすること、超高齢社会をひかえ健康で生きがいのある人生をおくることができるように個人の自立と健康増進を柱とした健康福祉医療政策を研究指導の主体とする。また、地球環境問題のような大学内での研究では難しいテーマについては、他の国立研究機関との共同研究も可能である。

[臨床心理学研究領域]

心身医学研究指導

野村 忍

博士論文作成の指導(グループ指導ならびに個人指導)を行う。各自の研究計画書に基づき、研究指導スケジュールを立て、研究計画の実践、論文作成まで指導する。また、各学会発表や論文投稿についても指導する。

認知行動カウンセリング学研究指導

根建 金男

認知行動カウンセリングは、従来の行動カウンセリングと認知的アプローチが融合して形成された比較的新しいアプローチである。近年は、認知行動カウンセリングを支える認知行動理論の発展もめざましい。特に、不安

障害、強迫性障害、統合失調症などの新しいモデルが提示され、それらをめぐる実証研究も盛んである。一方、構成主義的認知行動カウンセリングの動向も活発になってきた。構成主義では、人の一生涯の成長を視野にいたうえて、人が世界をどう構成(認識)しているかをその人の側から理解し、アプローチしようとする。この考え方は、エビデンス重視の認知行動カウンセリングの弱点を補い発展させるうえで重要である。カウンセリングは精神疾患を有する人に限らず健常者をも広く対象とするものであることを認識したうえで、認知行動カウンセリング学を更に発展させるような研究を進めていくことが求められる。そのような研究について、この研究指導では、研究計画の立案、研究の実施、データの解析、論文の作成など博士論文の執筆に関する全般にわたって、指導(個人単位、グループ単位)を行う。また必要に応じて、学会発表や投稿論文について指導する。

行動臨床心理学研究指導

嶋田 洋徳

臨床心理学におけるさまざまな問題に対して、(認知)行動論的アプローチを用いて研究と実践を行なう。具体的には、行動療法、認知行動療法の観点から理解される症状や問題行動の理論モデルの検討、治療モデルの検討、症状や問題行動の形成と維持、治療に及ぼす個人差変数の検討などを行なう。そして、博士論文の作成を念頭に置き、研究計画の立案、データの収集と解析、論文の執筆、研究成果の公表に関する指導を行なう。

[感性認知情報システム研究領域]

感性認知科学研究指導

齋藤 美穂

日本語の「感性」は今や国際語“Kansei”として認知されつつあるが、感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究方法も多岐にわたる。この研究指導では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当て、具体的研究として色彩やデザインの認知およびその利用方法、さらにそれらの嗜好に対する文化的差異を切り口とした研究を主たるテーマとして感性を検討し指導する。ノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知や感性的な側面を十分に検討する事は重要なテーマとなる。また特に文化的差異を視野に入れる事は、グローバルな視点で感性を捉えなければならないマーケティング戦略には、これからますます必要になると考えられる。これらの研究テーマ(より詳細な研究テーマは「感性認知科学演習(1)」および「感性認知科学演習(2)」を参照)に沿って吟味された各人の研究について、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね、さらに学会発表や投稿論文に対する助言と指導、学位論文に対する直接的な指導を行っていく。

安全人間工学研究指導

石田 敏郎

安全人間工学は、種々のシステムや環境における精神的、身体的作業を行う際の人間の役割、能力および限界を研究し、安全に作業を遂行するための方策を探る研究分野である。最近、新しい技術の発展やシステムの巨大化に伴い、人間のエラーによる事故や不具合が多く発生している。認知科学的なアプローチにより、事故・不具合の原因を探り、人間行動に適合した対策を策定し、提案することを中心に指導する。そのため、認知心理学的なヒューマンエラーの考え方と人間工学的な事故分析の方法についての研究指導を行い、そこから導き出されるヒューマンエラー防止対策について検討する。また、実験的手法により人間の安全行動を評価する方法論を同時に指導し、科学論文を作成する際の技法を習得させる。現在の主な研究テーマは、事故分析方法の研究開発、自動車運転時の視覚情報処理および事故要因の検討、リスク行動の分析および各種ヒューマン・インターフェイスの人間工学的評価である。

福祉工学研究指導

藤本 浩志

広義の福祉工学の研究対象として、広くヒューマンインターフェースを考え、ヒトの様々な機能の解明を目指す。感覚機能に関しては、特に皮膚感覚に着目してその機能の定量的な評価を試みる。他方、運動機能に関しては特に下肢による移動機能に着目する。これらの基礎的な研究によって得られた知見に基づき、健常者をも含めたユニバーサルデザインのコンセプトの具現化を目指す。また狭義の福祉機器である障害者のための自立支援機器の開発を行う。研究指導においては、個々のテーマごとに目的設定、アプローチの考案と選択の方法論を具体的に助言指導する。

システム人間科学研究指導

戸川 達男

人間理解にいたる道筋を学ぶことにより、心身問題、意識、言語、自己概念、文化、生き方の問題など多くの未解決の問題があることを知る。そこで博士後期課程では、これらの困難な問題へのチャレンジをうながし、自分で問題を設定し、解決手段を工夫するように指導する。心を持つシステムを実現しようとするような大胆な取り組みも最大限に許容する。成果の有無ではなく、たとえ期待した結果が得られなくても、その取り組みのユニークさが評価されるような研究態度を育てる。

情報処理心理学研究指導

中島 義明

主観主義パラダイムと客観主義パラダイムとの間での往復運動の中で、一つ止揚された弁証法的発展のプロセスの結果として誕生した認知心理学の視座よりさまざまな情報処理に関する問題を取り上げ、これらを実証的に研究する。例えば、処理資源、ワーキングメモリ、プライミング効果、認知地図、スキーマといったような現象に関連した問題の切り出しを行う。これらの研究を進める際には、これまでの理論モデルをより精緻化することを目指すだけでなく、現代の生活世界の中で直面する関連した諸問題の解決をも十分に志向する。本研究指導の過程を経て、博士学位論文作成へと導く。

心理行動学研究指導

鈴木 晶夫

人間を研究する際の視点として、認知的、行動的、生理的側面が考えられ、それぞれを単独に研究することもできるが、その相互作用も重要である。特に、行動的側面と心理的側面との関係、身体と精神の相互作用を中心に、健康、感情、言語的・非言語的情報の機能、人間関係、生活習慣、東洋的思想からの健康観、身体観などの軸を考慮した研究をテーマとしたい。

各自の研究テーマ、研究計画に基づいて、その内容(研究史、目的、仮説、方法、分析、考察)についての指導とともに、博士論文の執筆を指導する。その基盤ともなる学会発表や論文投稿についても指導する。

【教育コミュニケーション情報科学研究領域】

情報コミュニケーション科学研究指導

金子 孝夫

音声、画像、データなどのマルチメディアによる情報コミュニケーション科学の研究手法について、実験と研究動向の調査などの研究指導を行う。具体的には、デジタル情報処理、デジタルデータ伝送、コンピュータによるデータ入出力、ヒューマンインタフェースなどの情報コミュニケーション科学研究のための技術を調査研究の対象とする。

ネットワーク情報システム学研究指導

金 群

技術の進展に対応できる柔軟性や突発的な障害に対する高信頼性など、より広い視野からネットワーク情報

システムを見通した基礎的研究、ならびに、ネットワーク情報システムの一層の高度化をめざした理論と応用の両面にわたる研究を行う。

ネットワーク情報システムはとくに人間の知的活動とのつながりが深いことから、情報・ネットワーク・情報システムに関する科学を学際的観点からとらえ、人間とネットワーク情報システムとの関わり合いを重視しながら、総合的かつ体系的な構築方法論を探究する。

それらを通して、専門分野における深い学識と思考力をもち、新しい学問の芽を育てることができるような、創造性の豊かな研究者を育成する。

教育情報工学研究指導

永岡 慶三

修士課程での教育情報工学研究の発展として、特定研究領域の研究動向の把握、論文や報告書の肯定的・批判的解釈のしかた、独創的な課題設定や問題発見・解決の方法論について指導する。さらに研究費管理、後輩指導、研究遂行上の関係者とのコラボレーションの実際について具体的な行動目標を設定してシミュレーション形式の指導を行う。さらに研究成果をまとめ、実際に査読制度の整備された日本教育工学会などの国内学会あるいは国際学会への学術論文投稿を目標とする指導を行う。

教育開発論研究指導

野嶋 栄一郎

教員、学生双方による各自の最新の研究成果の報告とそれに関わる質疑応答。並びに学位論文完成に向けてのモニタリング。主な研究課題は、1) 教授＝学習過程における測定・評価の研究、2) 新しい学校モデルとその評価研究、3) インターネット利用による日米の異文化間交流カリキュラムの実践と評価、4) 映像情報の処理過程と認知研究、5) 授業のデジタルアーカイブの開発とそれを利用した授業モデルの開発・評価。
Keywords: 教育測定、教育評価、教授＝学習過程、新しい学校モデル、インターカルチュラルコミュニケーション、認知過程、カリキュラム、アクションリサーチ、授業アーカイブ、遠隔教育

2005年度以前入学者対象科目

－修士課程－

【研究指導】

【スポーツ科学研究領域】

武道論研究指導

志々田 文明

日本武道は一般に競技性、求道性、規範的教育性の要素が含まれ、特に後の二点は近代の競技スポーツと性格を異にする特徴をなしている。それは、武術を学ぶことを必須の教養とした武士が700年にわたって日本の政権を担い、武士の規範(いわゆる武士道)を形成した歴史に由来する。このコースでは、その武道が国際的に広く普及しつつある実態を踏まえて、主として教育的な観点から、武道の独自性、普遍性、文化変容、可能性(あり方)について、文献に基づいて考察する。

扱う文献については、近世の柔術、剣術その他の伝書、近現代の各種武道関係書、内容的には技法論、心法論、養生論、武士論など多様なものを用意しているが、受講者の関心と専門に配慮して、教材を選定してい

くことになる。また特に、受講者がその研究を絶えず論文化し、研究者・教育者として自立するようエンカレッジしていきたい。

Keywords: 武道、武士、武士道、国際化、文化変容、思想史

スポーツ人類学研究指導

寒川 恒夫

スポーツ人類学はスポーツ科学と文化人類学に籍を置く境界分野である。このためスポーツ科学の(特に人文社会科学系)諸概念と文化人類学の諸概念の理解の上に研究が展開されることになる。これまでに公にされているスポーツ人類学関連諸文献について、そこに示された理論モデルを上記諸概念との関わりの中で理解していく。

スポーツ倫理学・教育学研究指導

友添 秀則

現代スポーツは勝利至上主義、ドーピング、過剰な商業主義、スポーツ・イベントのメガ化による環境破壊等に代表されるように、多様な倫理的アポリア(難問)を内包し、様々な局面でスポーツの倫理的な逸脱現象が頻出している。本研究指導では、このような現代スポーツにおける倫理的逸脱現象を対象に、応用倫理的な考察を加え、スポーツ文化のあるべき存立基盤を解明していく。と同時に、スポーツ文化による人間の陶冶可能性についても、人格教育論を中心に考察し、スポーツ教育における社会学習の方法論についても指導する。

スポーツメディア論研究指導

リー トンプソン

メディアとはコミュニケーションの媒体となるものであるが、とくにマスコミュニケーションの手段であるテレビ、ラジオ、新聞などのマスメディアをいうことが多い。マスメディア研究には大きく分ければ制作、内容、オーディエンスという3つの領域がある。スポーツメディア論では、少なくとも一つの領域からスポーツとメディアの関係を取り上げる。スポーツメディア論演習(1)(2)での勉強を踏まえて、各自の研究計画に基づいて、修士論文作成の指導を行う。社会学の立場から指導する。

健康スポーツ論研究指導

中村 好男

本研究指導では、「スポーツを通じた健康増進」という社会的ニーズに応えるために、体力科学、運動生理学、栄養学などの<身体の理論>から、行動科学、社会マーケティングといった<行動の理論>、さらには、ビジネスマネジメント、マーケティングなどの<社会組織の理論>まで、様々な領域における基礎学問分野の知見を踏まえて、「地域住民へのスポーツ振興」ならびに「健康増進の達成」という目標を実現するための実践的技法を確立することを目指している。具体的には、地域自治体、総合型地域スポーツクラブ、老人福祉施設等のさまざまな現場(フィールド)での実践的研究によって、医療費削減や介護予防に資するためのプログラムの開発とその評価モデルの構築に加えて、地域社会における健康増進ならびに介護予防システムの構築を行う。主な研究課題は、1)健康増進を目標とする運動やスポーツの振興と奨励の手法開発と評価、2)ウォーキングプログラムの開発と指導、3)介護予防のための筋力向上トレーニングプログラムの開発と実践活用、4)スポーツビジネスの活性化とスポーツ振興、5)総合型地域スポーツクラブの運営と地域スポーツ指導者の育成などがある。

スポーツビジネスマネジメント論研究指導

原田 宗彦

スポーツにおける権利ビジネスの発展は、スポーツのメディア価値を増大させ、従来のスポーツ産業の構造を大きく進化させた。研究指導においては、スポーツビジネスのマクロ的視点として「スポーツと地域イノベーション」に関する研究、ミクロ的視点では「スポーツ消費者の行動学的分析」に関する研究をメインテーマとする。

前者では、スポーツ振興モデルを応用した政策提言的研究やスポーツイベントの経済効果に関する研究、後者ではプロスポーツにおけるファンのチーム・ロイヤルティに関する研究や、スポーツ・フィットネス産業における経験マーケティングに関する研究の指導を含む。

運動免疫学研究指導

赤間 高雄

運動による免疫機能の変化、すなわち、適度な運動による免疫機能の向上と過剰な運動による免疫機能の抑制について、そのメカニズムを検討し、スポーツ現場への応用を研究する。高齢者の免疫機能を高める運動処方や競技スポーツ選手のコンディショニングにおける免疫指標の応用、などの分野で各自が設定したテーマについて研究計画、実施、論文作成を指導する。

スポーツ神経精神医科学研究指導

内田 直

スポーツと中枢神経系の関わりを研究対象として、研究指導を行う。具体的な内容としては、睡眠覚醒や生体リズムとスポーツパフォーマンスの関連、身体運動が脳や心の働きに与える影響(たとえば運動によるうつ状態の改善、集中力などの改善等)、スポーツパフォーマンスに関連した脳機能などである。方法としては、ポリグラフ検査、MRI 検査、行動学的方法、疫学的方法などを用いる。これらについて、研究計画のたて方、実験や調査研究の実施法、データの解析法、データの解釈などについて、総合的に学習する。

身体形態学研究指導

加藤 清忠

スポーツ活動や筋力トレーニングなどに関連して身体の解剖学的・生体学的分野に関する内外の情報を幅広く収集して、十分にその内容に対する理解を深めていくことである。したがって、研究テーマは身体の形態的・機能的な総合的分析研究とも言えるが、形態的にはモアレトポグラフィー・生体計測・体組成分析・体型分析などの分析方法を、機能的には精密機器による筋力・パワーなどの測定法を用いて解析する。また生体内の筋・骨・皮下組織の分析には、超音波検査装置や MRI などの最新の分析機器を導入して行なうことになる。研究は総合的・多角的な方向性を目指すので、各自が自分のテーマを探究しながら、その実践的な研究法を如何にして計画・実施するかについて理解を深めることが重要である。本研究指導における基本的な研究テーマとしては、スポーツマン体型の比較研究、高身長者の生体計測学的研究、競技者の筋力発揮と筋組織の関連性分析、筋力トレーニング運動の効果筋の分析、中高年者の筋力トレーニングによる筋力と筋組織に対する影響などを挙げることができる。

スポーツ健康管理学研究指導

坂本 静男

スポーツには生活習慣病に対する効果などがある反面、突然死や熱中症といった急性内科的障害、貧血やオーバートレーニング症候群といった慢性内科的障害のあることを、これまでに報告されている論文や最新の研究報告等を抄読することにより、理解してもらう。それとともに、スポーツの効果を判定するための検査法や、内科的異常を診断する検査法などに関して、医師でもある大学院教員の指導下に体得してもらう。つまり運動負荷試験、心エコー図検査、ホルター心電図検査などを駆使したメディカルチェックの重要性を多方面から理解してもらう様な、体験学習的な講義を行うことになる。

運動器スポーツ医学研究指導

鳥居 俊

少子・高齢社会の到来によりスポーツや身体活動に関わる医学研究は競技選手のみならず、全ての国民に対して貢献することが期待される。競技選手のスポーツ外傷・障害の発生メカニズムや予防に関して、スポーツ動作の解析より動作時の運動器への負荷を推測する方法、負荷の加わった運動器の組織変化を実験動物に

おいてモデル化する方法などを研究するとともに、障害発生初期に検知される生体情報による早期発見方法を考案する。また、変形性関節症や骨粗鬆症など運動器の退行性疾患に対する予防や治療のための運動療法の開発を行う。身体運動が運動器の退行変化を抑制するメカニズムに関する研究も実施する。

スポーツ外科学研究指導

福林 徹

スポーツ科学者やコーチ、トレーナーなどに要求される外科領域でのスポーツ医学の諸問題についての研究指導を行う。具体的には、人体の部位別機能解剖とそれに基づいた評価法、スポーツによって生じる代表的な外傷・障害の診断と現場での処置、最新の治療法、およびスポーツ復帰までのリハビリテーション法について研究指導する。スポーツの種目別特性を加味しながら、最新の治療器や治療法、近年のこの分野での研究の動向について指導し、修士課程での研究のベースになるようにする。

スポーツ神経科学研究指導

彼末 一之

運動や各種動作は骨格筋の収縮によって発現するが、それを目的に合致したものとするためには、中枢神経から目的に応じた運動指令を発するとともに、運動の結果が中枢神経系にフィードバックされることが必要である。また、ある動作を繰り返し行うことで、その動作の学習と上達をもたらされる。このような運動・スポーツにおける神経調節機構についてヒトでいろいろな実験を行って解析する方法を学び、設定したテーマについて研究する。

生体ダイナミクス研究指導

川上 泰雄

人間を対象とした生体計測に関する研究を指導する。特に、骨格筋・腱の形態的特性と機能的特性に関する研究を中心に行う。人体筋の非侵襲的な可視化および収縮の定量化に関して、超音波やMRI等の画像解析の手法などを用いる。研究テーマの主軸は〈1〉人体筋のメカニクス、〈2〉筋特性の個人差と適応性、の2点である。〈1〉については、人体筋腱複合体を筋組織(筋線維)と腱組織に分け、それぞれの特性(筋特性、腱特性)を人間生体について定量化し、筋線維と腱組織との間の相互作用や身体運動における両者の協調について調べる。〈2〉については、筋特性の個人差と適応性に関して、体肢の筋群の筋量および筋形状の横断的・縦断的計測を行う。

運動栄養学研究指導

鈴木 正成

スポーツの基礎体力づくりには筋肉たん白質合成促進が必須である。また、スポーツのスタミナを高めるために、筋肉細胞内に脂肪を蓄積することが有効だと考えられる。レジスタンストレーニングと高たん白質スナックの組み合わせの筋肉づくり効果、および筋肉に脂肪を蓄積する栄養法について研究指導する。

運動生化学研究指導

樋口 満

一過性運動、及びトレーニングによる体内の糖、脂質を中心とするエネルギー代謝的適応に関し、生化学的視点から講義し、議論する。とくに、トレーニングによる骨格筋におけるミトコンドリアのエネルギー代謝的適応、及び糖代謝機能の適応的变化など、基礎運動生化学的研究に関し紹介する。

バイオメカニクス研究指導

福永 哲夫

ヒトの身体運動を引き起こす筋-腱複合体の構造的機能的特性を様々な角度から明らかにするとともに、発育発達、トレーニング、不活動、宇宙などの生活環境と身体運動との関係を実験的に明らかにする事を研究の目的とする。修士論文作成に関しての様々な研究方法について指導する。

スポーツ生理学研究指導

村岡 功

スポーツ生理学は各種スポーツ活動に対する生理的な応答と適応を探求する学問であるが、本格的に研究がなされるようになったのはたかだか60年前からである。しかし、近年に至って、運動不足に対する危機感から規則的なスポーツおよび身体運動が推奨されるとともに、一流競技者を育成するための科学的なバックアップが求められるようになったことなどを背景として、この分野は広く社会から注目を浴びるようになってきた。そして、これらのことと連動して、研究面でも著しい進歩がみられている。ここでは、主にエネルギー代謝に関連する領域を中心テーマとして、スポーツや身体運動による健康づくりおよび各種スポーツにおける選手育成の観点から、最近の知見に基づいて研究指導を行う。

【演習】

【スポーツ科学研究領域】

武道論演習（1）

志々田 文明

近代の武道教育に直接的また間接的に大きな影響を与えたのは江戸・近世の武芸思想であり、現代の武道を考えるためには近世武道伝書の学習は欠かせない。この演習では主に、近世武士や知識人の武芸観や（武）士道論を、彼らが著した伝書を通して検討する。また、空手等のように近代以降に発生した武道については近代の著作について検討する。さらに、必要に応じて、研究方法論及び武道論に関する学術論文及び学術書を講読する。以上は古典学習であるが、この演習ではさらに、学習内容を論文化して学会で発表し、学術論文を作成するよう指導している。

なお、テキストはこれまでの学習史、受講者の専門・関心を鑑みて決定される。最近2年間には、起倒流柔術関係伝書、古典『中庸』、士道論伝書（武士訓）、社会科学の方法（マックス・ウェーヴァー）、養生書・健康法（夜船閑話）、『英語論文によく使う表現』などが扱われた。

武道論演習（2）

志々田 文明

この演習では、原則として演習（1）と重複しない内容の伝書や論文等をテキストとして扱う。たとえば演習（1）で剣術伝書が扱われていた場合は剣術以外の伝書を扱うことになる。テキストは受講者の専門・関心を鑑みて決定される。最近2年間には、起倒流柔術関係伝書（天巻、地巻、性鏡の巻、燈下問答、登飯集、柔道雨中問答など）、剣術伝書（兵法家伝書）などが扱われた。以上は古典学習であるが、この演習でも、学習内容を論文化して学会で発表し、学術論文を作成するよう指導している。

学問は積み重ねであり、こつこつと読み続けることで初めて当初難解であった文献がすらすら読めるようになる。また、“The Devil is in the details.”といわれるように、小さな疑問をおろそかにすることなく、徹底した理解を追求することが大切である。演習（2）は（1）と継続することによって倍の効果を発揮するであろう。

スポーツ人類学演習（1）

寒川 恒夫

スポーツ人類学は、人間行動の重要な一領域を成すスポーツ（あるいは遊び）を、文化の視点から研究する分野である。演習は、民族スポーツ（民族遊戯）に関する文化人類学的研究論文の講読・討論とフィールドワークとによって進められる。民族スポーツ（民族遊戯）研究の理論モデル理解に重きを置くため、地域と民族は特定しない。

スポーツ人類学演習（2）

寒川 恒夫

演習(1)の基礎に立って各受講者は地域あるいは民族を特定し、そこに展開する民族スポーツ(民族遊戯)の文化研究テーマを設定する。演習は、設定したテーマに沿って各受講者が研究発表をおこない、これについて討論する形で進められる。フィールドワークは演習(1)同様、続けられる。

スポーツ倫理学・教育学演習（1）

友添 秀則

スポーツと人格陶冶に関する内外の基礎的文献について講読する。

スポーツ倫理学・教育学演習（2）

友添 秀則

演習(1)に続いて、スポーツと人格陶冶に関する内外の文献を講読する。2年次の履習を原則とする。

スポーツメディア論演習（1）

リー トンプソン

スポーツとメディアを取り上げる文献を読むことによって、その関係の理解を深める。研究の課題、主流理論、研究方法などを学ぶことによって、自らの研究の参考にする。全員で共通な文献を読み、ディスカッションする。(1)では日本語の文献を取り上げる。

スポーツメディア論演習（2）

リー トンプソン

スポーツとメディアを取り上げる文献を読むことによって、その関係の理解を深める。研究の課題、主流理論、研究方法などを学ぶことによって、自らの研究の参考にする。全員で共通な文献を読み、ディスカッションする。(2)では英文の文献を取り上げる。今考えているのは David Rowe, *Sport, Culture and the Media* (second edition), Open University Press, 2004.

健康スポーツ論演習（1）

中村 好男

本授業では、「スポーツを通じた健康増進」という社会的ニーズに応えるために、体力科学、運動生理学、栄養学などの<身体の理論>から、行動科学、社会マーケティングといった<行動の理論>、さらには、ビジネスマネジメント、マーケティングなどの<社会組織の理論>にわたるまで、様々な領域における基礎学問分野の知見を学習する。

健康スポーツ論演習（2）

中村 好男

本授業では、健康スポーツ論演習(1)での学習を踏まえて、「地域住民へのスポーツ振興」ならびに「健康増進の達成」という目標を実現するための実践的技法を確立することを目指す。具体的には、地域自治体、総合型地域スポーツクラブ、老人福祉施設等のさまざまな現場(フィールド)での実践的研究を行い、医療費削減や介護予防に資するためのプログラムの開発とその評価モデルの構築に加えて、地域社会における健康増進ならびに介護予防システムの構築を行う。

スポーツビジネスマネジメント論演習（1）

原田 宗彦

スポーツビジネスを取り巻く社会経済環境の把握と分析に取り組むとともに、クラブ事業やリーグ経営における価値創造と集客のためのマーケティングを、先行研究や先進的事例の中から学ぶとともに理論化を試みる。演習(1)は、原則として1年生の授業とする。

スポーツビジネスマネジメント論演習（2）

原田 宗彦

スポーツクラブやプロリーグの経営的課題に取り組むとともに、スポーツベンチャーの起業に必要な種々のビジネスモデルの構築と可能性について検証する。演習(2)は、原則として2年生の授業とする。

運動免疫学演習（1）

赤間 高雄

運動による免疫機能の変化のメカニズムを検討するために、免疫学の最新の知見を整理して理解することを目的にする。免疫学に関する書籍や論文を分担講読して、相互に討論する。

運動免疫学演習（2）

赤間 高雄

運動免疫学における各自の研究テーマに関して、研究目的、研究方法、結果と考察、関連した先行研究について発表し、相互に討論する。これによって、より質の高い研究をめざす。

スポーツ神経精神医科学演習（1）

内田 直

スポーツと中枢神経系の関わり、特に睡眠覚醒や生体リズムとスポーツパフォーマンスの関連、身体運動が脳や心の働きに与える影響(たとえば運動によるうつ状態の改善、集中力などの改善等)、スポーツパフォーマンスに関連した脳機能などについて、文献抄読を行う。

スポーツ神経精神医科学演習（2）

内田 直

スポーツと中枢神経系の関わり、特に睡眠覚醒や生体リズムとスポーツパフォーマンスの関連、身体運動が脳や心の働きに与える影響(たとえば運動によるうつ状態の改善、集中力などの改善等)、スポーツパフォーマンスに関連した脳機能などについて、文献抄読を行う。

身体形態学演習（1）

加藤 清忠

基本的には身体の構造に関する基礎知識と筋力トレーニングの基礎理論を学びながら、人体の形態と機能の関連性に対する理解を深めることである。生体計測、体組成分析、体型測定、一般的体力測定、筋力・パワー測定などの実習とともに、筋力トレーニングの実践方法(特にフリーウェイトトレーニングとマシントレーニング)を実習する。またトレーニング実習に関連して適時生体観察を実施し、身体各部位の骨と筋の位置関係および、特に各関節を動かす筋の形態や機能とトレーニング種目との関連に対する理解を深める。

身体形態学演習（2）

加藤 清忠

身体形態学演習(1)の基本的事項を深めることであるが、身体の構造に対する理解を深めるために、特に運動器官系の解剖学をテキストや映像を通じて学ぶとともに、さらに死体標本による人体の解剖学実習を行う。一方では、身体の形態および機能(特に筋力とパワー)や筋力トレーニングに関して、従来の非常に重要な研究報告と最近の英米研究誌の文献講読を通じて研究論文に対する基本的な理解を深める。そして各自の研究経過の報告に基づいてディスカッションを行ないながら、研究法の問題点や研究内容についての検討を進める。

スポーツ健康管理学演習（1）

坂本 静男

スポーツあるいは運動が一般人の健康管理に有用であることはよく知られた事実であり、また逆にスポーツ選手のコンディショニングを考えていく上では運動量や運動強度を考慮していくことが重要であることもよく知られたことである。実際的に呼気ガス分析を含めた運動負荷試験やスポーツ(運動)中のホルター心電図検査など

を行ってその結果を検討したり、また多数の文献の検討を行い、安全になおかつ効果的にスポーツを実践していく上での注意点を知らることが、この演習の中心的課題である。

スポーツ健康管理学演習（２）

坂本 静男

スポーツを安全に、なおかつ効果的に行っていく上で、いかにスポーツのためのメディカルチェックが重要であるかを、文献的に、実際に検討していく。その中でも特に重要な検査である運動負荷試験について、実際に運動負荷試験も経験し、自身のデータも含めて心電図学的、脂質代謝学的、呼吸生理学的観点から、学んでいくことになる。その他の検査に関しても、可能な限り実体験してその重要性に関して検討していくことになる。

運動器スポーツ医学演習（１）

鳥居 俊

競技選手に発生する運動器の外傷・障害は多彩であり、広い知識が要求される。運動器外傷・障害の治療や予防に関して、競技選手や競技現場で必要とされる運動器スポーツ医学研究に関する最新の論文を講読する。また、実際の競技選手を対象とした運動器の計測・評価や外傷・障害の初期評価に関する演習も行う。

運動器スポーツ医学演習（２）

鳥居 俊

加齢により運動器は変性し、運動機能低下が QOL の低下を招く。これらを治療・予防する方策を考える上で必要な一般人の運動器の健康や疾病予防・治療に資するスポーツや身体活動に関する最新の論文を講読する。また、これらを題材に運動器機能の評価方法や運動療法プログラムの考案を意図した演習を行う。

スポーツ外科学演習（１）

福林 徹

スポーツ選手を医科学的に把握するためには生体内の諸器官の部位と働きを正確に把握しなければならない。特に骨・関節などの運動器の働きとその作用部位を正確に把握し、その異常を早期に発見することはスポーツ選手のコンディショニング維持や、リハビリテーションを進めるには欠くことのできない要素である。本演習では院生の研究発表や学会予行、最新の外国文献の輪読等を行い、スポーツ外科学の最新の情報が得られるようにする。院生はそれらの情報をもとに修士論文の作成を準備する。

スポーツ外科学演習（２）

福林 徹

演習(1)に引き続き行う。院生の研究発表や学会予行、最新の外国文献の輪読等の情報を参考にして、教官サイドから世界の最新情報や学会での討論内容をさらに提供し幅広い討論を行う。また時として外部より専門教員を招きその分野の専門的知見が得られるようにする。

スポーツ神経科学演習（１）

彼末 一之

運動を司る神経機構について生理学的な観点から講義する内容に関して、特に興味を持った項目について文献を調査しその内容について毎週発表する。そして最終的にレポートとしてまとめる。

スポーツ神経科学演習（２）

彼末 一之

演習(1)でまとめた内容を基に、運動制御系についてのモデルを構築し、そのコンピュータシミュレーションを通して生体のダイナミックな調節機能を理解する。

生体ダイナミクス演習（１）

川上 泰雄

運動生理学・バイオメカニクスの分野における、人間を対象とした実験手法の学習・討論を通じて演習指導を

行う。実験手法の理論的背景や実験機器の使用の実際について学習し、参加者自身で実験を計画、実施し、結果を討論する。対象となる手法はスポーツ・身体運動の科学の分野において頻繁に用いられる動作分析や力計測、筋形状や筋活動の定量化などが中心となる。

生体ダイナミクス演習（２）

川上 泰雄

人間を対象とした生体計測手法を学ぶ生体ダイナミクス演習(1)の応用として、骨格筋の形態的・機能的特徴について演習指導を行う。参加者自身が行った実験データや先行研究の調査・報告などを通じて、骨格筋の解剖学的形状とその機能的意義、神経系による骨格筋のコントロール、そしてそれらの可塑性(トレーニング効果)などについて討論を行う。

運動栄養学演習（１）

鈴木 正成

スポーツ力向上と健康増進、維持と関連する運動と栄養に関連する国際誌掲載の学術論文を精読し、この方面の先端情報を得るとともに、研究方法について学ぶ。

運動栄養学演習（２）

鈴木 正成

スポーツ力向上と健康増進、維持と関連する運動と栄養について、国際誌掲載の学術論文を精読し、この方面の情報を集めるとともに、体タンパク質代謝評価法を中心に研究方法を学ぶ。英文学術論文の書き方についてもトレーニングする。

運動生化学演習（１）

樋口 満

一過性の身体運動によって引き起こさせる体内のエネルギー代謝的変動、及び運動トレーニングによるエネルギー代謝の適応的变化について、基礎的理解を深めるために、運動生化学視点からまとめられた著名な英文総説を輪読するとともに、関連する最新の運動生化学に関する原著論文をとりあげて議論する。

運動生化学演習（２）

樋口 満

健康の保持・増進、および糖尿病、高脂血症、骨粗鬆症など生活習慣と関連する疾病の予防や治療における運動トレーニングの効果を応用運動生化学的な視点から検討するために、主として中高年者を対象として行われた運動の効果についてのヒューマンスタディに関する原著論文を資料として議論する。

バイオメカニクス演習（１）

福永 哲夫

ヒトの身体運動は筋線維の収縮により生じた張力(筋線維張力)が腱組織に伝達され、関節を介して骨に作用し、関節のトルク(関節トルク)を発生する(筋-腱複合体)。腱組織は弾性体であり、筋線維張力によりその長さが変化する。身体各部位の関節トルクが総合されたものとして運動(スポーツ)の成績が決まる。従って、身体運動(スポーツ)で発揮される能力は主に筋-腱複合体の構造的機能的特性により左右される。ヒトの筋-腱複合体の構造的機能的特性を明らかにする事からスポーツパフォーマンスの構成要因を明らかにしようとするものである。

バイオメカニクス演習（２）

福永 哲夫

演習(1)を基礎に、これまでに明らかにされていない研究テーマを考え、その測定方法について議論する。更に、新しい方法論の開発を行う事から、ヒト身体運動を構成する筋-腱複合体の特性を明らかにする。

スポーツ生理学演習（1）

村岡 功

生理学を親学問として発展してきたスポーツ生理学は、生理学が静的(安静)状態での生命現象を対象としているのに対して、動的(運動・スポーツ)状態でのそれを対象としている。そして、その目標は、各種スポーツや身体活動に対する生体の応答と適応を明らかにするところにある。ここでは、関連する英文テキストの輪読や、運動・スポーツ状態での様々な生理的指標の測定を通じて、運動・スポーツに対する生体応答と適応を理解することとする。

スポーツ生理学演習（2）

村岡 功

演習(1)で習得したことを基礎として、ここではより具体的に、スポーツ種目による生体応答や適応の相違を探り、それぞれ健康づくりや競技力向上の視点に立って検討することとする。そのために、各自がスポーツ種目別あるいは研究テーマ別に内外の文献紹介等を行い、種目による生体応答と適応の相違を明らかにするとともに、同時に当該分野における最新の研究動向や先端的知見を理解する。

－博士後期課程－

【研究指導】

【スポーツ科学研究領域】

スポーツ人類学研究指導

寒川 恒夫

博士論文の作成指導を行う。最広義のスポーツ(民族スポーツ、国際スポーツ、過去スポーツ、遊戯、舞踊、養生法、武術・武道、などなど)の文化人類学研究の他に、身体文化(Koerperkultur)と関わる身体論をも扱う。また、スポーツ人類学の主要方法論であるフィールドワークを学ぶため、海外における民族スポーツの調査が予定されている。

健康スポーツ論研究指導

中村 好男

本研究指導では、“スポーツを通じた健康増進”という社会的ニーズに応えるために、体力科学、運動生理学、栄養学などの<身体の理論>から、行動科学、社会マーケティングといった<行動の理論>、さらには、ビジネスマネジメント、マーケティングなどの<社会組織の理論>まで、様々な領域における基礎学問分野の知見を踏まえて、「地域住民へのスポーツ振興」ならびに「健康増進の達成」という目標を実現するための実践的技法を確立することを目指している。具体的には、地域自治体、総合型地域スポーツクラブ、老人福祉施設等のさまざまな現場(フィールド)での実践的研究によって、医療費削減や介護予防に資するためのプログラムの開発とその評価モデルの構築に加えて、地域社会における健康増進ならびに介護予防システムの構築を行う。主な研究課題は、1)健康増進を目標とする運動やスポーツの振興と奨励の手法開発と評価、2)ウォーキングプログラムの開発と指導、3)介護予防のための筋力向上トレーニングプログラムの開発と実践活用、4)スポーツビジネスの活性化とスポーツ振興、5)総合型地域スポーツクラブの運営と地域スポーツ指導者の育成などがある。

Keywords: 体力、健康、運動、健康増進、介護予防、ウォーキング、行動科学、マネジメント

身体形態学研究指導

加藤 清忠

基本的には身体の形態的側面と機能的側面との連関性の研究という学際的方向性から、各種の分析法を駆使して身体(生体)の形態を多面的に分析し明らかにしていこうというのが中心テーマとなる。具体的には、形態分析では従来の生体計測学的研究法とともに、応用解剖学的立場から各種の計測機器を用いて体組成や筋構成などを分析していくことであるが、いわば前者は体表からの外形を、後者は体内の内形を明らかにするものであり、それらは身体の形態分析の両側面を成している。機能分析では精密測定機器による筋力やパワーの測定を行なう。しかし、最終的には多面的分析によってそれらの形態的データと筋力・パワーなどの機能的データとの関係を明らかにし、スポーツ活動や筋力トレーニングにおける身体形態に対する影響を明確にしていくことである。

スポーツ外科学研究指導

福林 徹

スポーツ科学者やコーチ、トレーナーなどに要求される外科領域でのスポーツ医学の諸問題についての研究指導を行う。具体的には、人体の部位別機能解剖とそれに基づいた評価法、スポーツによって生じる代表的な外傷・障害の診断と現場での処置、最新の治療法、およびスポーツ復帰までのリハビリテーション法について研究指導する。スポーツの種目別特性を加味しながら、最新の治療器や治療法、近年のこの分野での研究の動向についてもふれ、博士後期課程での研究のベースになるようにする。

スポーツ神経科学研究指導

彼末 一之

運動に必要な神経機構について①基本的な脳機構の解析と②実際のスポーツをモデルとした運動の解析、を並行して行うことで、基礎から応用までの広い視点を養うことを目標として指導を行う。特に高次脳機能解析には MRI を使った解析を原理から実際まで学んで特定のテーマについて研究する。一方スポーツの解析は野球、陸上競技などを中心に系統的な解析を行って競技力向上につなげられるような研究を行うことを目標とする。

生体ダイナミクス研究指導

川上 泰雄

人間を対象とした生体計測に関する研究を指導する。特に、骨格筋・腱の形態的特性と機能的特性に関する研究を進展させる。人体筋の非侵襲的な可視化および収縮の定量化に関して、超音波や MRI 等の画像解析の手法などを駆使して研究を進める。研究テーマの中心は1. 人体筋のメカニクス、2. 筋特性の個人差と適応性、の2点である。1については、人体筋腱複合体を筋組織(筋線維)と腱組織に分け、それぞれの特性(筋特性、腱特性)を人間生体について定量化し、筋線維と腱組織との間の相互作用や身体運動における両者の協調について調べる。2については、筋特性の個人差と適応性に関して、体肢の筋群の筋量および筋形状の横断的・縦断的測定を行う。学生毎に明確な短期・長期研究計画を立案し、実験、学会発表、論文投稿、学位論文作成等の研究指導を行う。

運動栄養学研究指導

鈴木 正成

超高齢化社会における最大の健康課題は、老化に伴う筋肉減弱化(サルコペニア)と骨減弱化(オステオペニア)を防止することである。筋肉繊維や骨コラーゲンなどのタンパク質合成を促進するために、軽レジスタンス運動と高タンパク質間食が有効であることを認めた。朝、昼、夕の基本食で摂るタンパク質のほとんどは消化管と肝臓にとりこまれ、筋肉と骨にはアミノ酸の配給は不十分である。しかし、間食のタンパク質は消化管と肝臓に捕まらずに筋肉と骨に届く。このサイエンスは、筋肉、骨作りを促進する必要がある発育発達期の子供たちやスポーツ選手の栄養にも応用出来る。間食の“ミサイル栄養”作用と呼ぶ新しい栄養学の課題について、より詳

細に解明していくことを中心に研究指導する。

運動生化学研究指導

樋口 満

スポーツにおける競技力向上とコンディショニング、運動による健康増進に関し、応用運動生化学的視点から論議する。スポーツにおける競技力向上に関してはグリコーゲンローディングなど糖代謝機能について、コンディショニングに関しては抗酸化機能について議論する。また、運動による健康増進に関しては、肥満、高脂血症、糖尿病、骨粗鬆症など生活習慣に関わる疾患の予防、治療と関連させて生化学的視点から議論する。

バイオメカニクス研究指導

福永 哲夫

ヒトの身体運動を引き起こす筋-腱複合体の構造的機能的特性を様々な角度から明らかにするとともに、発育発達、トレーニング、不活動、宇宙などの生活環境と身体運動との関係を実験的に明らかにする事を研究の目的とする。博士論文作成に必要な様々な研究指導を行う。

スポーツ生理学研究指導

村岡 功

スポーツ生理学は各種スポーツ活動に対する生理的な応答と適応を探求する学問であるが、本格的に研究がなされるようになったのはたかだか60年前からである。しかし、近年に至って、運動不足に対する危機感から規則的なスポーツおよび身体運動が推奨されるとともに、一流競技者を育成するための科学的なバックアップが求められるようになったことなどを背景として、この分野は広く社会から注目を浴びようになってきた。そして、これらのことと連動して、研究面でも著しい進歩がみられている。ここでは、主にエネルギー代謝に関連する領域を中心テーマとして、スポーツや身体運動による健康づくりおよび各種スポーツにおける選手育成の観点から、最近の知見に基づいて研究指導を行う。

スポーツ心理学研究指導

山崎 勝男

スポーツ行動の背景をなす精神活動の諸側面を、心理学と生理学の学際的な立場から、主として精神生理学的な手法を駆使することにより、心理的なシステムと生理的なシステム間の翻訳メカニズムを追究する。現在展開中の研究テーマは、1) 事象関連脳電位を指標とした運動プログラムの解析、2) 運動スキル獲得過程のポリグラムの解析(主として筋電図と呼吸を指標とする)、3) 実験的不眠による入眠過程のポリソムノグラフィ的解析、4) 正・負情動の質のポリグラムの解明、5) 末梢自律系の指標による不安障害の類別である。

XVII 全学共通設置科目の概要

次の科目は、全学共通設置科目として全大学院学生を対象に設置されている。

聴講を希望する場合は、大学院人間科学研究科で交付する聴講願を使用し、所定の方法によって申請をすること。なお、聴講するには指導教員の承認が必要となり、事前に申請書に指導教員の押印が必要となる。

修得した単位は、他箇所聴講科目と合わせて10単位を限度に修了に必要な単位に算入することができる。

2007年度大学院全学共通設置科目講義内容

<経済学研究科提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
マイクロ経済学研究Ⅰ	荒木 一法	前期	2	火	6

本講義は学部中級(2年配当)水準のマイクロ経済学から大学院初年度レベルのマイクロ経済学へステップアップしようとする際、障害となりうる点に気をつけながら、マイクロ経済学の基本を講義します。具体的には、選好と効用、消費の理論、生産の理論、期待効用理論等すでに学んだ内容を、より一般的な記述、より深い分析を可能とするような形で学びなおします。なお、一般均衡理論やゲーム理論はこの講義の対象外です。この講義の主たる目的は、大学院レベルの経済理論を理解する上で基礎となる部分を受講者に理解してもらうことにあります。

[注意]

学部中級レベルのマイクロ経済学の理解に自信がもてない場合は、受講前に今一度、各自が使った教科書で復習しておいてください。学部中級レベルのマイクロ経済学の理解は必ずしも前提とはしませんが、その理解が不足する場合、この講義の理解に大きな困難が生じる可能性があります。

<経済学研究科提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
マイクロ経済学研究Ⅱ	清水 和巳 牛丸 聡 荻沼 隆	後期	2	水	2

マイクロ経済学は長く「市場」の機能を「効率性」という概念を中心に分析してきた。その過程において、同時に「市場」が運に出すデメリットや「市場」では解決できない問題群も明らかになってきた。本講義では、市場の「効率性」のみならず上記のデメリットや問題群に主として焦点を当て、「市場」に代替、あるいは「市場」を補完する諸「制度」について、理論、規範、経験などの様々な観点から講義してみたい。

シラバス

本年度は次の順序に従い3名の担当者による講義を行なう。牛丸教授、荻沼教授、清水(和)教授。1名あたり4回の講義を予定している。

(牛丸)

「市場」を補完するものとして「政府」の存在があげられる。「政府」が行なう「税制」や「社会保障制度」も市場のデメリットを補うために存在している。本講義では、「税制」や「社会保障制度」の意義を確認しながら、マイクロ経済学で明らかになった個人や企業の行動を基にして、その個人や企業が当該制度によってどのように行動を変化させるのかということを中心に、その効果を考慮した上で、当該制度のあり方に関して考察してみたい。参考文献は、最初に講義の際に示す。

(荻沼)

「市場」における取引を補完する取引として、「契約」をとりあげる。具体的には、外部性とコースの定理、交渉とナッシュ解、プリンシパルエージェント問題、オークション、契約と市場の関係などを取り扱う予定である。参考文献は、講義の中で紹介する。

(清水和)

本講義では、ミクロ経済学における市場理論が指示する市場の「効率性」と「失敗」を実験的アプローチによって検証し、「市場」とそれを取り巻く他の「諸制度」との関連性を論じてみたい。あわせて、社会科学における実験のもつ意味を概説する。

参考文献

- ・『比較制度分析にむけて』(青木、NTT 出版)。
- ・『ミクロ経済学 I 』(奥村・鈴木、岩波書店)。
- ・『経済計画理論』(鈴木、筑磨書房)。
- ・『実験経済学の原理と方法』(Friedman and Sunder、川越他訳、同文館)。
- ・*Microeconomics・Behavior, Institutions and Evolution-*, S.Bowles, Princeton

評価方法

基本的には定期試験を行うが人数によってはレポートによって定期試験の代わりとすることもある。

<経済学研究科提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
マクロ経済学研究 I	藪下 史郎	前期	2	月	6

本講義ではマクロ経済学の主要部分を復習し、今後の発展のために次のような内容をコンパクトにまとめて講義する。

(1) IS-LM分析

IS曲線

LM曲線

政策効果の分析

(2) 労働市場と失業

労働需要と労働供給

賃金の下方硬直性

(3) 総需要-総供給分析

総需要曲線

総供給曲線

政策効果の分析

(4) インフレーション・デフレーション

ダイヤモンドプルとコストプッシュ

期待形成とインフレやデフレ

(5) その他

<経済学研究科提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
マクロ経済学研究 II	貞廣 彰 森 映雄 藤森 頼明	後期	2	木	6

講義概要

2007年度は貞廣彰、森映雄、藤森頼明の3名の担当者が4回ずつ、オムニバス形式でマクロ経済学関連のトピックスについて講義を行なう。※講義は、貞廣→森→藤森の順に行なう。

・貞廣

財政、金融を含む2国2財モデルに関する動学的一般均衡モデルを取り上げる。

・森

貨幣の中立性に関するテーマを取り上げる。

・藤森

ポスト・ケインジアン竜の経済学的発想によるマクロ的経済学を取り上げる。現実的な資料を読み、どういう問題を見出すか、それについて討論する。基本的な図書を選択して、輪読する。書籍を批判的に読む訓練を心掛ける。

参考文献

・貞廣、森

適宜指定する。

・藤森

芹沢光雄『数学が日本を救う』総合法令

森嶋通夫『政治家の条件』『なぜ日本は沈没するか』『なぜ日本は行き詰まったか』岩波書店

小室直樹『数学嫌いな人のための数学』東洋経済新報社

日本経済新聞社(編)『やさしい経済学』日経文庫

評価方法

追って指示するが、出席が前提となる。

<国際情報通信研究科提供科目>

科目名	教員氏名	所属	資格	学期	週時	単位	曜日	時限
映画のすべて マスターズ・オブ・シネマ	安藤 紘平 元村 直樹	国際情報通信研究科 国際情報通信研究科	教授 客員講師 (非常勤扱い)	春	2	2	土	4

1. 設置の主旨

映像の教育は、専門や学年に関わらず、映画・映像分野に関心ある学生が自発的に学習を積み重ねてゆく学習システムを基本とすることが望ましい。

2. 講義内容

授業内容

映画界を支える魅力的なゲストを迎え、何故映画にかかわったか、どう映画に取り組むべきか、手法やエピソードなどを語ってもらう。学生には事前に予習させ、講座直前に映像を上映し、質の高いディスカッションを求める。

ゲスト講師(2006年度参考)

山田洋次(監督)、行定勲(監督)、柄本明(俳優)、樋口真嗣(監督)、久石譲(音楽監督)、是枝裕和(監督)、亀山千広(プロデューサー)、大林宣彦(映像作家)、澤登翠(活弁士)、犬童一心(監督)、篠田正浩(監督)ほか

参考文献

「映像プロフェッショナル入門」安藤紘平著、フィルムアート社刊 定価 2000 円

※早稲田大学生協にて生協組合員は 1800 円で購入出来ます。

成績評価

出席、レポート、授業への参加度を総合的に評価する。

※大学院学生と学部学生では、評価基準を別に定め、それぞれに見合った学業成績判定を行います。

備考

本科目は、学部との合併科目です。

科目登録方法

科目登録希望者は、通常の科目登録手続きに加えて、以下の要領で『科目登録希望理由書』を作成し、2007年4月7日(土)までにメール送信を行なうこと。

- 『科目登録希望理由書』は MS-Word により A4 サイズ1枚以内で作成すること。内容として、「なぜこの科目を登録したいか」の理由、学籍番号、名前、を明記のこと。
- メール送信にあたっては、「メール件名」に、「マスターズ・オブ・シネマ登録希望」、学籍番号、名前、を明記のこと。送信先メールアドレス:mastersofcinema@list.waseda.jp

<国際情報通信研究科提供科目>

科目名	教員氏名	所属	資格	学期	週時	単位	曜日	時限
プロデューサー特論	安藤 紘平 元村 直樹	国際情報通信研究科 国際情報通信研究科	教授 客員講師 (非常勤扱い)	秋	2	2	木	2

1. 講義内容

授業内容

映画のプロデューサーの仕事は、企画、デベロップメント、マーケティングリサーチ、ファイナンス、映画製作、契約、著作権、宣伝、配給、回収、マーチャンダイズ、マルチユースオペレートなど、多彩です。「ナビィの恋」「カナリア」「陰陽師」「世界の中心で愛をさげぶ」など、ヒットメーカープロデューサーとして活躍する佐々木史朗氏・濱名一哉氏を中心として、各部門の専門家をゲストに迎え、プロデューサーの何たるかを学びます。

授業計画

授業計画:安藤が統括、“ナビィの恋”“世界の中心で愛をさげぶ”などで活躍のプロデューサー佐々木氏・濱名氏を中心に多彩なゲストがそれぞれの専門分野を担当する。

【参考】

2006年度講義概要(2007年度については多少変更となる場合があります。)

- (1) 濱名一哉(TBS) 時代が求めるプロデューサーとは・映画事業の可能性
- (2) 佐々木史朗(オフィスシロウズ) インディペンデントプロデューサーとは・ミニシアター映画製作
- (3) 市川南(東宝) 公開映画を基にしたプロデュースの実際
- (4) 磯山晶(TBS)／金子文紀(TBS) 映画企画デベロップメントと製作
- (5) 濱名一哉(TBS) 映画制作の収支構造・ビジネスの実際
- (6) 久保田修(IMJ)／犬童一心監督 映画製作現場の実際
- (7) 平野直樹(TBS) 映画事業における著作権・契約
- (8) 小谷靖(エンタテインメント・ファーム) 映画ファイナンス
- (9) 市川南(東宝) 映画宣伝とマーケティング
- (10) 辻本珠子(TBS) マーチャンダイジングとプロモーション
- (11) 大屋哲男(マリノポスト) デジタル特殊合成とプロデュース
- (12) 久保雅一(小学館) ポケモンと日本アニメの国際戦略
- (13) 濱名一哉(TBS) 総括と課題

参考文献

『コンテンツ・プロデュース機能の基盤強化に関する調査研究』

URL: http://www.meti.go.jp/policy/media_contents/index.html

「映像プロフェッショナル入門」安藤紘平著、フィルムアート社刊 定価 2000 円

※早稲田大学生協にて生協組合員は 1800 円で購入出来ます。

成績評価

出席、レポート、授業への参加度を総合的に評価する。

※大学院学生と学部学生では、評価基準を別に定め、それぞれに見合った学業成績判定を行います。

備 考

本科目は、学部との合併科目です。

科目登録方法

科目登録希望者は、通常の科目登録手続きに加えて、以下の要領で『科目登録希望理由書』を作成し、2007 年 10 月 4 日(木)までにメール送信を行なうこと。

1. 『科目登録希望理由書』は MS-Word により A4 サイズ1枚以内で作成すること。内容として、「なぜこの科目を登録したいか」の理由、学籍番号、名前、を明記のこと。
2. メール送信にあたっては、「メール件名」に、「プロデューサー特論登録希望」、学籍番号、名前、を明記のこと。送信先メールアドレス: produce@list.waseda.jp

<オープン教育センター提供科目 講義科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
ライティング&リサーチ・スキル	吉野 亜矢子	前期	2	金	4

講義概要

大学で学ぶ、ということは、たえず文章を読み、書く必要性にさらされることです。

このクラスは、学術的な文章を書くのに必要な技能を身につけるための基礎講座として設計されています。文章を書く技術は、他の技術と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものですが、残念ながら、文章へのフィードバックは通常の生活の中ではなかなか得ることのできないものです。この授業では明快で論理的な文章を書くための技術を、実際に文章を書き、直していくことで学んでゆきます。論文作成の要素を(<文章>と<論文>)にわけ、文章の要素に重点をおいたものだとお考えいただければよいと思います。

具体的にはほぼ毎週課題の小論文を書くこととなります。クラスのほかの学生との文章の読みあいと意見交換によって学ぶピア・レスポンス方式をとっていますので活発な授業への参加を期待しています。

<オープン教育センター提供科目 講義科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
学術論文の書き方入門	福沢 一吉	後期	2	月	4

講義概要

ゴール:

本講座では講義と演習を組み合わせるにより、学術論文を書く場合の基礎的背景について学習し、演習とおして学術論文を書くためのスキルをつけることを目的としている。なお、本講義演習では読むことと書くことは等価であるとするモデルを使用する。

最初に学術論文とは何かについて概論し、論文にして何かを発表する意義について考える。論文では学術的な議論を展開していくわけであるが、学術的議論の基礎には論証という考え方があ。これは、何らか

の前提から結論を導くことであるが、この論証について考える時間をとる。論証はコンテンツとは独立であるため、どんな分野の論文を書く場合にも使用可能である。トレーニングとしては新聞記事などから開始して、論文の分析的読みを論証モデルを基礎に行う。このときの読むとは分析対象となる論証の再構成を意味する。すなわち、読むことは受身ではなく、自分のもつ論証構造に对照を焼きなおすことを意味する。このスキルは自分で論文を書く場合の基礎として不可欠である。

論証を文章表現する方法のひとつにパラグラフ構造で書く方法がある。一般にこの構造は英語圏で書かれているもの使われるが、日本語で学術論文を書く場合にも適応可能である。書かれているものをパラグラフ構造に再構成することから開始し、最後に自分の立論をパラグラフ構造で書いていくことをトレーニングする。

シラバス

1. 学術論文とは何か論文に値するテーマをどう選択するのか？
2. 論理トレーニング: 論証とは何か？
3. 新聞記事から学術論文までを対象に論証分析をし、論証を再構成する。
4. Academic Writing とは何か
5. パラグラフ構造とは何か
6. 論証をパラグラフ構造で表現する。
7. パラグラフ構造で書いたものを発表し、クリティックする。
8. パラグラフ構造で書いたものを発表し、クリティックする。
9. パラグラフ構造で書いたものを発表し、クリティックする。
10. パラグラフ構造で書いたものを発表し、クリティックする。

教科書

既存の教科書は使わない。福澤が作成した資料を使用する。

参考文献

- 『議論のレッスン』福澤一吉著 NHK生活新書
- 『論理表現のレッスン』福澤一吉著 NHK生活新書
- 『論理トレーニング』野矢茂樹著 産業図書
- 『論文の教室』戸田山和久著 NHKブックス
- 『科学哲学の冒険』戸田山和久著 NHKブックス
- 『反論の技術』香西秀信著 明示図書
- 『近代科学をこえて』村上陽一郎著 講談社現代文庫

評価方法

前半評価: 論証に関する基礎知識に関するテストを行い、成績全体の50%の評価とする。

後半評価: 自分が立論した論証に関してパラグラフ構造で書いたものを提出していただき、それを評価対象とする。

備考

講義演習の回数が少ないため、1つ1つのクラスの密度が非常に濃い。そのため、講義演習を休むとついていけなくなるクラスである。さらに、演習では受講者の積極的な参加が要求される。受講される方は上記2点についてご承知おきいただきたい。

<オープン教育センター提供科目 大学院研究テーマカレッジ 現代中国研究>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
中国外交と国際関係	青山 瑠妙	後期	2	金	4

講義概要

講義形式とゼミナール形式と併用して、授業を実施する。

[1] 中国外交の史的展開をたどる

* 建国から現在に至るまでの外交政策の変遷をふりかえる

* 台湾問題、国連における中国の行動と政策、近隣諸国やアフリカに対する援助政策、国内の世論形成など、さまざまな側面から中国外交を立体化する

[2] 中国外交の構造的特徴

(1)の議論を踏まえて、中国外交の特徴を考える

[3] 中国を取り巻く国際状況と中国の関係

* 外交戦略の柱

* アメリカ、日本などとの両国関係

* 中国の地域一体化政策

シラバス

以下の構成で進める。

[1] 中国外交史

[2] 中国外交の諸政策

[3] 中国外交の特徴

[4] 中国の外交戦略

[5] 米中関係、日中関係

[6] 東アジア共同体と中国

教科書

初回授業で指示する。

参考文献

随時授業の中で紹介する。

評価方法

授業の出席、授業参加の姿勢、レポートを総合的に考慮して評価する。

備考

なお、本講義はアジア太平洋研究科の「中国外交と国際関係」(後期、金曜日4時限)と共通である。

アジア太平洋研究科生は、自箇所の「中国外交と国際関係」を登録すること。

<オープン教育センター提供科目 大学院研究テーマカレッジ 現代中国研究>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
比較のなかの中国政治	毛里 和子	前期	2	金	3

講義概要

本年は、東アジアのうち、とくに大陸中国の政治変容、民主化の試みなどについて日英の文献を講読する。最初の3~4回は、中国政治研究についての概論を毛里が行う。その後、比較政治の優れた文献である、Zhao Suishengが編集した英語文献を輪読する。

教科書

毛里和子著『新版・現代中国政治』名古屋大学出版会、2004年

Zhao Suisheng ed., China and Democracy—Reconsidering the Prospects for a Democratic China, Routledge, 2000, paperback

評価方法

報告、討論、学期末の小論文

備考

なお、本講義は、本学政治学研究科の「比較政治——東アジア政治」(前期、金曜日3時限)と共通である。政治学研究科生は、「比較政治——東アジア政治」を登録すること。

<オープン教育センター提供科目 大学院研究テーマカレッジ 現代中国研究>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
現代中国社会の解剖	園田 茂人	前期	2	水	4

講義概要

改革・開放以降の中国社会の変化について、多角的にアプローチする。家族、企業、学校、都市・農村、階層、価値観など、いろいろな切り口から、中国社会の変化の様相を捉えてみたい。まずは中国社会の現実を理解した上で、これをどのように理論的に説明するか、さまざまなケースをもとに考えたい。その意味で、本授業への参加者は、単なる中国通になるのではなく、中国社会の変化をうまく解釈できる力を身に付けることが求められているといつてよい。

授業の前半は、講師が現在抱えているプロジェクトの進行状況を説明したり、予め指定した本や論文を参加者に紹介・論評してもらうことをメインとする。授業の後半では、参加者の自主発表とゲスト講師によるスピーチをメインにし、参加者自身も持っている知的関心を魅力ある研究に展開できるよう、討論を中心に授業が展開される。

講師は現在、アジアバロメーターや中国の階層調査、日系企業の国際比較など、複数のプロジェクトに参加しているが、これらの結果についても、適宜紹介したい。また、岩波書店の『世界』で連載が決定している対談シリーズ「中国社会はどこへ行くか」についても、適宜情報を提供するなどして、参加者に絶えず知的な刺激を与えたい。

教科書

現時点では、以下の2つを考えている。

園田茂人編(2005)『東アジアの階層比較』中央大学出版部(第4, 5, 7章)

菱田雅晴・園田茂人(2005)『経済発展と社会変動』名古屋大学出版会(第1, 7, 終章)

評価方法

授業への参加度(討論、報告、出席)によって総合的に評価する。

備考

授業は前期の毎週水曜日、4限(2時40分-4時10分)に実施。オリエンテーションは第1回目の授業(4月11日)の際に行う。2回目以降の授業は、19号館で行う予定。

<オープン教育センター提供科目 大学院研究テーマカレッジ 現代中国研究>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
変動社会中国における教育	小林 敦子	後期	2	火	2

講義概要

中国では、1980年代以降、改革開放政策のもとで、急激な社会変動を遂げている。こうした社会変動に伴い、教育改革がドラスティックな形で進められている。本授業においては、こうした中国の教育改革の動向を検討しつつ、社会変動が中国の教育に及ぼした影響や、そこにおける人々の教育意識について考察していきたい。具体的には、1912年の中華民国建国以降、中華人民共和国建国から現代に至る教育の歩みをふまえた上で、特に1980年代以降の焦点を当てて、授業を進めるものとする。また、都市-農村の格差、

少数民族地域における教育、少数民族地域における日本の教育支援、などについても取り上げていく。授業は、基本的には演習形式とし、文献購読と学生さんによる発表、ディスカッションを積極的に取り入れていきたい。

シラバス

第1回目の授業で配布予定です。

参考文献

適宜紹介していきます。

評価方法

1、レポート 2、出席

<オープン教育センター提供科目 大学院研究テーマカレッジ 現代中国研究>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
歴史認識問題から見た現代中国外交	劉傑	前期	2	月	2

講義概要

中国の外交政策、とりわけ対日外交政策に影響を及ぼすファクターの一つに「歴史」がある。対日外交の中で「歴史」がカードとして使われているのか、それとも中国文化に根差している「歴史観」が外交政策の形成に影響を及ぼしているのか。本演習は中国の歴史認識の変遷と現代中国の外交政策の特徴を読み解きながら、歴史の中の現代中国外交に対する理解を深める。外交文献の読み方を習得し、そのなかにある「歴史」を吟味する。また近年の歴史認識をめぐる論議を整理し、「外交」と「歴史」の関係を解明する。

シラバス

- 1 近代史をめぐる日中両国の争点の整理
- 2 近現代史のなかの日中外交関係、戦前と戦後
- 3 日中国交正常化と歴史問題
- 4 教科書問題と靖国問題をめぐる日中関係
- 5 総括:外交と歴史

教科書

劉傑・三谷博・楊大慶『国境を越える歴史認識』東京大学出版会、2006年

その他、演習に使われる史料は随時配布する。

参考文献

劉傑『中国人の歴史観』文春新書、1999年

高橋哲哉『靖国問題』ちくま新書、2005年

袁偉時『中国の歴史教科書問題』日本僑報社、2006年

毛里和子『日中関係』岩波新書、2006年

Takashi Yoshida The Making of the Rape of Nanking, Oxford University Press, 2006

評価方法

研究発表 50%、討論 50%

<オープン教育センター提供科目 大学院研究テーマカレッジ 現代中国研究>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
変遷過程における中国憲法	小口彦太	前期	2	水	3

講義概要

中華人民共和国成立以来、中国は 1954 年、75 年、78 年、82 年と四度にわたって憲法を制定した。そのいずれの憲法も社会主義憲法として、欧米や日本などの立憲主義憲法と類型をことにしてきた。しかし、90 年代に入って中国憲法理論に立憲主義憲法理論が相当影響を及ぼしてきている。本講義は、中国における立憲主義憲法理論の受容の特徴について考えてみたい。講義は具体的事例を素材にしなが、それについての中国憲法学者の諸議論を紹介し、そうした議論の背景にある各論者の憲法論、ひいてはあるべき国家構想を探ってみたい。

シラバス

本講義で扱うテーマは以下のとおりである。

- 一. 中国憲法は誰を規制の対象とするのか。
- 二. 中国憲法は裁判の独立を認めているか。
- 三. 中国では憲法を直接裁判に適用することが認められているか。
- 四. 中国ではなぜ憲法の私人間適用の議論が盛んなのか。
- 五. 中国ではどこが違憲立法審査権を行使するのか。

教科書

小口彦太・田中信行共著「現代中国法」(成文堂)

参考文献

芦部信喜、樋口陽一、奥平康弘氏ら日本の代表的憲法学者の憲法の基本的教科書および毛里和子「現代中国政治」(名古屋大学出版会)

評価方法

出席状況、発言内容、およびレポートの内容によって評価する。

<オープン教育センター提供科目 大学院研究テーマカレッジ 演劇と映像>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
現代演劇特論(入門)	秋葉 裕一	前期	2	火	4

講義概要

この演習は、演劇博物館を拠点とした 21 世紀COE事業「演劇の総合的研究と演劇学の確立」で展開したテーマ「日本におけるベルトルト・ブレヒト受容」の研究成果を、問題提起の形で改めて問い直し、検証することをめざしている。欧米の演劇の影響下に成立した新劇の運動には、日本および日本人を異化して眺める立場なり、見方が存在するが、ブレヒトとその日本における受容がどのようなものであったのか、その在り様を考察したい。じっさいにブレヒト劇に関わった演劇人の証言を聞く機会が設けられれば、と願っている。

教科書

必要なテキストは授業担当者の側で準備する。

評価方法

出席、授業への参加、レポート、場合によっては、教場試験の結果をもとに評価を行う。

<オープン教育センター提供科目 大学院研究テーマカレッジ 演劇と映像>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
現代演劇特論(発展)	秋葉 裕一	後期	2	火	4

講義概要

この演習は、演劇博物館を拠点とした 21 世紀COE事業「演劇の総合的研究と演劇学の確立」で展開したテーマ「日本におけるベルトルト・ブレヒト受容」の研究成果を、問題提起の形で改めて問い直し、検証する

ことをめざしている。欧米の演劇の影響下に成立した新劇の運動には、日本および日本人を異化して眺める立場なり、見方が存在するが、ブレヒトとその日本における受容がどのようなものであったのか、その在り様を考察したい。じっさいにブレヒト劇に関わった演劇人の証言を聞く機会が設けられれば、と願っている。

教科書

必要なテキストは授業担当者の側で準備する。

評価方法

出席、授業への参加、レポート、場合によっては、教場試験の結果をもとに評価を行う。

<オープン教育センター提供科目 大学院研究テーマカレッジ 演劇と映像>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
日本の伝統演劇論(入門)	竹本 幹夫	前期	2	月	4

講義概要

世阿弥の能楽論のうち、『三道』『二曲人形三体図』を中心に読み解く。発表者による輪読形式の演習である。『三道』は世阿弥によるドラマトゥルギーであり、能作のあり方を簡明に説いた書である。『二曲三体人形図』は身体論であり、能の演技の要諦を絵図によって説き示した書である。いままでも能楽研究に必須の資料としてしばしば利用されてきたが、書物内容自体の深い理解については、必ずしも現代の研究は十分ではない。これらの書物に注釈を施すことを前提として、読み進めていきたい。諸本校合と諸注釈書の比較作業を中心に行うこととなるが、能楽論としての位置付けや当時の能のあり方についても注意を払いたい。

シラバス

4月 9日ガイダンスと研究史

4月16日能楽論概説と能楽史概説

4月23日ゲストスピーカーによる講義:世阿弥の作品と能楽論

5月 7日『三道』輪読1

5月14日『三道』輪読2

5月21日『三道』輪読3

5月28日『三道』輪読4

6月 4日『三道』輪読5

6月11日『二曲三体人形図』輪読1:ゲストスピーカーによる二曲三体論概説

6月18日『二曲三体人形図』輪読2

6月25日『二曲三体人形図』輪読3

7月 2日『二曲三体人形図』輪読4

7月 9日『二曲三体人形図』輪読5

教科書

毎回発表者が資料を作成する。

参考文献

日本思想大系『世阿弥 禅竹』(表章他編著・岩波書店)

岩波講座 能・狂言『能楽の伝書と芸論』(表章・竹本幹夫共編)

評価方法

平常点とレポートによる。

<オープン教育センター提供科目 大学院研究テーマカレッジ 演劇と映像>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
日本の伝統演劇論(発展)	竹本 幹夫	後期	2	月	4

講義概要

世阿弥の能楽論のうち、『拾玉得花』を中心に読み解く。発表者による輪読形式の演習である。『拾玉得花』は、世阿弥が女婿であった若き日の金春大夫禅竹に送った書物である。禅的教養に裏打ちされた世阿弥の文言は、従来より世阿弥思想の精華として高く評価されてきた。ただし本書の趣旨は『花伝』で論じた主要問題の再説であり、それゆえに世阿弥能楽論理解のためには必須の参考書としての意味があるのだが、必ずしも独自の思想的な進展があるわけではない。こうした諸点について、必ずしも現代の研究は十分ではない。本講座では、これらの書物に注釈を施すことを前提として、読み進めていきたい。論展開を修飾するための禅をはじめとする中世思想の典拠や、諸注釈書の比較作業を中心に行うこととなるが、能楽論としての位置付けや当時の能のあり方についても注意を払いたい。

シラバス

- 10月 1日『拾玉得花』概説:世阿弥能楽論における『拾玉得花』の位置と研究史
- 10月15日『拾玉得花』輪講 1:ゲストスピーカーの講義「禅竹と『拾玉得花』」
- 10月22日『拾玉得花』輪講 2
- 10月29日『拾玉得花』輪講 3
- 11月 5日『拾玉得花』輪講 4
- 11月12日『拾玉得花』輪講 5
- 11月19日『拾玉得花』輪講 6
- 11月26日『拾玉得花』輪講 7
- 12月 3日『拾玉得花』輪講 8
- 12月10日『拾玉得花』輪講 9
- 12月17日『拾玉得花』輪講10

教科書

毎回発表者が資料を作成する。

参考文献

- 日本思想大系『世阿弥 禅竹』(表章他編著・岩波書店)
- 岩波講座 能・狂言『能楽の伝書と芸論』(表章・竹本幹夫共編)

評価方法

平常点とレポートによる。

<オープン教育センター提供科目 大学院研究テーマカレッジ 演劇と映像>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
現代演劇と多文化主義(入門)	澤田 敬司	前期	2	火	4

講義概要

ある国において、マジョリティの制作者による、マジョリティの観客のみに向けた、マジョリティの言語や表現形式を用いた演劇があるとすれば、それからはずれる表現を、この講座では演劇における多文化主義と位置づけたい。マイノリティたちが素材になる作品もあれば、クロスカルチュラルな実践も、それに含まれる。

本年度は、オーストラリアの先住民演劇実践を取り上げ、それに込められた政治性や伝統・文化について分析を行う。さらに、先住民演劇の日本での翻訳上演を取り上げ、現代演劇におけるインターカルチュラルizmについて、演劇実践者と討論をしながら考える。

また、受講生の関心領域の作品も取り上げ、上記の議論との接点について考えながら、発表・討議を行う。

教科書

『アボリジニ戯曲選: ストールン／嘆きの七段階』

『アボリジニ戯曲選2: アップ・ザ・ラダー／レイディアンス』

(以上、オセアニア出版社)

参考文献

『演劇学のキーワード』(ペリかん社)

佐和田敬司『現代演劇と文化の混淆』(早稲田大学出版部)

評価方法

授業への参加、レポートを総合的に判断する。

備考

現代演劇と多文化主義(発展)とセット登録すること。

<オープン教育センター提供科目 大学院研究テーママカレッジ 演劇と映像>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日	時限
現代演劇と多文化主義(発展)	澤田 敬司	後期	2	火	4

講義概要

ある国において、マジョリティの制作者による、マジョリティの観客のみに向けた、マジョリティの言語や表現形式を用いた演劇があるとすれば、それからはずれる表現を、この講座では演劇における多文化主義と位置づけたい。マイノリティたちが素材になる作品もあれば、クロスカルチュラルな実践も、それに含まれる。

本年度は、オーストラリアの先住民演劇実践を取り上げ、それに込められた政治性や伝統・文化について分析を行う。さらに、先住民演劇の日本での翻訳上演を取り上げ、現代演劇におけるインターカルチュラルizmについて、演劇実践者と討論をしながら考える。

また、受講生の関心領域の作品も取り上げ、上記の議論との接点について考えながら、発表・討議を行う。

教科書

『アボリジニ戯曲選3: ドリーマーズ／ノー・シュガー』(オセアニア出版社)

参考文献

『演劇学のキーワード』(ペリかん社)

佐和田敬司『現代演劇と文化の混淆』(早稲田大学出版部)

評価方法

授業への参加、レポートを総合的に評価する。

備考

現代演劇と多文化主義(発展)とセット登録すること。

2007年度大学院人間科学研究科学科目配当表

課程	科目区分	研究領域・コース名	科目名	単位	担当教員名	備考
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	環境管理計画学研究指導	天野 正博		
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	人口学研究指導	阿藤 誠		
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	生物圏生態学研究指導	太田 俊二		
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	環境生態学研究指導	森川 靖		
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	環境社会学研究指導	鳥越 皓之		
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	社会人類学研究指導	矢野 敬生		
修士(2年制)	研究指導	人間行動・環境科学	学習動機づけ論研究指導	青柳 肇		
修士(2年制)	研究指導	人間行動・環境科学	発達行動学研究指導	根ヶ山 光一		
修士(2年制)	研究指導	人間行動・環境科学	環境心理学研究指導	佐古 順彦		
修士(2年制)	研究指導	人間行動・環境科学	建築計画学研究指導	佐野 友紀		
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	産業職業社会学研究指導	河西 宏祐		
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	文化生態学研究指導	蔵持 不二也		
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	アジア社会論研究指導	店田 廣文		
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	移住論研究指導	森本 豊富		
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	家族社会学研究指導	池岡 義孝		
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	都市社会学研究指導	臼井 恒夫		
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	科学史・科学論研究指導	加藤 茂生		
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	物質文化論研究指導	谷川 章雄		
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	表象文化論研究指導	中村 要		
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	政治社会文化論研究指導	村上 公子		
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	技術文化論研究指導	余語 琢磨		
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	生体発達科学研究指導	木村 一郎		
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	生体機能学研究指導	小室 輝昌		
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	生体構造学研究指導	今泉 和彦		
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	神経内分泌学研究指導	山内 克人		
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス研究指導	鈴木 秀次		
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	統合生理学研究指導	永島 計		
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	応用免疫学研究指導	鈴木 克彦		
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	健康医学研究指導	河手 典彦		
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	応用健康科学研究指導	竹中 晃二		
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	医療人類学研究指導	辻内 琢也		
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	支障工学研究指導	山内 繁也		
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	福祉産業学研究指導	可部 明寛		
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	老年社会福祉学研究指導	加瀬 裕子		
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	バイオエシックス研究指導	士田 友章		
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント論研究指導	吉村 正		
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	社会保障政策論研究指導	植村 尚史		
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	予防医学研究指導	町田 和彦		
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	幼少児福祉教育論研究指導	前橋 明		
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	緩和医療学研究指導	小野 充一		
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	障害児福祉論研究指導	川村 はつ子		
修士(2年制)	研究指導	臨床心理学	心身医学研究指導	野村 忍		
修士(2年制)	研究指導	臨床心理学	認知行動カウンセリング学研究指導	根建 金男		

課程	科目区分	研究領域・コース名	科目名	単位	担当教員名	備考
修士(2年制)	研究指導	臨床心理学	学校カウンセリング心理学研究指導		菅野 純	
修士(2年制)	研究指導	臨床心理学	心理臨床学研究指導		山崎 久美子	
修士(2年制)	研究指導	臨床心理学	行動臨床心理学研究指導		嶋田 洋徳	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	感性認知科学研究指導		齋藤 美穂	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	安全人間工学研究指導		石田 敏郎	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	福祉工学研究指導		藤本 浩志	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	システム人間科学研究指導		戸川 達男	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	情報処心理学研究指導		中島 義明	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	社会的実践認知科学研究指導		宮崎 清孝	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	心理行動学研究指導		鈴木 晶夫	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	言語情報科学研究指導		菊池 英明	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	知識情報科学研究指導		松崎 辰巳	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	人間生体機能動態学研究指導		宮崎 正則	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	感覚情報処心理学研究指導		百瀬 桂子	
修士(2年制)	研究指導	情報科学	教育実践学研究指導		浅田 匡	
修士(2年制)	研究指導	情報科学	情報意味論研究指導		岩坪 秀一	
修士(2年制)	研究指導	情報科学	情報コミュニケーション科学研究指導		金子 孝夫	
修士(2年制)	研究指導	情報科学	情報コミュニケーションシステム研究指導		金 群	
修士(2年制)	研究指導	情報科学	ネットワーク情報システム論研究指導		向後 千春	
修士(2年制)	研究指導	情報科学	情報コミュニケーション技術論研究指導		スコット ダグラス	
修士(2年制)	研究指導	情報科学	インターネット科学研究指導		永岡 慶三	
修士(2年制)	研究指導	情報科学	教育開発論研究指導		西村 昭治	
修士(2年制)	研究指導	情報科学	教育コミュニケーション学研究指導		野嶋 栄一郎	
修士(2年制)	演習	地域・地球環境科学	環境管理計画学演習(1)	4	保崎 則雄	
修士(2年制)	演習	地域・地球環境科学	環境管理計画学演習(2)	4	天野 正博	
修士(2年制)	演習	地域・地球環境科学	人口学演習(1)	4	阿藤 誠	
修士(2年制)	演習	地域・地球環境科学	人口学演習(2)	4	阿藤 誠	
修士(2年制)	演習	地域・地球環境科学	生物圏生態学演習(1)	4	太田 俊二	
修士(2年制)	演習	地域・地球環境科学	生物圏生態学演習(2)	4	太田 俊二	
修士(2年制)	演習	地域・地球環境科学	環境生態学演習(1)	4	森川 靖	
修士(2年制)	演習	地域・地球環境科学	環境生態学演習(2)	4	森川 靖	
修士(2年制)	演習	地域・地球環境科学	環境社会学演習(1)	4	鳥越 皓之	
修士(2年制)	演習	地域・地球環境科学	環境社会学演習(2)	4	鳥越 皓之	
修士(2年制)	演習	地域・地球環境科学	社会人類学演習(1)	4	矢野 敬生	
修士(2年制)	演習	地域・地球環境科学	社会人類学演習(2)	4	矢野 敬生	
修士(2年制)	演習	人間行動・環境科学	学習動機づけ論演習(1)	4	青柳 肇	
修士(2年制)	演習	人間行動・環境科学	学習動機づけ論演習(2)	4	青柳 肇	
修士(2年制)	演習	人間行動・環境科学	発達行動学演習(1)	4	根ヶ山 光一	
修士(2年制)	演習	人間行動・環境科学	発達行動学演習(2)	4	根ヶ山 光一	
修士(2年制)	演習	人間行動・環境科学	環境心理学演習(1)	4	佐古 順彦	
修士(2年制)	演習	人間行動・環境科学	環境心理学演習(2)	4	佐古 順彦	
修士(2年制)	演習	人間行動・環境科学	建築計画学演習(1)	4	佐野 友紀	
修士(2年制)	演習	人間行動・環境科学	建築計画学演習(2)	4	佐野 友紀	
修士(2年制)	演習	文化・社会環境科学	産業職業社会学演習(1)	4	河西 宏祐	

課程	科目区分	研究領域・コース名	科目名	単位	担当教員名	備考
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	産業職業社会学演習(2)	4	河西 宏祐	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	文化生態学演習(1)	4	蔵持 不三也	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	文化生態学演習(2)	4	蔵持 不三也	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	アジア社会論演習(1)	4	店田 廣文	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	アジア社会論演習(2)	4	店田 廣文	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	移住論演習(1)	4	森本 豊富	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	移住論演習(2)	4	森本 豊富	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	家族社会学演習(1)	4	池岡 義孝	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	家族社会学演習(2)	4	池岡 義孝	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	都市社会学演習(1)	4	臼井 恒夫	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	都市社会学演習(2)	4	臼井 恒夫	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	科学史科学哲学演習(1)	4	加藤 茂生	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	科学史科学哲学演習(2)	4	加藤 茂生	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	日本物質文化論演習(1)	4	谷川 章雄	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	日本物質文化論演習(2)	4	谷川 章雄	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	フランス表象文化論演習(1)	4	中村 要	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	フランス表象文化論演習(2)	4	中村 要	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	ドイツ政治社会文化論演習(1)	4	村上 公子	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	ドイツ政治社会文化論演習(2)	4	村上 公子	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	技術史・技術文化論演習(1)	4	余語 琢磨	
修士(2年制)演習	文化・社会環境科学	文化・社会環境科学	技術史・技術文化論演習(2)	4	余語 琢磨	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	生体発達科学演習(1)	4	木村 一郎	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	生体発達科学演習(2)	4	木村 一郎	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	生体構造学演習(1)	4	小室 輝昌	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	生体構造学演習(2)	4	小室 輝昌	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	生体機能学演習(1)	4	今泉 和彦	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	生体機能学演習(2)	4	今泉 和彦	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	神経内分泌学演習(1)	4	山内 兄人	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	神経内分泌学演習(2)	4	山内 兄人	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス演習(1)	4	鈴木 秀次	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス演習(2)	4	鈴木 秀次	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	統合生理学演習(1)	4	永島 計	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	統合生理学演習(2)	4	永島 計	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	応用免疫学演習(1)	4	鈴木 克彦	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	応用免疫学演習(2)	4	鈴木 克彦	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	健康医学演習(1)	4	河手 典彦	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	健康医学演習(2)	4	河手 典彦	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	応用健康科学演習(1)	4	竹中 晃二	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	応用健康科学演習(2)	4	竹中 晃二	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	医療人類学演習(1)	4	辻内 琢也	
修士(2年制)演習	健康・生命医科学	健康・生命医科学	医療人類学演習(2)	4	辻内 琢也	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	障害者支援論演習(1)	4	山内 繁	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	障害者支援論演習(2)	4	山内 繁	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	福祉産業学演習(1)	4	可部 明克	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	福祉産業学演習(2)	4	可部 明克	

課程	科目区分	研究領域・コース名	科目名	単位	担当教員名	備考
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	老年社会福祉学演習(1)	4	加瀬 裕子	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	老年社会福祉学演習(2)	4	加瀬 裕子	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	バイオエシックス演習(1)	4	土田 友章	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	バイオエシックス演習(2)	4	土田 友章	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント論演習(1)	4	吉村 正	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント論演習(2)	4	吉村 正	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	社会保障政策論演習(1)	4	植村 尚史	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	社会保障政策論演習(2)	4	植村 尚史	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	予防医学演習(1)	4	町田 和彦	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	予防医学演習(2)	4	町田 和彦	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	福祉教育論演習(1)	4	前橋 明	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	福祉教育論演習(2)	4	前橋 明	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	緩和医療学演習(1)	4	小野 充一	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	緩和医療学演習(2)	4	小野 充一	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	障害児福祉論演習(1)	4	川名 はつ子	
修士(2年制)演習	健康福祉科学	健康福祉科学	障害児福祉論演習(2)	4	川名 はつ子	
修士(2年制)演習	臨床心理学	臨床心理学	心身医学演習(1)	4	野村 忍	
修士(2年制)演習	臨床心理学	臨床心理学	心身医学演習(2)	4	野村 忍	
修士(2年制)演習	臨床心理学	臨床心理学	認知行動カウンセリング学演習(1)	4	根建 金男	
修士(2年制)演習	臨床心理学	臨床心理学	認知行動カウンセリング学演習(2)	4	根建 金男	
修士(2年制)演習	臨床心理学	臨床心理学	学校カウンセリング学演習(1)	4	菅野 純	
修士(2年制)演習	臨床心理学	臨床心理学	学校カウンセリング学演習(2)	4	菅野 純	
修士(2年制)演習	臨床心理学	臨床心理学	心理臨床学演習(1)	4	山崎 久美子	
修士(2年制)演習	臨床心理学	臨床心理学	心理臨床学演習(2)	4	山崎 久美子	
修士(2年制)演習	臨床心理学	臨床心理学	行動臨床心理学演習(1)	4	嶋田 洋徳	
修士(2年制)演習	臨床心理学	臨床心理学	行動臨床心理学演習(2)	4	嶋田 洋徳	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	感性認知科学演習(1)	4	齋藤 美穂	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	感性認知科学演習(2)	4	齋藤 美穂	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	安全人間工学演習(1)	4	石田 敏郎	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	安全人間工学演習(2)	4	石田 敏郎	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	福祉工学演習(1)	4	藤本 浩志	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	福祉工学演習(2)	4	藤本 浩志	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	システム人間科学演習(1)	4	戸川 達男	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	システム人間科学演習(2)	4	戸川 達男	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	情報処理心理学演習(1)	4	中島 義明	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	情報処理心理学演習(2)	4	中島 義明	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	社会的実践認知科学演習(1)	4	宮崎 清孝	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	社会的実践認知科学演習(2)	4	宮崎 清孝	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	心理行動学演習(1)	4	鈴木 晶夫	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	心理行動学演習(2)	4	鈴木 晶夫	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	言語情報科学演習(1)	4	菊池 英明	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	言語情報科学演習(2)	4	菊池 英明	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	知識情報科学演習(1)	4	松居 辰則	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	知識情報科学演習(2)	4	松居 辰則	
修士(2年制)演習	感性認知情報システム	感性認知情報システム	人間生体機能動態学演習(1)	4	宮崎 正己	

課程	科目区分	研究領域・コース名	科目名	単位	担当教員名	備考
修士(2年制)	演習	感性認知情報システム	人間生体機能動態学演習(2)	4	高崎 正己	
修士(2年制)	演習	感性認知情報システム	感覚情報処理学演習(1)	4	百瀬 桂子	
修士(2年制)	演習	感性認知情報システム	感覚情報処理学演習(2)	4	百瀬 桂子	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	教育実践学演習(1)	4	浅田 匡	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	教育実践学演習(2)	4	岩坪 秀一	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	情報意味論演習(1)	4	岩坪 秀一	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	情報意味論演習(2)	4	岩坪 秀一	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	情報コミュニケーション科学演習(1)	4	金子 孝夫	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	情報コミュニケーション科学演習(2)	4	金子 孝夫	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	ネットワーク情報システム学演習(1)	4	金 群	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	ネットワーク情報システム学演習(2)	4	金 群	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	インストラクショナルデザイン論演習(1)	4	向後 千春	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	インストラクショナルデザイン論演習(2)	4	向後 千春	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	情報コミュニケーション技術論演習(1)	4	スコット ダグラス	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	情報コミュニケーション技術論演習(2)	4	スコット ダグラス	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	情報工学演習(1)	4	永岡 慶三	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	情報工学演習(2)	4	永岡 慶三	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	教育情報工学演習(1)	4	西村 昭治	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	教育情報工学演習(2)	4	西村 昭治	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	インターネット科学演習(1)	4	野嶋 栄一郎	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	インターネット科学演習(2)	4	野嶋 栄一郎	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	教育開発論演習(1)	4	保崎 則雄	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	教育開発論演習(2)	4	保崎 則雄	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	教育コミュニケーション学演習(1)	4	保崎 則雄	
修士(2年制)	演習	教育コミュニケーション	教育コミュニケーション学演習(2)	4	保崎 則雄	
修士(2年制)	講義	地域・地球環境科学	環境管理計画学特論	2	天野 正博	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	地域・地球環境科学	地球生態学特論	2	天野 正博	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	地域・地球環境科学	環境生態学特論	2	森田 靖	奇数年度開講・2007年度休講
修士(2年制)	講義	地域・地球環境科学	環境社会学特論	2	鳥越 皓之	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	地域・地球環境科学	民族誌学特論	2	矢野 敬生	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	地域・地球環境科学	人間環境変遷特論	2	井内 美郎	
修士(2年制)	講義	地域・地球環境科学	地域資源特論	2	柏 雅之	
修士(2年制)	講義	地域・地球環境科学	動物行動学特論	2	三浦 慎悟	オンデマンド授業
修士(2年制)	講義	人間行動・環境科学	学習動機づけ特論	2	青柳 肇	
修士(2年制)	講義	人間行動・環境科学	発達行動学特論	2	根ヶ山 光一	1年制合同科目・オンデマンド授業
修士(2年制)	講義	人間行動・環境科学	学習環境心理学特論	2	佐古 順彦	
修士(2年制)	講義	人間行動・環境科学	建築計画学特論	2	佐古 友紀	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	人間行動・環境科学	行動理論特論	2	木村 裕	
修士(2年制)	講義	人間行動・環境科学	発達心理学特論	2	大藪 泰	1年制合同科目
修士(2年制)	講義	人間行動・環境科学	建築環境学特論	2	小西 隆夫	
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	産業職業社会学特論	2	河島 宏祐	1年制合同科目・オンデマンド授業
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	歴史人類学特論	2	蔵持 不三也	
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	アジア地域研究特論	2	店田 廣文	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	移民研究特論	2	森本 豊富	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	家族社会学特論	2	池岡 義孝	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	都市社会学特論	2	臼井 恒夫	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	科学史科学哲学特論	2	加藤 茂生	偶数年度開講

課程	科目区分	研究領域・コース名	科目名	単位	担当教員名	備考
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	考古学特論	2	谷川 章雄	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	フランス表象文化史研究特論	2	中村 要	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	ドイツ近代国民国家特論	2	村上 公子	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	生活文化史研究特論	2	余語 琢磨	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	社会学説特論	2	西原 和久	
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	自然人類学特論	2	藤田 尚	
修士(2年制)	講義	文化・社会環境科学	スペイン社会文化特論	2	竹中 宏子	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	健康・生命医科学	生体発達科学特論	2	木村 一郎	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	健康・生命医科学	細胞組織学特論	2	小室 輝昌	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	健康・生命医科学	生体機能学特論	2	今泉 和彦	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	健康・生命医科学	神経内分沁学特論	2	山内 兄人	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス特論	2	鈴木 秀次	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	健康・生命医科学	神経機能学特論	2	永島 計	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	健康・生命医科学	免疫学特論	2	鈴木 克彦	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	健康・生命医科学	健康医学特論	2	河手 典彦	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	健康・生命医科学	応用健康科学特論	2	竹中 琢也	1年制合同科目・オンデマンド授業
修士(2年制)	講義	健康・生命医科学	ヘルスプロモーション特論	2	辻内 晃也	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	障害者支援論	2	山内 繁	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	福祉ロボット工学特論	2	可部 明克	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	老年社会福祉学特論	2	加瀬 裕子	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	生命医療倫理学特論	2	土田 友章	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント特論	2	吉村 正	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	社会保障政策特論	2	植村 尚史	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	健康福祉管理特論	2	扇原 淳	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	予防医学特論	2	町田 和彦	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	福祉教育特論	2	前橋 明	1年制合同科目
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	緩和医療学特論	2	小野 充一	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	障害者福祉特論	2	小野 充一	奇数年度開講・1年制合同科目
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	児童家庭福祉特論	2	川名 はつ子	1年制合同科目
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	福祉援助特論	2	川村 匡由	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	比較高齢社会特論	2	川村 匡由	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	精神保健福祉特論	2	田中 英樹	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	健康福祉科学	健康福祉支援工学特論	2	島山 卓朗	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	臨床心理学	社会病理学特論	2	野村 忍	1年制合同科目
修士(2年制)	講義	臨床心理学	臨床心理学特論Ⅱ	2	佐々木 和義	
修士(2年制)	講義	臨床心理学	臨床心理学特論Ⅰ	2	根建 金男	
修士(2年制)	講義	臨床心理学	臨床心理学面接法特論Ⅰ	2	菅野 純	
修士(2年制)	講義	臨床心理学	教育臨床心理学特論	2	菅野 純	学部合併科目
修士(2年制)	講義	臨床心理学	臨床心理学査定特論Ⅰ	2	山崎 久美子	
修士(2年制)	講義	臨床心理学	臨床心理学特論Ⅰ	2	鈴木 伸一	
修士(2年制)	講義	臨床心理学	臨床心理学面接法特論Ⅱ	2	嶋田 洋徳	
修士(2年制)	講義	臨床心理学	行動療法特論	2	嶋田 洋徳	学部合併科目
修士(2年制)	実習	臨床心理学	臨床心理学基礎実習Ⅰ	2	菅野 純	
修士(2年制)				2	根建 金男	

課程	科目区分	研究領域・コース名	科目名	単位	担当教員名	備考
修士(2年制)	実習	臨床心理学	臨床心理学基礎実習Ⅱ	2	菅野純 根建金男	
修士(2年制)	実習	臨床心理学	臨床心理学実習Ⅰ	2	山崎久美子 嶋田洋徳 鈴木伸一	
修士(2年制)	実習	臨床心理学	臨床心理学実習Ⅱ	2	山崎久美子 嶋田洋徳 鈴木伸一	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	臨床心理学	心理療法特論Ⅰ	2	菅野純 根建金男 野村忍 山崎久美子 嶋田洋徳	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	臨床心理学	心理療法特論Ⅱ	2	三浦正江	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	臨床心理学	学校臨床心理学特論	2	小林正幸	1年制合同科目
修士(2年制)	講義	臨床心理学	行動医学特論	2	熊野宏昭	
修士(2年制)	講義	臨床心理学	社会心理学特論	2	坂本真士	
修士(2年制)	講義	臨床心理学	心理学研究特論	2	福井至	
修士(2年制)	講義	臨床心理学	心理統計法特論	2	逸見功	
修士(2年制)	講義	臨床心理学	精神医学特論	2	赤穂理絵	
修士(2年制)	講義	臨床心理学	心身医学特論	2	野村忍	
修士(2年制)	実習	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅰ	2	菅野純	
修士(2年制)	実習	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅱ	2	野村忍	
修士(2年制)	実習	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅲ	2	根建金男	
修士(2年制)	実習	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅳ	2	山崎久美子	
修士(2年制)	実習	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅴ	2	嶋田洋徳	
修士(2年制)	実習	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅵ	2	鈴木伸一	
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	感性心理学特論	2	斎藤美穂	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	安全人間工学特論	2	石田敏郎	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	生活支援工学特論	2	藤本浩志	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	生体システム工学	2	戸川達男	
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	情報処理心理学特論	2	中島義明	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	教授学習過程特論	2	宮崎清孝	1年制合同科目
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	感情心理学特論	2	鈴木晶夫	1年制合同科目
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	言語情報科学特論	2	菊池英明	1年制合同科目
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	知識情報科学特論	2	松居辰則	1年制合同科目
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	人間生体機能動態学	2	宮崎正己	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	感覚情報処理学特論	2	百原桂子	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	視覚デザイン	2	市原茂	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	感性認知情報システム	生体心理学特論	2	三嶋博之	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	教師学特論	2	浅田匡	
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	マルチメディアア特論	2	金子孝夫	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	ソフトウェア工学特論	2	金群	
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	科学英語論文作成法	2	グレイロバート	
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	科学英語論文口演法	2	グレイロバート	

課程	科目区分	研究領域・コース名	科目名	単位	担当教員名	備考
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン特論	2	向後 千春	1年制合同科目
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション技術特論	2	スコット ダグラス	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	教育情報工学特論	2	西岡 慶三	1年制合同科目・オンデマンド授業
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	インターネット科学特論	2	野嶋 昭治	1年制合同科目
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	教育開発特論	2	野嶋 栄一郎	1年制合同科目
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	言語教育方法特論	2	保崎 則雄	奇数年度開講
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	教育システム工学	2	赤堀 侃司	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	学習教授評価法	2	伊藤 秀子	偶数年度開講
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	学習科学特論	2	菅井 勝雄	
修士(2年制)	講義	教育コミュニケーション情報科学	情報メディア教育特論	2	森田 裕介	偶数年度開講
修士1年制コース	研究指導	教育臨床コース	学校臨床心理学研究指導		菅野 純	
修士1年制コース	研究指導	教育臨床コース	臨床認知発達学研究指導		佐々木 和義	
修士1年制コース	コース必修(演習)	教育臨床コース	学校臨床心理学演習(1)	4	菅野 純	
修士1年制コース	コース必修(演習)	教育臨床コース	臨床認知発達学演習(1)	4	佐々木 和義	
修士1年制コース	コース必修(実習)	教育臨床コース	心理教育臨床実習	2	菅野 純 佐々木 和義 鈴木 伸一	
修士1年制コース	コース必修(実習)	教育臨床コース	心理臨床事例実習	2	菅野 純 佐々木 和義 鈴木 伸一	
修士1年制コース	コース選択必修	教育臨床コース	教育心理学特論	2	青柳 肇	
修士1年制コース	コース選択必修	教育臨床コース	臨床認知発達学特論	2	佐々木 和義	
修士1年制コース	コース選択必修	教育臨床コース	臨床心理学特論III	2	山崎 久美子	
修士1年制コース	コース選択必修	教育臨床コース	特別支援教育特論	2	佐々木 和義	
修士1年制コース	コース選択必修	教育臨床コース	教育臨床査定特論	2	根建 金男	
修士1年制コース	コース選択必修	教育臨床コース	乳幼児発達心理学特論	2	井原 成男	
修士1年制コース	コース選択必修	教育臨床コース	教育開発特論	2	野嶋 栄一郎	2年制合同科目・オンデマンド授業
修士1年制コース	コース選択必修	教育臨床コース	発達行動学特論	2	根ヶ山 光一	2年制合同科目・オンデマンド授業
修士1年制コース	コース選択必修	教育臨床コース	インストラクショナルデザイン特論	2	向後 千春	2年制合同科目
修士1年制コース	コース選択必修	教育臨床コース	学校臨床心理学特論	2	小林 正幸	2年制合同科目
修士1年制コース	コース選択必修	教育臨床コース	応用健康科学特論	2	竹中 晃二	2年制合同科目・オンデマンド授業
修士1年制コース	コース選択必修	教育臨床コース	インターネット科学特論	2	西村 昭治	2年制合同科目・オンデマンド授業
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	家族臨床心理学特論	2	菅野 純	オンデマンド授業
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	学校臨床生徒指導学特論	2	嶋田 洋徳	オンデマンド授業
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	教育集団心理学	2	岡安 孝弘	
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	生徒指導・進路指導特論	2	浅田 匡	学部(eスクール)合併科目・オンデマンド授業
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	教授学習過程特論	2	高崎 清孝	2年制合同科目
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	発達科学特論	2	大橋 泰	2年制合同科目
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	福祉教育特論	2	前橋 明	2年制合同科目
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	障害者福祉特論	2	小野 充一	奇数年度開講・2年制合同科目
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	産業職業社会学特論	2	河西 宏祐	2年制合同科目・オンデマンド授業
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	知識情報科学特論	2	松居 忍則	2年制合同科目
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	社会病理学特論	2	野村 辰	2年制合同科目
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	感情心理学特論	2	鈴木 晶夫	2年制合同科目
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	言語教育方法特論	2	保崎 則雄	2年制合同科目

課程	科目区分	研究領域・コース名	科目名	単位	担当教員名	備考
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	言語情報科学特論	2	菊池 英明	2年制合同科目・オンデマンド授業
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	児童家庭福祉特論	2	川名 はつ子	2年制合同科目
修士1年制コース	コース選択	教育臨床コース	生体機能学特論	2	今泉 和彦	奇数年度開講・2年制合同科目・オンデマンド授業
博士後期	研究指導	地域・地球環境科学	環境管理計画学研究指導		天野 正博	
博士後期	研究指導	地域・地球環境科学	人口学研究指導		阿藤 誠	
博士後期	研究指導	地域・地球環境科学	環境生態学研究指導		森川 靖	
博士後期	研究指導	地域・地球環境科学	環境社会学研究指導		鳥越 皓之	
博士後期	研究指導	地域・地球環境科学	発達行動学研究指導		根ヶ山 光一	
博士後期	研究指導	文化・社会環境科学	産業職業社会学研究指導		河西 宏祐	
博士後期	研究指導	文化・社会環境科学	文化生態学研究指導		蔵持 不三也	
博士後期	研究指導	文化・社会環境科学	アジア社会論研究指導		店田 廣文	
博士後期	研究指導	文化・社会環境科学	移民論研究指導		森本 豊富	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	生体発達科学研究指導		木村 一郎	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	生体構造学研究指導		小室 輝昌	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	生体機能学研究指導		今泉 和彦	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	神経内分泌学研究指導		山内 秀人	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス研究指導		鈴木 秀次	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	統合生理学研究指導		永島 計	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	応用健康科学研究指導		竹中 晃二	
博士後期	研究指導	健康福祉科学	支援工学研究指導		山内 繁	
博士後期	研究指導	健康福祉科学	予防医学研究指導		町田 和彦	
博士後期	研究指導	臨床心理学	心身医学研究指導		野村 忍	
博士後期	研究指導	臨床心理学	認知行動カウゼリング学研究指導		根建 金男	
博士後期	研究指導	臨床心理学	行動臨床心理学研究指導		嶋田 洋徳	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	感性認知科学研究指導		齋藤 美穂	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	安全人間工学研究指導		石田 敏郎	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	福祉工学研究指導		藤本 浩志	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	システム人間科学研究指導		戸川 達男	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	情報処理心理学研究指導		中島 義明	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	心理行動学研究指導		鈴木 晶夫	
博士後期	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学学研究指導		金子 孝夫	
博士後期	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学研究指導		金 群	
博士後期	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	教育情報工学研究指導		永岡 慶三	
博士後期	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	教育開発論研究指導		野嶋 栄一郎	

スポーツ科学研究領域設置科目 (2005年度以前入学者対象)

課程	科目区分	研究領域	科目名	単位	担当教員名	備考
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	武道論研究指導		志々田 文明	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	スポーツ人類学研究指導		寒川 恒夫	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	スポーツ倫理学・教育学研究指導		友添 秀則	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	スポーツメテオロロジー論研究指導		リー トンブソン	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	健康スポーツ論研究指導		中村 好男	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	スポーツビジネスマネジメント論研究指導		原田 宗彦	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	運動免疫学研究指導		赤間 高雄	

課程	科目区分	研究領域・コース名	科目名	単位	担当教員名	備考
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	スポーツ神経精神医学研究指導		内田 直	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	身体形態学研究指導		加藤 清忠	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	スポーツ健康管理学研究指導		坂本 静男	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	運動器スポーツ医学研究指導		鳥居 俊	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	スポーツ外科学研究指導		福林 徹	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	スポーツ神経科学研究指導		彼末 一之	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	生体ダイナミクス研究指導		川上 泰雄	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	運動栄養学研究指導		鈴木 正成	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	運動生化学研究指導		樋口 満	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	バイオメカニクス研究指導		福永 哲夫	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	スポーツ生理学研究指導		村岡 功	
修士(2年制)	演習	スポーツ	武道論演習(1)	4	志々田 文明	
修士(2年制)	演習	スポーツ	武道論演習(2)	4	志々田 文明	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ人類学演習(1)	4	寒川 恒夫	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ人類学演習(2)	4	寒川 恒夫	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ倫理学・教育学演習(1)	4	友添 秀則	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ倫理学・教育学演習(2)	4	友添 秀則	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツメディア論演習(1)	4	リー トンブソン	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツメディア論演習(2)	4	リー トンブソン	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツメディア論演習(1)	4	中村 好男	
修士(2年制)	演習	スポーツ	健康スポーツ論演習(2)	4	中村 好男	
修士(2年制)	演習	スポーツ	健康スポーツ論演習(1)	4	原田 宗彦	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツビジネスマネジメント論演習(1)	4	原田 宗彦	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツビジネスマネジメント論演習(2)	4	原田 宗彦	
修士(2年制)	演習	スポーツ	運動免疫学演習(1)	4	赤間 高雄	
修士(2年制)	演習	スポーツ	運動免疫学演習(2)	4	赤間 高雄	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ神経精神医学演習(1)	4	内田 直	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ神経精神医学演習(2)	4	内田 直	
修士(2年制)	演習	スポーツ	身体形態学演習(1)	4	加藤 清忠	
修士(2年制)	演習	スポーツ	身体形態学演習(2)	4	加藤 清忠	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ健康管理学演習(1)	4	坂本 静男	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ健康管理学演習(2)	4	坂本 静男	
修士(2年制)	演習	スポーツ	運動器スポーツ医学演習(1)	4	鳥居 俊	
修士(2年制)	演習	スポーツ	運動器スポーツ医学演習(2)	4	鳥居 俊	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ外科学演習(1)	4	福林 徹	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ外科学演習(2)	4	福林 徹	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ神経科学演習(1)	4	彼末 一之	
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ神経科学演習(2)	4	彼末 一之	
修士(2年制)	演習	スポーツ	生体ダイナミクス演習(1)	4	川上 泰雄	
修士(2年制)	演習	スポーツ	生体ダイナミクス演習(2)	4	川上 泰雄	
修士(2年制)	演習	スポーツ	運動栄養学演習(1)	4	鈴木 正成	
修士(2年制)	演習	スポーツ	運動栄養学演習(2)	4	鈴木 正成	
修士(2年制)	演習	スポーツ	運動生化学演習(1)	4	樋口 満	
修士(2年制)	演習	スポーツ	運動生化学演習(2)	4	樋口 満	
修士(2年制)	演習	スポーツ	バイオメカニクス演習(1)	4	福永 哲夫	
修士(2年制)	演習	スポーツ	バイオメカニクス演習(2)	4	福永 哲夫	

課程	科目区分	研究領域・コース名	科目名	単位	担当教員名	備考
修士(2年制)	演習	スポーツ	スポーツ生理学演習(1)	4	村岡 功	
修士(2年制)	研究指導	スポーツ	スポーツ生理学演習(2)	4	村岡 功	
博士後期	研究指導	スポーツ	スポーツ人類学研究指導		寒川 恒夫	
博士後期	研究指導	スポーツ	健康スポーツ論研究指導		中村 好男	
博士後期	研究指導	スポーツ	身体形態学研究指導		加藤 清忠	
博士後期	研究指導	スポーツ	スポーツ外科学研究指導		福林 徹	
博士後期	研究指導	スポーツ	スポーツ神経科学研究指導		彼末 一之	
博士後期	研究指導	スポーツ	生体ダイナミクス研究指導		川上 泰雄	
博士後期	研究指導	スポーツ	運動栄養学研究指導		鈴木 正成	
博士後期	研究指導	スポーツ	運動生化学研究指導		樋口 満	
博士後期	研究指導	スポーツ	バイオメカニクス研究指導		福永 哲夫	
博士後期	研究指導	スポーツ	スポーツ生理学研究指導		村岡 功	
博士後期	研究指導	スポーツ	スポーツ心理学研究指導		山崎 勝男	

早稲田大学はハラスメント防止に真摯に取り組んでいます

本学では『早稲田大学におけるハラスメント防止に関するガイドライン』を制定し、相談を受け付け、その解決に取り組むことはもちろん、パンフレットやWebサイト等での広報や、講演会等の催し物をとおして、啓発・防止活動を実施しています。

あなた自身が被害を受けた時、友人からの相談を受けた時、また取り組みについて質問や意見がある時には、気軽に相談窓口ご連絡してください。専門知識を持つスタッフが対応します。

ハラスメント理解のためのQ & A

<目的>

Qなぜ、早稲田大学では「ハラスメント防止に関するガイドライン」を制定したのですか？

A すべての学生および教職員等が個人として尊重され、快適な教育・研究・職場環境の中で生活できるようにするためです。本学では1999年4月の「男女雇用機会均等法」などの法改正を背景にセクシュアル・ハラスメント対策を実施してきました。その実績をふまえ、2005年度より取り組みを拡大し、アカデミック・ハラスメントやパワー・ハラスメントにも対応しています。

<解説>

Qハラスメントって何で問題なのですか？

A 人権侵害だからです。ごく気軽な気持ちでの行為や言動が相手にとっては耐えられない苦痛となっていることもあります。なぜそうなのか？を理解するきっかけとして、大学ではパンフレットを作成し、Webサイトにさまざまな情報を掲載していますので、ぜひ活用してください。

Q学生がハラスメントにあうのは、どんな場面でのどの程度あるのですか？

A きわめて残念なことですが、授業がアカデミック・ハラスメントの場、サークルなどがセクシュアル・ハラスメントの場やパワー・ハラスメントの場となり得る可能性があります。2003年6月の本学「学生生活調査」結果では、少なくとも学生が「セクシュアル・ハラスメント被害を受けている」と感じていました。

Q学生が加害者になることもありますか？

A はい、学生が加害者になることもあります。例えばあなたがサークルのコンパで下ネタを乱発したり、しつこく交際を迫ったりしたために、メンバーの人が不快になり、サークルをやめようかと悩むような場合は、セクシュアル・ハラスメントになりえます。

<相談>

Q大学の相談窓口に行くとは何がしてもらえるのですか？

A まず、あなたの悩んでいるハラスメントの事情についてインターカー（相談員）が詳しく話をうかがいます。今までの実績では、問題の所在を明確にする過程で気持ちが整理され、この段階で解決に至るケースがかなりあります。相手方になんらかの謝罪を求めたいというような場合は、次のステップ<対応策の検討>へ進み、防止委員会の苦情処理案件の対象と認定されると、当事者から話を聞くなどして相手方との調整等が始まります。解決策はケース・バイ・ケースで多様です。

Q相談すると秘密がもれたり、相手方から嫌がらせを受けたりするのではないかと不安なのですか？

A ガイドラインで秘密堅持と被害者への報復等の禁止が明確に定められ、安心していただけるシステムになっています。また、外部の相談窓口もWebサイトで紹介していますので参考になさってください。

■相談窓口 ハラスメント防止委員会室

【開室時間】 月～金 9:00～17:00
土 9:00～14:00

相談は、電話・メール・Fax・手紙、どの方法でもOK。来室前なら匿名でも大丈夫です。あなたのプライバシーと意向を最大限に尊重します。来室前に必ず電話で予約をしてください。

【URL】 <http://www.waseda.jp/stop/index.html>

【E-mail】 stop@list.waseda.jp

【TEL】 03-5286-9824

【FAX】 03-5286-9825

〒169-8050 新宿区戸塚町1-104 24-8号館2階

早稲田大学大学院人間科学研究科

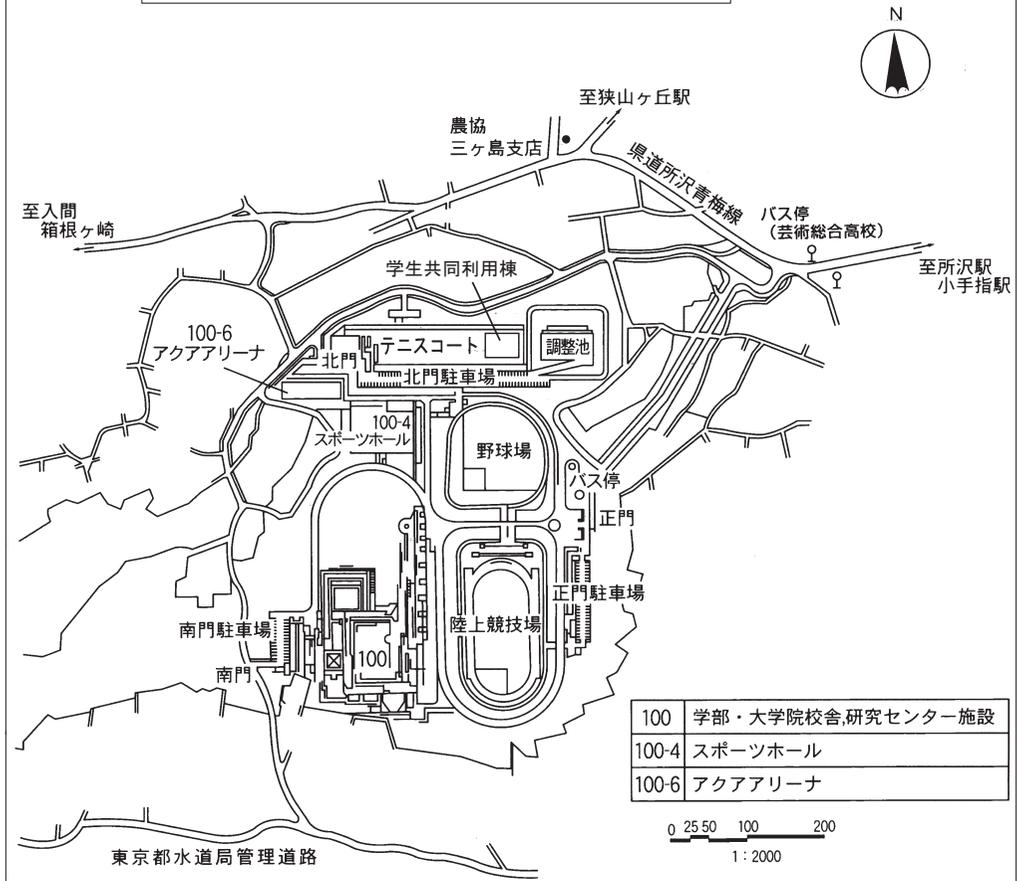
〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15

電話 04-2947-6703 (ダイヤルイン)

FAX 04-2947-6801

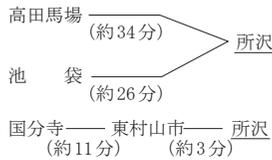
<http://www.waseda.jp/human/graduate/>

早稲田大学所沢キャンパス案内図

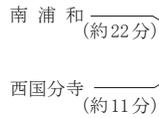


〈交通案内〉

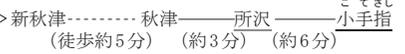
〔西武線〕



〔JR武蔵野線〕



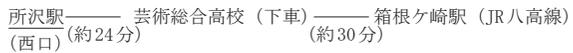
〔西武池袋線〕



〔西武バス〕(早稲田大学行)



〔西武バス〕(三ヶ島農協 宮寺 箱根ヶ崎行)





早稲田大学大学院人間科学研究科

GRADUATE SCHOOL of HUMAN SCIENCES
WASEDA UNIVERSITY